
COBALT-SERIES
ハイスクール・オーラバスター
炎獄の
ディアーナ
（前編）
若木未生
集英社

誰が何のためにだかわからないが、夜道で髪の毛を切られる事件が起きた。諒と冴子は、忍の命令で髪切り事件についての情報収集のため、亮介と亜衣のいる高校へ転校してきた。そんなとき、十九郎が夜道で髪切り魔に出会った。正体は傀儡。十九郎はこともなく退治した。裏で操る者は？　忍を中心に髪切り魔の対策を立てた直後、亮介を慕う瑞穂が髪を切られ、命までねらわれるはめになった。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

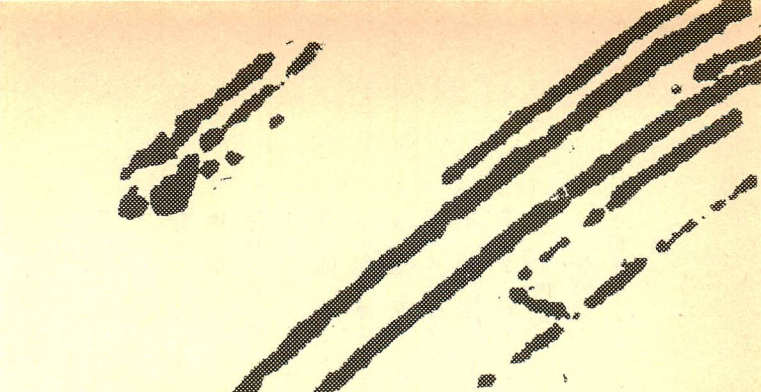
炎獄のディアーナ（前編）

若木未生

集英社

目次

炎獄のディアーナ（前編）
第一部
序章　夜の噂……13
1　スクール・ガール……21
2　開幕……47
3　伝承……67
4　迷宮……92
5　スパイラル・ハート……109
6　『君に話せたらいいのに』……131
7　予感……148
8　光闇交錯（ひかりやみこうさく）……167
9　炎獄の……190
あとがき……208



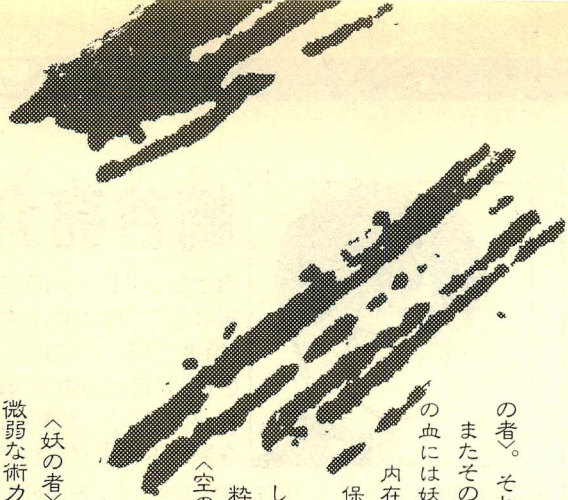
鬼とも妖怪とも呼ばれ伝説に語られてきた人外の存在――〈妖の者〉が目立って活動するようになったのは、ここ十数年のことなのだという。

九百年の昔に彼らの天敵たる〈空の者〉との大戦に敗れて以来、〈妖の者〉の多くはなりをひそめ、世に出るのはごくわずかな残党のみであった。しかし現代に至り、妖者総帥「九那妃」復活の報が期待と確信をもって彼らのうちに流布され、それを刺激として〈妖の者〉は勢力を回復しつつあるのだ。

〈妖の者〉の形態は千差万別だが、共通する点が二つある。一つは、本体が精神体であるということ。いま一つは、人を喰らうということ。彼らの多くは人間の身体にとり憑き、人の社会にまぎれてひっそりと生息する。

そして古より隠密裏に伝承された真理。人を喰らうのが〈妖〉であるならば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

選ばれた血統の、選ばれた赤子の内にかぎり転生を為す〈空



の者〉。それは神の降臨とさえ呼ばれる奇跡である。

またその血統を保ちつづけた一族を、斎伽の一族と呼ぶ。その血には妖者の「妖力」に対抗する超常能力「術力」の因子が内在し、一族の者は空者とはならずとも何らかの能力を保持した者、すなわち「術者」として空者に仕えていたと伝えられる。

しかし〈妖の者〉との大戦の後、一族の血は分かれ、純粋な血統はほぼ絶えたと言って良い。数百年にわたり〈空の者〉の降臨はなされず、術者の数は激減した。

そのような現代に、ただ一人転生した〈空の者〉がいる。空者総帥「伽羅王」、またの名を斎伽忍。弱冠十九歳にして一族の長を務める若者である。

〈妖の者〉の動きが活発になる一方、〈空の者〉に比べれば甚だ微弱な術力しか有さぬ術者数人が手中にあるのみという現状に、彼が何を思うか——うかがい知ることは、いかなる者にも許されなかった……



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めた〈術者〉グループの切札的存在。GF・亜衣との仲は〈春休み軽井沢ツアー〉で進展したが、彼を慕う下級生が現れて…。

私立高陵高校2年生、16才
誕生日　1月20日
血液型　A
星座　山羊座
身長　164cm
趣味　絵を描くこと、映画観賞（けっこうマニア）、読書
得意教科　英語、国語、数学
苦手教科　理科全般



水沢涼（みずさわりょう）

亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ（？）の〈術者〉。忍の指令で各地の高校を転々としているが、ある〈噂〉を追うため、再び亮介の高校に転入することになる。

高校2年生、16才
誕生日　8月1日
血液型　A
星座　獅子座
身長　182cm
趣味　食べること、散歩、日なたぼっこ
得意教科　体育、数学
苦手教科　英語

七瀬冴子（ななせさえこ）



強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。諒とはよく衝突するが、なぜか彼の行く先々に現れる。今回の〈噂〉は、彼女の身にも危険が及ぶ可能性があって…。

高校2年生、16才
誕生日　1月21日
血液型　B
星座　水瓶座

身長　166cm
趣味　料理、買い物、着飾ること
得意教科　英語、古文、家庭科
苦手教科　地理、生物

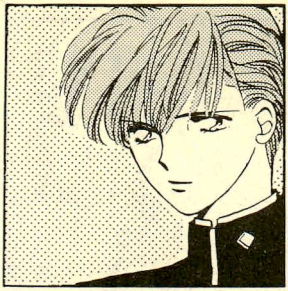
神原亜衣（かんばらあい）



亮介の同級生でGF。〈術者〉ではないが事情に通じ、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。軽井沢で亮介に告白されたものの、彼の鈍感さにはまだまだ苦労しそうで…。

私立高陵高校2年生、16才
誕生日　11月18日
血液型　AB
星座　蠍座

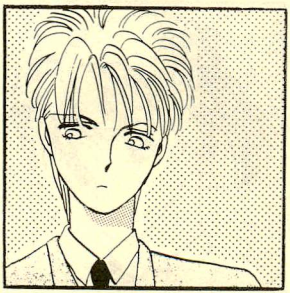
身長154cm
趣味　体操、詩集を読むこと
得意教科　物理、化学、数学
苦手教科　日本史



里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）

沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。偶然、〈噂〉の事件の現場に出くわし、〈発火〉の術が敵に有効だと気づく。だが、その能力を持つ〈術者〉は限られていて……。

私立祥英高校3年生、17才
誕生日　9月26日
血液型　A
星座　天秤座
身長　173cm
趣味　読書、ピアノ、乗馬、スポーツ観戦、料理など多彩
得意教科　英語、数学
苦手教科　？

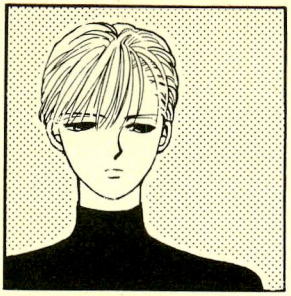


和泉希沙良（いずみきさら）

〈術者〉のひとりで諒に匹敵する功撃力を持つ。奔放な性格で、十九郎以外にはなかなか心を許さないのだが、なぜか亮介のことは気に入っている様子である。

都立新宿南高校2年生、16才
誕生日　11月29日
血液型　O
星座　射手座
身長　178cm
趣味　テニス、映画観賞、ファミコン（興奮してコントローラーをよく壊す）
得意教科　世界史、日本史、化学
苦手教科　国語、英語

牙（きば）



亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王〉の側近、〈使〉である。姿は変幻自在で、犬や猫になったりする。忍の命令には絶対服従。亮介には不思議となついている。

誕生日　？
血液型　なし
星座　？
身長　183cm
趣味　？

斎伽（さいが）　忍（しのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の全貌を把握しているのは彼だけらしい……。

誕生日　5月2日、あるいは5月30日
血液型　B
星座　牡牛座、あるいは双子座
身長　176cm
趣味　学問、電話、睡眠

イラスト／杜　真琴

炎獄のディアーナ（前編）

【第一部】

……天よ。
天よ。問うこと能わざるか。天よ、何故と。
我が希み、未だ千里の途。今をして何故と。
汝に問う。遥か億百の彼方。汝、天なる者に問う。
忍土にありて、我のみが夢を見つ。現世のさだめを知らずして。
愚かなりと、浄土にありて我を嗤いたるか。
汝、空なる者に問う。
空なる者に問う。——汝に問う、伽羅王よ。

序章　夜の噂

黒い猫が、ざわめく夜道を、人の流れに逆行しながら足早に進んでゆく。

にぎやかな音楽と派手なネオンの下をくぐりぬけ、酔客の足にかすりもせぬ身軽な動きで、その猫は表通りを横切って細い路地へ入りこんだ。ポリバケツの生ごみが異臭を放つ。空き缶があちこちに転がり、頭上では店の換気扇が唸りをあげている。

遠くから女たちの嬌声。

トパーズと同じ色の両眼をゆっくりと移動させ、黒猫は周囲の様子を観察したようだった。まるで闇の内まで透視するような視線は、しかし「彼」の目指すものをとらえずに終わった。

そのまま「彼」は裏通りをまっすぐに歩きだす。アルコールの匂い。カラオケの漏れる音。どこかでクラクション。煙草。

春先とはいえ、夜の底にはまだ冷気が溜まる。

吹きぬけた風に「彼」は一瞬足を止め、さらに街の奥へ進路を向けた。上弦の月が出てい

た。

六本木の一角に、そのマンションはある。

入居者の名は、建物のどこにも記されていない。十二階建てで、一階層につき部屋は七室ある。高級感あふれる造りを見ても、場所柄を考えても、それらの部屋が住人で埋まらぬはずはないのだが、しかしどの階を歩いても人の気配はまるで感じられない。ひやりとした空気が流れているだけだ。

そして、九階の東端に、九〇七号室の扉はある。

部屋の主の名を、斎伽忍という。

「請求書が来ていたよ。店のガラス代、テーブル代、食器、照明、カーペット、加えて駐車場に停めてあった車のフロントガラスが三枚、ボンネットがつぶれたものが二台、傷がついたものは七台、さらにタイヤとミラーとナンバープレート……」

実に事務的に、忍はそんなことを切り出した。電話の相手は不意の先制攻撃に、しばし言葉を失ったようだった。

ぱん、と冴子がソファのクッションを叩いた。ろくに埃も出ないが、これも一応、掃除の一環である。つづいてソファの脇に積まれた雑誌の山へ手をのばす。

居間の時計はそろそろ日付の変更を告げようとしている。真夜中だ。忍は一人がけのソファに身を沈めて、いつものように受話器を「愛でて」いる。楽しそうだなあ、と冴子は彼の声に耳をすました。

「必要経費？　時と場合によるだろう。『不必要』に被害を拡大した場合、それを『必要』経費と呼んでいいものか、僕にはあまり自信がないんだが。……何を惜しむって？　まさか。それは誤解だな。おまえがそれをやむにやまれぬ出費だと判断してこちらへまわしてくるのなら、僕は別に『不必要』であろうが『無駄』であろうが『役立たず』であろうが『捨てるも同然』であろうが、まったく援助を惜しむつもりはないよ」

電話のむこうから、ぎゃんぎゃんと反論が来る。表情も変えずに忍は言い足した。

「気を大きく持て、ということさ」

繁華街をぬけてしまって、「彼」は小さく息をついた。求める気配は一向にひっかかってこない。

あてどない歩き方をする黒猫に、鎖につながれた飼い犬がうるさく吠えたてた。相手にする気など、はじめからあるはずもない。冷ややかな一瞥だけを投げて、「彼」はシェパードを黙らせた。

と。

すぐ先を横切っていく足音があった。——ハイヒールだ。

夜道に女の一人歩き。素早く判断して「彼」は地面を蹴った。闇にまぎれ、その姿は見えなくなる。

フローリングの床に、靴底が音をたてる。忍の電話の邪魔をしないよう、冴子はしのび足でキッチンへ移動した。

こぢんまりとした居間に続いて、広めのダイニングキッチンがある。キッチンを通ってさらに奥へ向かうドアから先へは、入ることを許されていない。そこは忍の私的（プライベート）な生活空間なのだ。

忍の住まいは、このマンションに限らない。都内のあちこちに、個人名義で持っている部屋がいくつもあるのだという。ときおり彼がすっかり姿をくらましてしまうことがあるが、この部屋に戻らないときの忍がどんな生活を送っているのか、冴子は知らない。どこにいるのかもわからない。

現存するただひとりの〈空の者〉。空者総帥（そうすい）「伽羅王（からおう）」にして、斎伽の頂点に立つ者でもある。かつては——千年も昔には、幾人もの〈空の者〉が転生（てんせい）をくりかえし総帥・伽羅王を支え

て戦っていたのだと聞く。しかしそれは遠すぎる過去のことだ。今や彼らの転生は封じられて、おそらく取り戻すことはできない。

この春、斎伽忍は二十歳になる。

「では、今度こそ時間を厳守するように。……信用？　信用ならしているはずだが。……そうじゃない。早くおまえの顔を見たいだけだよ、馬鹿だな」

嘘をつけっ!!　と受話器から大声がとびだした。かまわず忍はそのまま電話を切り、ソファから立ち上がった。

背は高いが、高すぎるというほどでもない。均整がとれているために目を騙されがちだが、実はかなり華奢な体つきをしている。無理をしたら簡単に折れそうだ。

髪は漆黒。対比するように、その肌は白すぎて体温を感じさせない。全体に、この若者には生気と呼べるものが欠如していた。そのためだろうか、生来の美貌が非人間的な領域まで研ぎすまされて、近づきがたい印象を他者に与えてしまう。

「ずいぶん遅くなったね。もう帰りなさい」

ダイニングテーブルでホットココアを飲んでいた冴子に、忍が声をかけた。

「若い娘が男の部屋で夜更かしをするものじゃないよ」

そう言いながら、キッチンに姿を見せる。上目づかいに彼を見て、冴子は少し間をおいた。

「実際は、こんな遅くにひとりで帰るほうがよっぽど危ないと思うんですけど」

「牙に送らせる。信じてやらなければ牙に気の毒だろう」
「忍様、あたしが言ってるのはですねえ」
「それとも僕にここを出ていけというのなら、それでもかまわないよ」
忍はいたずらっぽく微笑してみせる。
「――忍様って、イジワルかもっ」
「知らなかったのかい」
「知ってましたけどっ」
空になったマグカップを片手に、冴子は椅子を立った。流しできれいにカップを洗って、乾燥機に放りこむ。
「あーあっ、夜道で通り魔に髪の毛切られちゃったらどうしようかなっ。せっかく伸ばしてるのに困っちゃうなっ」
愚痴のようにこぼした冴子の言葉に、忍がふと真顔になった。
「噂は噂だよ、冴子」

その春、首都圏の女子中学生・高校生のあいだに急速に広まったひとつの噂があった。
発信源も、理由もわからない。大人たちやマスコミは彼女らの根拠なき確信を、よくある現

象として笑いとばしたり、あるいは原因究明へ乗り出したり、したり顔で評論分析してみたり、頭ごなしに否定し「目を覚ませ」と叱ってみたり、実にさまざまな手で料理しはしたのだが、結局その噂そのものを消し去ることは、そして本当に理解することも、どちらもできずじまいで今日に至っていたのだ。

誰もいない夜道で、「彼」は立ち止まった。

住宅街の曲がり角。水銀灯の照らすアスファルトに散乱するものがあった。近づいて、「彼」は鼻先を地面へすりよせた。

それは黒髪の切れ端だった。ごく少量、まばらに広がり、風に吹かれてさらに数を減らしてゆく。

誰が、何のために？

そっと黒髪に触れようとしたその時、「彼」の耳がぴんと震えた。「彼」の名を呼ぶ声があった。はるか遠くから……。

主の命は絶対だった。今宵はこれまで、ということだ。

「彼」は身をひるがえし、弾丸のように一直線に走りだした。黒猫の姿はあっさりと闇路にのみこまれ、後には水銀灯と、冷えびえとした空気だけが残された。

――されば一将の近侍に、『髪切り』なる者ありけり。女子の髪つかひて傀儡つくりいだすがわざにして、かの傀儡あやつりけむ。

髪切られし女子ら必ず二重身となりて、やがて皆いたづらになりぬべし。

1　スクール・ガール

そしてこの春、崎谷亮介は少しばかり不幸だった。

ヘヴィな「春休み軽井沢ツアー」が終わり、親友の水沢諒が東京から姿を消したのは、今月の初頭のことである。その余韻にしみじみ浸っているうちにいつの間にか新学期は目前に迫っており、始業式当日になってはじめて、亮介は大変なことに気づいたのだ。

「はあ……」

嫌味なほどに晴れわたった空のもと、亮介は今朝もため息をつきながら家を出た。母校・私立高陵高校のある吉祥寺までは、中野駅から電車で一本である。

学校が始まってからもう二週間になる。我ながら、さすがに諦めが悪いとは思うのだが……。

「おはよう！」

駅の直前で、制服の背中を叩かれた。

「あ……」

一瞬だけ不幸な状況を忘れて、亮介は笑顔でふりむいた。
「おはよう、どうしたの？」
背後に立っているのは、思ったとおり制服姿の神原亜衣だった。走って追いかけてきたらしく、大きく肩を上下させている。
「え、何が？　崎谷君」
脈絡のない亮介の問いに、亜衣が訊き返した。
「何って……なんか、元気だからさ」
「それで顔見るなり『どうしたの』って、普通は言わないと思う」
「えっ……そう？　だって、何かいいことあったのかなあって、普通は思わない？」
亮介は生真面目に言いつのる。複雑な顔を向けて、亜衣は亮介の胸をまっすぐに指差した。
「あのね、崎谷君……女の子にとっては、いつもより二分早く、いつもより百メートル手前で崎谷君に会えただけで、それくらい『イイコト』なの！」
「――っ」
ががが、と頭を直撃された感じで、思わず亮介は半歩ほど後ずさってしまった。いつもながら素晴らしい攻撃である。
「……感服しました」
「崎谷君はもっともっと自惚れていなきゃダメだってば」

「う、うーん、そうかあ……そうかなあ……」
芯から真っ赤になってブツブツ言っている亮介を置き去りにして、定期が切れちゃったから、と亜衣は切符売り場へ走っていった。
（かなわないなー……）
殺し文句にかけては、彼女は天才的なのではなかろうか。そんなことを思いつつ、亮介は改札の脇で亜衣を待った。
いわゆる器量よし、いわゆる高嶺の花、いわゆる学年のマドンナで男どもの憧れの的、と幾多の肩書に圧倒されて、つい最近まで遠くから眺めるだけだった自分が嘘のようだ。今や単なるクラスメートでも仲の良い友達でもなくて、だからつまり……かかカノジョ、などと考えて亮介はさらに血液を逆流させてしまって、めまいを起こしそうになった。
「待たせてごめんなさい。……崎谷君、顔色悪くない？」
「いや、俺、進歩がないなあとか思って……」
「え？」
「なんでもない。平気。ごく個人的な感情活動の結果ということで」
自分でもよくわからないことを言って、亮介は先に立って改札を通った。首をかしげながら亜衣がついてくる。
――そうだ、ここでめまいを起こしている場合でもないのである。ここ数日の不幸がよみが

えってきて、亮介は再び深いため息をついた。

事態は深刻にして単純だ。

めでたい進級につきもののイベント——悪名高き『クラス替え』である。

ごく平均的な進学校である高陵高校では、二年進級時に進路別のクラスが編成される。そしてすっかり失念していたことに、自分は文系で亜衣は理系志望だったのだ。どうあがいても今後おなじクラスになる望みはなかったのである。

（そうと知ってたら、もう少し……）

もう少し何をどうしたのかと問われると辛いが、今となっては悔やまれることしきりである。結果として、亜衣と一緒にいられるのは朝、駅で待ちあわせて学校へ行く、この時間だけということになる。

「崎谷君」

恒例のラッシュをかきわけて乗りこんだ中央線のなかで、亜衣が切り出した。

「昨日、休み時間にうちのクラスに一年生の女の子が来てね、『神原さんって人いますか』って、訊かれたのが偶然あたしだったの」

「？　……うん」

なんだか亜衣の語調に冷ややかなものを感じて、亮介はとりあえず返事をする。ちらりと亜衣が目を上げた。

「そしたら『崎谷先輩とつきあってるってホントですか』って」
「――は!?」
「で、『それともただのウワサですか。嘘を信じちゃったら神原先輩にも失礼だと思ったから、こうして訊きに来ました』って、言われちゃった」
「――はあ!?」
「だからあたしも、『それは嘘じゃなくて、ホントのことです』って答えておいたから、よろしく」
「……はあ……」
亜衣はポーカーフェイスに徹している。しかしその裏側にただならぬものが見える気がして、亮介はしばらく沈黙を保った。
「あのさ……それ、誰だかわからないの?」
少し考えて、それからおそるおそる尋ねてみる。亜衣は首を横に振った。
「名前は言われたけど、わざわざ崎谷君に教えてあげるの嫌だから」
「――あ、そう……」
こういう時の亜衣は文句なしに怖い。さわらぬ神原にたたりなし、とばかりに亮介は追及をあきらめた。
「でも……俺、心あたりないよ、全然」

「ふうん、そう」
「本当だってば」
「ムキにならなくてもいいのに」
「だって！」
車内で大声をあげそうになって、あわててトーンを抑える。
「――だって、それは本当のことだし、だいたい俺って全然もてないし、だからきっといたずらだよ、そんなの」
ぼそぼそと言ったら、世界の終わりでも見たように絶望的な仕草で、亜衣が吊り革に体重を預けた。亮介はぎょっとして身をすくめた。
「……わかってない……」
「え？」
「崎谷君は全っ然っ、わかってない……。あのね崎谷君、こういうことって初めてじゃないの、実は！　もう、去年からずっといろんなコが崎谷君のこと狙ってて、あたし崎谷君に近づきすぎるっていうんで何度も陰口たたかれたのに……あたしの苦労なんか全然わかってない……」
ぽかんとして亮介は彼女を見つめた。
完璧に初耳である。宇宙の彼方の話題である。

それを言うなら彼女のほうにこそ根強いファンがついていて当然で、亮介自身も廊下ですれちがいざま殺気のこもった視線など投げられたりしたものだが。だが、しかし……。

「嘘だよ、それ。知らないよ、俺、そんなこと」

なんとはなし、声がうわずったりする。早くこの話から逃れたい。

「嘘じゃないもん」

亜衣の目は据わっている。

「水沢君が来たころから、崎谷君って変わったし。それまではずっと『あたしだけが知っている崎谷君』だったのに、おかげで浮上しちゃって……だからあたし未だに水沢君のこと恨んでるんだけど！　おまけにみんな節操ないから！　もう、気が気じゃなかったんだからね、今だから言うけど！」

ここまで言われたら、もはや返答のしようがない。

変わった、のは確かだと思う。変わりすぎたくらいに。いろんな意味で。でもまさかそこまで……。

「えっと……だけどそれは、俺が諒に影響うけたってことで、結局すごいのは諒なんだと思うけど……」

「それは絶対ちがうはず！　崎谷君にくらべたら水沢君なんか下の下だもの、はっきり言って！」

「亜衣ちゃん、それ、私情すごく入ってる……」
「私情はかなり入ってるけど、でもこれって大切なことじゃないの？　水沢君と仲良しなのはいいけど、今の崎谷君みたいな言い方って、あんまり盲目的すぎてよくないと思うもの」
——盲目的？
電車が吉祥寺に到着した。反問できずに亮介はホームへ降り、人の流れを避けて階段から少し離れた。亜衣が遅れて追いつく。亮介が口をひらきかけたときだった。
「先輩！」
跳ねるように元気な声が届いた。
前の車両に乗っていたらしい。ホームの端から駆け寄りながら手を振るのは、亜衣と同じブレザー姿だ。亮介は立ち止まり、目をまるくした。
「崎谷先輩！　おはようございます！」
「あれえ？　松田さんって、この電車だったんだ」
可愛く結った髪が、ブレザーの肩の上で揺れる。ひどく身軽に彼女はホームを走り、亮介の前で急ブレーキをかけて、ぺこりとお辞儀をした。
「あたしの家、荻窪なんです。うれしいなあ、先輩と同じ電車に乗ってたなんて。とか言ってあたし大胆ですね。あはは」
無邪気に笑って、それから彼女は亮介の隣に立つ亜衣の姿に目をとめた。

「あ、おはようございます、神原先輩」
「おはよう、松田さん」
明るい彼女のあいさつに、亜衣は整いすぎた笑顔で答える。
（あっ）
ぞくり、と静電気にも似た感覚が亮介の背筋を走った。もしかしてもしかしたら。
「そしたら、あたし先に行きますね。先輩、また昼休みに会えますよね。それじゃ！」
もう一度頭をさげてから、松田瑞穂は一気に階段をかけおりていった。
そろそろと、亮介は亜衣の横顔をうかがった。
「……初対面だよね？　松田、瑞穂……さん、って、後輩で、例の……美術部の……」
「ふうん、そう」
あっさりと言って、亜衣は早すぎも遅すぎもしない足どりで階段を下りはじめた。
（もしやまさかひょっとしたら……）
あまり深入りしないほうがいいような気がして、亮介はそれ以上考えることをやめた。いくらなんでもそんなことはあるまい、と自分に言い聞かせる。
しかし瑞穂ならやるかもしれない——つまり、亜衣のところへ直に出向いて宣戦布告してみせるような離れわざを、である。ついそう思いついてしまって、だから考えるなっていうのに、と亮介は激しく自己嫌悪の淵に落ちこんだ。

松田瑞穂は、今春めでたく高陵高校に入学した一年生である。

高校生になったからには新境地をひらこう、と「あんなマイナーなとこやめなよ」という友人の制止をふりきって美術部に入部してみたら、そこは総部員数七名の弱小クラブだった。一年生はクラスメートの久美子と自分のふたりきりで、二年生が四名、三年生が一名である。

「ま、いいけどさ。アットホームだし……」

中学時代はバスケ部で鳴らしていたから、絵については完全に初心者だ。それでも一からしっかり教えてくれようとする、部の方針は気に入った。

「でも瑞穂なら、どこか体育系の部とかけもちしてもいいんじゃないの?」

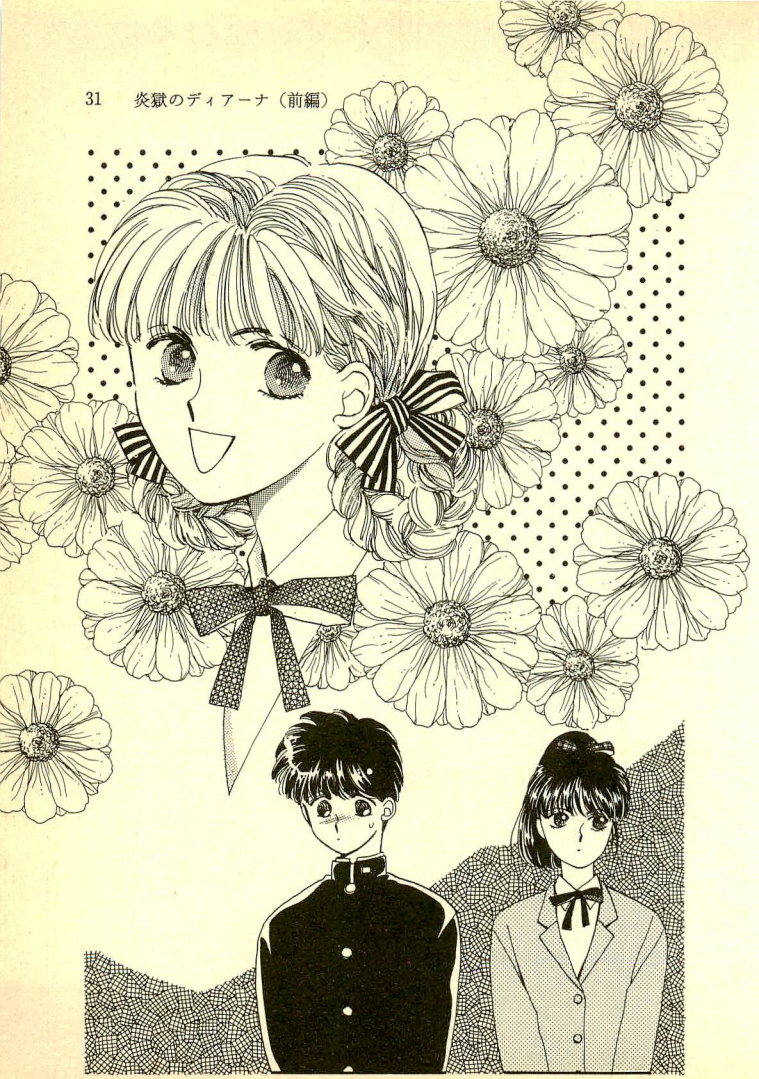
久美子はそんなことを言う。

「けっこう先輩たちもいろいろダブらせてるしさ」

「えー、めんどくさいよ、そういうの。スポーツ好きだけどさ、運動部のノリって今いちイヤな感じあるじゃん?」

昼休み、美術室へ向かう廊下で、瑞穂はヤダヤダと手を振ってみせた。

実のところ、入学当初は久美子の言うような「かけもちプラン」も頭の中になかったわけではない。女ばかりの団体競技では人間関係に苦労したから、今度はもう少し開放的なところで



……などと。

だがしかし。

「崎谷先輩いるしね」

しらけた眼差を向けて、ボソッと久美子が言い足した。

「やっ、やめてよーおっ！　どうしてそういうこと大声で言っちゃうのー!?　信じらんない久美子ーっ!!」

「瑞穂のほうが大声出してるよ」

「もおおっ、久美子いけずーっ。その程度の友情かよー。ちぇーっ」

「男言葉つかうと先輩に嫌われるからやめるっつったの誰だっけ」

「うわあ、しまったあっ。先輩、ごめんなさい！　あたし必ず更生しますからっ！」

「勝手にやってればー?」

ことの起こりは、十日間ばかり前の放課後へさかのぼる。

一年生の授業だけが早く終わってしまって、久美子は委員会の用事で少し遅れることになっていて、瑞穂はひとりで水彩絵の具と格闘していた。美術の授業の課題を当日中に仕上げなければならなかったのだ。部活の時間に宿題をやっていたわけで、本当ならこれは反則技なのだろうが、美術部員の特権なんてこんな時くらいしか利用できないではないか。

一秒を争って絵筆をふりまわしていたら、がらんとした美術室の扉がカラカラとレールの上

をすべった。

ドアを開けたのは、二年生の男生徒だった。もう二年生のクラスも授業が終わったらしい。ちらりと見たが、瑞穂の知っている顔ではなかった。美術部員ではないはずだ。待ち合わせでもしたのだろうか。

所在ない様子で、男生徒は片隅の席に腰をおろした。

美術室は広いから、部屋の端と端に分かれて座っていれば、相手のことはあまり気にならない。かまわず「おしごと」しようとして、向こうがわの「彼」が眼鏡を外したのに瑞穂は気がついた。

（うわー……頭よさそうだな！……）

小柄なのに、なんだか芯が強そうだ。エラい人なのかもしれない。

ぼんやり、そんなことを考えたのがまずかった。

がっしゃん、と不吉な音が響いた。ざっ、と机に水面が広がった。一瞬、なにが起きたのかわからない。水入れを倒してしまったのだ、と悟ったときには画用紙の半分ばかりが水に浸って最悪の状況に至ろうとしていた。

「や、やっ、やだあっ」

悲鳴をあげて立ち上がったが、とっさに次の行動が出てこない。

「あ、あ、あ。ぞ、雑巾っ」

「待って！　慌てないで、まず離して、絵！」
じたばたする瑞穂と机の間にわりこんで、画用紙を洪水のなかから救い出した手があった。
「あっ、あのっ……」
「制服ぬれてない？　一応これ使って」
ぽん、とハンカチを手渡したと思ったら、流しに走っていって雑巾をつかんでくる。問題の「彼」だった。呆然と立ちつくしたままで、瑞穂は彼が机の水たまりに雑巾を放りこむのを見ていた。
「――あ！　す、すみません！」
ようやく我にかえって、叫ぶように謝る。始末を全部、彼にやらせてしまったのだ。
「すみません！　本当にすみません！　あたしとっさに頭の中真っ白になっちゃうから！」
「誰でもそうだよ、あやまることないよ。大丈夫だった？」
瑞穂のノロマさ加減に腹を立てた様子もなく、心配そうにふりむいて問いかけたその人物こそ、かの崎谷亮介大先輩だったのである。
「そんでさー、そんでさー、ダメになっちゃった絵の直しもずーっと手伝ってくれてさー、半分以上先輩が描いてくれてさー、もう、もうもう、なんで先輩ってあんなに優しくて可愛くてカッコいいんだろうねっ？」
「それはもう何回も聞いたってば……」

しつこく回想する瑞穂に、久美子はうんざりして答える。

瑞穂としては、言えば言うほど幸せになれるので数万回でも聞かせたいところである。これでもセーブしているのだ。

なんでも亮介は一年生のときはどこのクラブにも所属していなくて、美術部には、二年生になってから部長の山岸にひきずりこまれたのだという。瑞穂と出会ったのは、彼が美術部へ出向いた初日のことだったのだ。

「きっとさあ、これってば神様が引き合わせてくれた縁ってやつだよねー」

「ま、信じるのは自由だよね、うん」

美術室は一階にあり、一年生の教室は四階にある。校舎のてっぺんの端から、最下層の端まで、対角線上に位置する二点を移動しなければならない。要するに、けっこう歩かされる。

一階におりて、昇降口の前を通りがかった時だった。

「あの、すみません」

昇降口のほうから、声をかけられた。

やたら背の高い男生徒がひとり、校舎にかけこんできて、靴を脱いだところだった。昼休みから登校だろうか。妙に思いつつ、はい、と瑞穂は返事をした。

「突然ですが、二年生の崎谷亮介君ってどこのクラスだかわかりませんか。あ、お嬢さんは一年生か。それじゃわかんないよね。失礼。気にせんでください」

言うだけ言って、さっさと彼は行ってしまいそうになる。
「さ、崎谷先輩ですか!?　あたし知ってますっ！」
思わず瑞穂は我を忘れて叫んでいた。バランスを崩してすっ転びかけて、長身男がふりむいた。
「――そ、そうだったんですか。それは申し訳ない」
「崎谷先輩なら、二年C組です。でも、昼休みなら」
「C組ですね。大感謝。ではでは」
昼休みなら美術室にいる、と言いたかったのに、皆まで聞かずに相手はダッシュで階段を上っていってしまった。
「……なんだったんだろ……」
瑞穂は久美子と顔を見合わせた。久美子も首を横に振る。
「あ、でもさ、今の人、けっこう良くなかった?」
「えー!?　崎谷先輩とくらべたら下の下だよー!!」
「そりゃ、あんたはそうだろうけどさ……」
言うだけムダだったわ、と久美子が嘆息した。
と、そこへ再び、
「ちょっと、ごめんなさいっ」

ウェーブの髪をなびかせて、やたら美人の女生徒がひとり、昇降口へとびこんできた。つい反射的に、はい、などと瑞穂は答えている。

「二年生の崎谷亮介ちゃんって人のクラスわからない？　わからなかったらいいんだけど、別に。自分でさがすから」

「……先輩ならC組ですけど、あの」

「C組!?　どうもありがとうっ。それじゃっ」

これまた人の話を聞かずに彼女も階段へ姿を消す。

あのねえ一方的に先輩の話ふっといてそりゃないんじゃないの、という気持ちが湧きあがってきて、瑞穂は両の拳をふるわせた。なまじ美人でしかも『亮介ちゃん』ときたから腹も立つ。

「ふっ――ざけんな畜生おっ！」

「先輩に聞こえるよ、瑞穂……」

「だあって、『亮介ちゃん』だって！　『亮介ちゃん』だって!!　あれってば何様ーっ!?」

美術部に入ったのは、なかなか正解だったような気がする。

亮介としては、今さらクラブ活動にかかわることになるなんて、思ってもいなかったのだ。

入学時には人間関係をともなうものすべてから遠ざかりたかったから、クラブなんてもってのほか、という精神状態だったし。

新しいクラスで一緒になったのが美術部の新部長で、彼が前々から授業で亮介の描いた絵に注目していなかったら、今でも自分はこんなところに座っていたりしないだろう。ひっぱりこんだ張本人の山岸には、つくづく感謝せねばなるまい。

「でも本当はさ、これ以上部員が減ったら同好会になっちゃうからなんだろ？」

「それ言ったら身もフタもなくなるだろうが……。俺は崎谷のためを考えてだな」

山岸はマジメを絵に描いたような奴である。ちょっとからかっただけで『崎谷亮介が何故美術部に入らねばならなかったか』をこんこんと力説してくれる。

「そもそも崎谷の絵は凄い。崎谷は絶対、その才能を自分の人生に活かすべきだ。法学部に行くなんてつまらないことを言うな、絵を描け、ひたすら描け、死ぬまで描け、それが崎谷の運命だ」

「それじゃ手放しだよ」

「それくらい思いこんで描いたほうがいいんだ。おまえの絵はそのへんが弱腰だから、センスはいいのに今ひとつインパクトに欠けるんだ。もっと傲慢になれ、傲慢に」

山岸自身は、将来の進路を今から美術系にさだめ、日々鍛錬にいそしんでいるつわものなのだ。舞台美術に興味があるのだと言っていた。そんな風に目標をしっかり持つなんて、とても

かなわないなあ、と亮介は思う。
「今日は遅いね、一年生のコたち」
美術室の机にひじをついて、亮介は呟いた。
「そこで話を変えたな」
「べっ、別にそういうつもりじゃなくてさー！」
昼休みはすぐに終わってしまうので、特に部活動というほどのことはできない。ただ、ヒマな部員が美術室に溜まってのんびり雑談するだけなのだが……思えば、その程度のつきあいすら今までの亮介にはまったくなかったのだ。以前に諒が言ったとおり、「花の高校生活エンジョイして」なんかいなかったわけだ、と今なら納得する。
多分、諒のことを別格扱いにすれば、この学校で友達らしい友達ができたのはこれが最初だろう。水沢諒については——あれは、本当に特殊なケースで……。
（特殊？）
あたりまえのように考えて、亮介はふとそのフレーズに引っかかった。
（なんで？）
目の前の机では、山岸がせっせとスケッチブックに落書きをしている。
校庭からは、サッカーをする連中のかけ声が伝わってくる。昼休みの音楽放送がかすかに廊下で流れている。窓の遠くには散りかけた桜の枝が見える。ワックスをひいたばかりの床に、

上履きの底がきしむような音をたてる。

ひどく平和な、いつもどおりの風景。

（なんで？）

こんな考え方を、もしかしたら諒は望んでいないかもしれない。特殊、なんて。別格、なんて。違う、なんて。そうじゃなくてもっと……。

「つまり、崎谷の絵の凄いところはさ」

スケッチブックに向かったまま、山岸が話題を戻した。

「もちろん技術の面でも見るべきものはあるけど、それ以前の崎谷自身って素材がちょっと他人と違うってところだな。同じものを見て描いても、崎谷が描くと他人と違う絵になる。これをだな、言い換えると、『才能』になるんだが」

「そんなことないって」

才能の二文字まで持ち出されると、もう言われているほうは赤面してくる。山岸の言い方がまた輪をかけて大上段なのだ。あわてて手を振った亮介に、重ねて山岸がたたみかけた。

「崎谷、おまえ自身がどんなに否定したって、感性は必ず絵にあらわれるものだろうが。しかも感性ってのは、いくら欲しがったって、そう簡単には手に入らない。誰もが苦労する一点をらくらくクリアしてるんだから、正直言えば俺だって羨ましい。……つまり崎谷は、他人の目に見えないものを見ているわけだ」

「――え？」

山岸の最後の一言が、亮介の呼吸を止めた。

予測もしなかった衝撃。

こんな話題で、そんな内容に到達するなんて思わなかった。そしてそれを聞いてこれほど自分がショックをうけている、のは、何故、なんだろう……。

周囲の音が遠ざかる。胸ポケットの眼鏡に手がのびた。もういらないと思ったのに、結局まだ捨てきれずにいる。せめて授業中だけは余計なものを見たりしないようにと。

他人の目に見えないものが、自分には見える。

それは才能なんかじゃない。

それは感性なんかじゃない。そうじゃなかったら、そうしたら自分は。

（なんで？）

絵を描くのは好きなのに。ただ好きでやっているだけなのに。こんなところまでまとわりついてくる罪悪感の影。くだらない！　そんなこと考えなくていいって、わかってるのに。わかってるくせに、いつもいつも。

でも山岸に言えるだろうか。『そう、俺はおまえに見えてないものを見ているんだ』そんなこと言ってどうなるんだろうか。反則技をつかって競技に勝つのとどう違うのか。問われたら自分に言えるのか。

「！」

右手の親指に鋭い痛みが走って、亮介はようやく我に返った。

無意識に、眼鏡の蔓をとめる金具で大きく皮膚をけずってしまったらしい。じわりと赤い色が浮いてきた。

「あっ……」

「え？　……おい、なんだよ、怪我っ!?」

「ちょっと動揺しちゃって……」

がたごとと音をたてて亮介は立ち上がった。

「俺、保健室に行ってバンドエイドもらうから……遅くなったら先に教室……」

「あ？　ああ、気をつけろよ」

美術室のドアをしめて廊下へ出て、それから五歩ほどゆっくり歩いて、そして亮介は勢いよく走りだした。

（なんで言えないんだろう……！）

『普通だから仲間はずれだなんて』

『術力なんて、所詮は人間の力なんだから』

『少しだけ、他の人と違う力があるだけで』
いくつもの言葉が心に甦る。
何度も何度も、くりかえして考えてきたことなのに。
水道の蛇口をしめて、亮介は息をついた。保健室に誰もいなくてよかった。きっと今、ひどい顔をしている。
どうして言えないのだろう、友達なのに。
どうして思うのだろう。
自分がひとりだなんて。
そんなつきあい方は、ずるい……。ずるいはずだ。自分ならいやだ。
こんなこと、あの仲間たちは考えたりしないんだろうか？
（会えたらいいのに……）
漠然と、そう思った。会って、話をしてみたい。どう思うか聞いてみたい。一カ月くらいしか離れていないのに、ずっと会っていないような気がする。諒をぬかせば、みんな東京にいるのに。すぐ近くにいるのに。なのに、こんなに自分は心細くなっている。
『すぐに会えるよ』
斎伽忍はそう言って笑っていた……。そうだ。そうなのに。
今の自分は弱い！

「頼るな、弱虫！」

ばしゃり、と平手が濡れた流しを叩いた。守られるばかりで。教えられるばかりで。そんな自分はもう見たくなかったはず。

保健の先生が戻ってきたので、簡単な処置だけしてもらって、亮介はそそくさと保健室を出た。部屋の真ん前の廊下では、女の子たちが甲高い声ではしゃぎあっていた。

「！」

錯覚？

（え!?）

目の前を走って消えたウェーブの髪！

誰？　……まさか。

後を追って亮介は走りだした。階段を上る。柱をまわりこむ。二階。廊下のずっと奥、反対側の階段に後ろ姿が見えた気がした。ざわめきの遠く。

生徒たちにぶつかりそうになりながら、亮介は廊下を走りぬけた。心臓の鼓動が勝手にペースをあげた。期待……するのは失望が怖い。でも。

さらに階段を上って、踊り場に立ち止まる。

誰もいない。

スピードをおとして、三階まで段を上った。階段前のホールには人影がまばらに散っていた

が、求める姿はどこにもなかった。
やはり気のせいだったのだろうか。
――冴子がこんな所にいるなんて。
呼吸を整えて、亮介はしばらくそこに立ち尽くしていた。どうやら重症だ。
そろそろ予鈴が鳴りはじめるころだった。美術室に一度もどって、なんでもないのだと山岸に言っておいたほうがいい。右手の傷はたいしたことないけれど、今日の放課後は部活を休むことにする、と……。
どうにも消化しきれない気分のまま、踵を返して階段をおりようとした――その時。
「ちょいと、そこ行く色男」
四階へつづく階段のほうから、声がかかった。
ふりむいて、亮介は何を考えるよりも先に、反射的に逃げ出しそうになっていた。ナンダカ変ナモノニ対面シテシマッタ、という危機感のなせるわざである。
三度笠よろしく出席簿で顔をかくしたあやしげな奴が約一名、階段のてすりに体重をやや預け、風流なポーズでもって突っ立っている。――あやしすぎる。
「二年C組、崎谷亮介氏とお見受けした」
しかも言うことが時代がかっている。
出席簿にはでかでかと『二年F組』の文字。亜衣のいるクラスだ。

「闇に潜んだ影を斬る。天を欺く悪を追う。
月は東へ日は西へ。所詮消えゆく流れ星。
心の涙を笑顔に託し、旅の空から朱雀剣。
疾風の如く現れて、今日も元気だ始末人」
朗々と意味不明の口上をのべたりして。
「そんなオイラも慕情にかられ、帰ってきたぜお亮ちゃん」
軽い仕草で出席簿をおろし、その怪人はニッと笑いつつ宣言してみせた。
「水沢諒、見参」

2　開　幕

「だからあたしは朝から来たいって言ったんだってば！」
ばん、と机をひっぱたいて冴子が力説した。
「それをこのバカが！　このバカが！　朝の七時には新宿に着くなんてこのバカが大口たたくからついうっかり信用したら、このバカ何時に来たと思う!?　十二時過ぎよ、はっきり言ってっ！」
「だからわざとじゃないって俺がさんざん言うとるだろうが！」
机の反対側から諒が怒鳴りかえす。
「世間はつねに流動しとるものだからして、なにが起こるかわからんものなの！　要するに今日に限ってちょっとだけ寝過ごしたとか特急に乗りそこねたとか電車まちがえたとか、たまたまそういう事故が重なっただけだろうがっ！」
「それは『事故』とは呼ばないわよ、『マヌケ』というのよ、単にあんたがバカなのよっ！」

「やかましいっ！　青春の小さなつまずきくらい許容する広い心を持ちたまえっ！」

はあああ、と亮介は巨大なため息をついた。

今は放課後、場所は二年C組の片隅である。

目の前にいる二名は、なんたることか、本日付で高陵高校へやってきた転入生なのだ。

こういう事態になってみれば、なるほど可能性としてはあってもおかしくない話なのだ、と思えるが、しかし実際に諒が目の前へ現れるまではそんなこと、予想のかけらもしていなかった。しかも、諒だけならともかく、冴子が高陵の制服を着ることがあるなんて。

「そうならそうと先に言っといてくれれば……」

恨みがましい呟きが漏れる。ちらりと諒が視線を返した。

「だーって、やってみたかったんだもん、あれ。『水沢諒、見参』っての」

「そ、それだけの理由で人の心臓をっ……」

「うん、まさか亮介くんが座りこんでしまうほど感動してくれるとは思いませんでした。嬉しかったなあ、僕」

「ち、違うっ……！　あれは、呆れて、膝の力がぬけたからっ……！」

かっと赤くなって、亮介は言葉を喉につまらせた。

「なにも照れなくても」

「違うっていうのにっ!!」

本当に、あの時は、脱力する以外に反応のしようがなかったのだ。

階段の手前に座りこんでしまって、ろくに声も出なくて、苦笑しながら諒が手を貸してくれなかったら立ち上がることもできなかったという、あまりにも恥ずかしい行動に出てしまった自分が口惜しい。これを不覚と言わずして何と言うのか。

おまけに諒のほうは、

「やだなあ亮介くんてば化け物でも見たみたいに……。ところで実は俺、大急ぎで二年F組へ行かねばならんのだ。ろくに話もできないけどごめん！　また後で詳しいこと説明するから！　ではではっ！」

と、予鈴の鳴り響くなか、呆然自失の亮介を置き去りにして、さっさとF組の教室へ消えたのだから許せない。どうなってるんだ、とパニックしつつ美術室のことも忘れて自分の教室に戻ったら、

「どうもーっ。今日から転校してきましたーっ」

などと冴子がにっこり笑っていて、亮介はショックのダブルパンチをくらったのである。

諒も冴子も、昼休みのうちに亮介とコンタクトをとって事情を説明しておきたい、とは思っていたらしい。

さらに言えば、どちらが先に亮介をつかまえて驚かせるか、の一点で競っていたふしがあるからたちが悪い。

しかし亮介が美術室にいることまではわからなくて、ふたりして校内を走りまわっていたところを、亮介が見とがめて追いかけたのが冴子だった、ということになる。

「ふたりとも性格悪くなったみたい……」

亮介に同情して、亜衣がぽつりと言った。唯一の救いとばかりに亮介はそれにすがる。

「そうだよねー。そうだよねー。もっと言ってやってくれる？」

「でも崎谷君って、びっくりさせると本当に反応が可愛いから……」

「あ、そう……」

期待した俺がバカだった、と亮介は机にのめりこんだ。

「それで、結局どういうことなの？　また水沢君が転校してくるなんて」

「そこで『また』を強調しないでくださいよ、神原さん……。俺、前のクラスメートのみんなに『出戻り』って呼ばれててつらいんですから」

亜衣の問いに、諒が顔をしかめた。

「自業自得だよっ！」

「さ、崎谷くん冷たいっ。何がキミをそんな人に変えてしまったんだ!?」

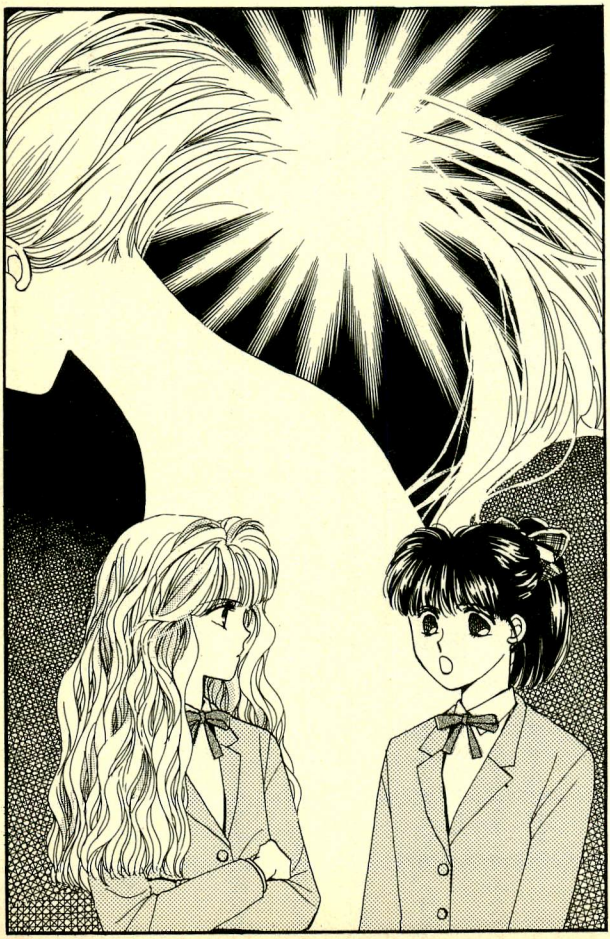
「亮介ちゃんもとうとう真実に目覚めたんじゃないの？　ほら、今、大人への階段を上っているところだから」

「なるほど反抗期ですか」

「そうじゃないっ！　そうじゃないってばっ！」
机にはりついたまま声をはりあげる亮介の隣で、ばしっ、と亜衣が膝の上のかばんを平手で叩いた。
「水沢君、話をまぜかえさないで！　崎谷君も変なところで絡まないで！　話がぜんぜん進まないでしょっ!?」
「――すみません」
「右に同じ」
すごすごと男性二人が退却したところで、亜衣と冴子が机の上に顔を寄せあう。
「もう、念願の再会を果たしたからって、すっかりはしゃいじゃって、ふたりとも」
「会えなかったっていっても、たかだか一カ月未満なのにねえ。堪え性がない男って困りものよね」
こらこらこら、と諒がぼやいた。もはや亮介は沈黙するのみである。
「要するにね、仕事よ」
おもむろに冴子が切り出した。
「亜衣ちゃんなら、知ってるんじゃないかしら。このところ、変な噂が出回ってるでしょ？　それの調査」
「ああ、もしかして『髪切り』……」

「そうなんです。その『髪切り』について情報収集をしろなどと忍がほざいて」
「何？　それ」
ひとりだけ話題にとりのこされて、亮介が尋ねた。『ほざいて』とは何事よっ！　と冴子が諒を叱りつけ、俺は真実を言ったまでだろがっ！　と諒がやりかえし、おかげで返答が得られるには少々時間が必要となった。

――夜中に女の子が一人で歩いていると、闇にまぎれて髪を切られる。
これが第一のパターン。噂が流れはじめた当初は、このパターンの話しか聞かれなかった。その後しばらくたって、第二のパターンが発生する。
――髪を切られた女の子のところに、それから三日後に、自分と同じ顔をした女の子がもうひとり現れる。
いわゆる通り魔事件かと思わせた第一のパターンに加えて、この第二パターンは、突如として怪奇調の色あいを帯びてくる。
同じ顔の自分、を表現するのに〈分身〉や〈ドッペルゲンガー〉などの言葉も使われた。己のドッペルゲンガー（二重身）を目撃した者は遠からず死ぬ、という説がある。それに刺激されでもしたのか、第三のパターンは次のようになった。



——自分と同じ顔の女の子がやってきて、生気を吸い取る。生気をぬかれた女の子のほうは死んでしまう。

実際にそんな事件が起きたことはない、と警察側は否定している。

しかし……この一ヵ月ばかりの内に若い女性が数人、行方不明になっているのは事実なのだ。

「知る人ぞ知る、というか……女の子だったらたいてい知ってる噂みたいだね」

結局は冴子に言い負かされた諒が、意識的に亮介だけを見て説明する。つまり冴子に背を向けているわけだが。

「へえ……」

「マスコミもちょっとは取り上げてるし。まあ興味本位だけどね、それは。で、なんだかよくわからないけど、忍としてはその現象に引っかかるものがあるらしいということで」

どうせ東京で仕事するならもう一度高陵に通いたい、と諒は駄々をこねたのだという。すると、忍からは案外あっさりとOKが出た——ただし、冴子も一緒にとの条件つきで。

「こういう時こそ、冴子なんぞは女子高あたりに放りこむべきだと思わんか？　なんでふたりしておんなじ学校で情報収集せねばならんのか、俺にはさっぱりわかりません、はい」

「忍さんって、冴子ちゃんには甘いからなー……」

「も、ドロ甘ですよ。激愛だよ。勝手にしてくれ、俺は知らんわ」

ひらひらと諒が手を振った。
「ほんっとに成長しない奴よね。あのね亮介ちゃん、これはね、自分が忍様に信用されてないっていうんで、ひがんでるのよ、つまり」
冷ややかに冴子が口を出す。
「誰がじゃっ！」
「あんたよっ！」
「あの、ふたりとも、ごめんっ！　変な話題を持ち出した俺が悪かったっ！」
火花を散らしかけた両者のあいだに割りこんで、亮介は話の流れをあたふたと押しとどめた。
と、そこへ。
「せんぱーいっ！」
二年C組のドアにとりついて、そう呼びかけた人影があった。
気がつけば、教室に残っているのは亮介たち四人だけだ。何事かとふりむいて、亮介はどきりとした。
「崎谷先輩、今日は部活出ないんですかー？」
「あ……」
少し甘えるような声を出したのは松田瑞穂である。美術部の一年生コンビが、わざわざ教室

まで迎えに馳せ参じてくれたらしい。

「えっと……」

隣の亜衣の視線が気になる。亮介は席を立ち、ドアのところまで駆けよった。

「ごめん、山岸がなにか言ってた？」

「いえ、そういうんじゃないですけど。今日は先輩お休みかもって部長は言ってて、だけどあたしたち崎谷先輩いないと淋しいなあなんて思って」

「と、瑞穂が言ってたんです」

「久美子おっ！　もおお、やーですねえっ、久美子いけずなんですよお、先輩ーっ」

なんというか、いつも元気な女の子たちだと思う。エネルギーがこちらまで伝わってくるようで、亮介はついつられて笑ってしまっていた。

「うん、悪いけど今日は駄目なんだ。ごめんね」

「そうですかあ、残念。それじゃ、また明日！　失礼しまあす」

手などを振りつつ、瑞穂は久美子をひきつれて階段へ姿を消した。

のんびりそれを見守っていたりしたら。

「さきやセンパイ……」

突如、耳もとで低く呼ばれて、亮介はドアにすがりつきそうになった。見ると、神妙な目つきで諒がまじまじと見おろしている。

「な、なんだよっ」
「いや、心なしか亮介くんが大きく見えましたよ。立派な人になってしまったんですねえ。僕としては嬉しいような悲しいような複雑な気分です」
「……なに言ってんだよ」
「すっかりカッコよくなっちゃって……泣かせてくれますよね。あんまり女の子の心、射止めまくらないようにね。あてられてしまいますから」
ぽん、と亮介の肩を叩いて、そのまま戻ろうとする。ふと思いついて、亮介はいきなりその襟元をつかんで自分のほうへ引き寄せた。
「おまえ、人のこと言えるの？」
こっそり囁かれて、今度は諒が目をまるくする。
「へ？　なんで？」
「いないの？　そういう相手」
「――――」
次の瞬間、諒は大爆笑とともにその場へしゃがみこんでしまった。
「ぶはははは。やーだーなーっ、亮介くんてばーっ。安心しなさい、俺の相手は亮介だけだから」
「またおまえはそうやってごまかしてーっ!!」

「なあに？　なあに？　なに亮介ちゃんで盛り上がってるの？」
真っ赤になって怒鳴りつける亮介の肩にもたれて、冴子が顔を出した。笑いすぎて死にそうになりながら、諒がふりかえる。
「いや、あのですね、亮介くんが神原さんにいつも心配かけて悪いから、今日はドカンと思いきりおごるぞと決意してくれてだね」
「やだ、亜衣ちゃん聞いたー？　チャンスよ、チャンス」
「ちょっと嬉しいかもしれない……」
「ああもう！　何でもいいよ、好きにしてくれよっ！」
こうなったらヤケだ。すっかり降参して、亮介は唸り声をあげた。
「ゴメンネ」
ようやく立ち上がった諒が、小声でそんなことを言って亮介にウィンクしてみせた。少しだけ彼らしくないような仕草に思えて、亮介はその背中をぼんやりと見送った。

「そうか、とりあえず今日中には編入できてよかったじゃないか」
『……その表現は、今日中に学校に着かないだろうと思ってたように聞こえるが』
「おまえにそう聞こえるなら、そうなんだろう」

答えながら、斎伽忍は壁にかかった時計を見やった。午後九時半。
電話の相手は、毎度のことながら水沢諒である。
足元を横切って、黒い猫が走った。半分ほど開けられた窓のへりに跳び乗り、ちらりと忍のほうをうかがう。
窓の向こうに見える夜空には、今日はいつもより雲が多い。かすかに両眼を細めて、忍は黒猫へ了承の合図を送った。
「そこで拗ねるのはおやめ。誰も責めてはいないんだからね」
『おまえのその言い方こそやめろっ。鳥肌がたつわっ』
「あんまりな言葉だな。僕でも傷つくことはあるんだよ。もう少しいたわってくれてもいいんじゃないのかい」
『だから猫撫で声はやめろというのにっ！』
「僕らしい話し方をしようと心掛けているのに、残念だな。わかった、次からは相手を選ぶことにするよ」
『……おまえ、このごろ人生、捨ててかかってないか？』
薄暗い部屋に、低く笑い声が漏れる。ふうっと尻尾を泳がせて、黒猫は窓の外へ出ていった。九階から、ベランダづたいに下へおりていくのだ。
「亮介に、何か変わりはあったかい」

部屋にひとり残されて、忍の視線は窓からテーブルの上へ移る。ダイニングテーブルの上には、空になったワイングラスがひとつだけのっている。

『相変わらず素晴らしいですよ、亮介くんは』

「だろうと思ったよ。そうか……久しぶりに、僕も亮介に会いたいな。つれておいで」

あっさりと、忍がそう命じた。何かのついでのように。

そして、ふと虚空を見据える二つの瞳。

「ああ、ふたりで来ればいい。そうだな……今夜」

安物の腕時計は、もうそろそろ十時を指し示そうとしている。パンプスの踵を響かせながら、彼女は家路を急いでいた。

彼女の肩書はOLである。今日もしつこく残業漬けだ。これから六畳一間のアパートへ帰って、洗濯をして風呂に入って、明日の弁当の下ごしらえをして、アイロンかけて鍵かけて、おやすみの電話をあの人にかけて、そして明朝のラッシュにそなえてさっさと布団に入らなければならない。

駅から商店街をぬけると、アパートまではしばらく暗がりの細い道になる。女ひとりで通る道じゃないわよ、と友人には忠告されたが、早く帰りたいのだもの、背に腹は代えられない。

変な奴がいたら、大声で叫べば近くに派出所もあるし。
きっと大丈夫。心配ないはず。
規則的に、ヒールの音が続く。
それにしても、と彼女は思う。昨日だったか一昨日だったか、帰りの電車をおりたら髪が一房、短くなっていたのは何だったのだろう。ラッシュの最中にどこかしら触ってくる痴漢ならよくわかるけど、髪を切る奴なんてはじめてだ。
気味が悪い。とにかくそれっきりだったから、誰にも特に相談などはしていないのだが。でも今にして思うと、やっぱり駅員あたりに言って、いたずらがエスカレートしたりしないように注意を喚起しておくべきだったかもしれない。だって、ラッシュの中で刃物を使うなんて、髪ならともかく服でも切られたら冗談じゃ済まない……。
いや、髪だって、いずれ伸びるものだから気楽に考えがちだけど、本当は一大事だ。女の命というくらいだし。
なんだか後悔したくなってきた。
急に落ちつかない気分になって、彼女はふと自分の周囲を見まわした。
いつもはこんなに臆病じゃないのに。何がこれほど気になるのだろう。
「やだな……」
怪しげな影は、別にどこにもなかった。当然だ。週刊誌ネタじゃないんだから。誰かに恨ま

れるような覚えもない。横恋慕されるほど美人でもない。財産なんか勿論ない。

「やだなあ……」

ムリに苦笑を作って、歩を進める。アパートまでは、五分足らずだ。

道の両側には、小さな工場を囲む塀が白くのびている。

誰もいない。誰もいないってば。

呟きながら、塀の曲がり角を右手に折れたら。

「や……」

不意に人影にぶつかりそうになって、彼女は悲鳴をあげた。ヒールが乱れたステップを鳴らす。三歩ほど後ずさって、彼女はハンドバッグを胸に抱えこんだ。——それから、我に返った。

「あ、す、すみません」

よく見たら、相手はただの普通っぽい女の子だった。

びっくりした。こんな暗い所、ひとりで歩いたりしないでほしい。自分のことは棚にあげてそんなことを思って、相手の脇を通りすぎて先へ進もうとして……彼女は足を止めた。

相手の女の子もゆっくりとふりむいて、こちらを見た。

こちらを見て、うっすらと微笑した。

「どこに行くの」

聞いたことのある声。

見たことのある口。鼻。目。——髪の毛。
「どこに行くの。あなた、わたしなのに」
単調に、それが尋ねた。
彼女は目を見開いた。大きく大きく、可能なかぎり見開いた。自分の意志ではなくて、それ以外なにもできなくて。
膝がじわりと揺れた。冷たい感触が、踵からまっすぐ上へのぼってくる。まるでストッキングが細く破れていくみたいに。
「あ、あ、……」
あんた誰、と訊きたいのに声にならない。ただ膝から下だけが勝手に動いて、一歩、二歩、それから彼女の身体を遠ざけようとした。
「なんで逃げるの」
それが歩み寄った。
「なんで逃げるの。あなた、わたしのくせに。わたしのくせに、どこ行くの。逃げるなんて、変だよねえ。わたしのくせに、変だよねえええっ!?」
「うわあああっ!!」
悲鳴が出た。彼女は破裂したように叫んで、一目散に駆けだした。
追ってくる。ヒールを鳴らして追ってくる。自分と同じ顔をした女が、甲高く靴音を踏み鳴

らして、凄まじい速度で追ってくる。
「へ、ん、だ、よ、ね、えええええ――えええ……ええ……」
「いやだーっ！　やだーっ!!」
金切り声で叫ぶのに、迎え入れてくれる灯火ひとつ見出せない。パンプスが脱げた。転びそうになって裸足をひきずり、必死に先へ走りつづける。
女の声はなぜか変に間延びして響く。
「誰かーっ！　誰かーっ!!」
このへんには人家があったはず。彼女はつぶれる声をしぼりだした。
どこからも応答がない。誰も出てこない。
景色がおかしい？　突然、彼女はそのことに気づいた。走っても走っても、工場の白い塀が終わらない。そんな馬鹿な。
「逃、げえ――えええええ、ええ……え、る、ううう――う――……」
すぐ真後ろに女の声が迫った。来るな。来るな来るな来るな。
死にものぐるいで彼女は目の前の角を右手に曲がった。
「え!?」
息が止まった。
今の角は、さっきも自分が折れたはずの曲がり角だったのだ。

同じところをぐるぐるまわっている!?　嘘だ。どこも曲がらずにまっすぐ走ってきたのに。閉じこめられた。メビウスの輪かもしれない。〈結界〉という言葉は彼女の語彙に含まれていない。こんな。こんな夢みたいなこと。

彼女はふりむいた。

呼吸も乱さず、薄く笑った表情のままで、それが悠然と近づいてくる。

「だ、だれ、か……」

舌がもつれる。もう走ることはできずに、彼女は身をすくめた。

「誰か、来て。誰か来て！　誰か来てよ――っ！」

力がぬけて、アスファルトに裸足のまま膝をついてしまう。

女が来る。

彼女の叫びは、誰にも届かない。

仮面のように微笑を凍らせて、女が両手をさしのべた――。

「！」

鼓膜をつんざく衝撃が、そのとき大気を鳴動させた。思わず彼女は耳をふさいだ。いきなり、視界がひとまわり広くなった気がした。

「立てますか」

彼女に手をさしのべた黒い影があった。

若い男の声。

夢うつつの状態で、彼女は新たな人影をぼんやり眺めた。助けてくれる人だということだけはわかった。

なにも答えないうちに、ふわりと体を引き起こされていた。

「むこう側に、駅の明かりが見えるでしょう。明るいところまで、後ろを見ないでまっすぐ走るんです。いいですね。大丈夫、できます」

穏やかに、彼がそう言い聞かせる。言われるままに彼女は頷いた。

大丈夫、できます。

呪文をかけられたようなものだった。よろめきながら、さっきまでは全く見えなかった商店街の照明へ向けて、彼女はなんとか走りだした。

彼女が去るのをちらりと確認して、結界を破った張本人は『もうひとりの彼女』のほうを見返った。

「そこをおどき」

あくまで淡々と、女が命じた。

「断る」

片腕にかけていたコートを地面へ落として、里見十九郎は短く答えた。

3　伝承

父親の会社に顔を出して、帰る途中のことだった。

将来の進路についていくらか考えるべき事項もあって、少しひとりで歩きたいから、と十九郎は車で送られるのを辞退したのだ。そうやって駅まで遠まわりしなかったら、結界の気配に偶然気づくこともなかっただろう。

「おどきっていうのに」

女がくりかえした。

十九郎は無言である。身構えるでもなく、その場に佇んでいる。

「どかないなら、無理にでも通るまで……」

女は呟いて、まっすぐに十九郎へ向けて歩きはじめた。

十九郎は相手との距離を目で測った。女が人間ではないことは、おびただしく漂う妖気ですぐにわかる。ただ、妖者にしては存在が希薄。〈影〉にしては実体が強すぎる。

——何だ？

こんな〈気配〉は初めてだった。あまりに中途半端なのだ。

「——オン・バザラ・ダト・バン」

ぽつりと声に出して、十九郎は片腕をかざした。

「ナウマク・サンマンダ・バザラダン・カン——すまないが消えてもらう」

冷静な宣告とともに、無形の力が彼の腕から放たれた。ビリビリビリ、と女のまわりの空気が鳴った。帯電したように女の髪が浮いた。

が、それだけだった。

十九郎の表情が厳しいものになった。ごく狭い結界に封じこめてその内へ念を集中する——ただの〈影〉ならばそれで消滅してしまうはずなのに。

結界が通用していない。女は白い肌にかすかな静電気を残しつつ、その歩調を緩めもしなかった。

「邪魔だよ」

細い腕が、十九郎の胸を押しのけた。そのまま行こうとする女の腕を、思いきって十九郎はつかんでいた。

「邪魔だよっ！」

癇癪をおこしたように女が怒鳴った。冷たすぎる腕から、たった今十九郎の送りこんだ

〈気〉が一度に逆流した。

「！」

とっさに掌で衝撃をくいとめ、十九郎は事無きを得た。痺れがくる。

（逆流!?）

特異な現象だ。十九郎は女の行く手をふさぎ、もう一度気を放ってみた。さらに苛烈な破裂音が女をつつみ、今度は数秒間その動きを抑止した、が……。

「痛い！」

悲鳴と同時に、女が結界をはねかえした。突風というべきか、圧力のかたまりが正面から吹きぬけて、十九郎は腕で両眼をかばった。

傷つきもせず、女はそのまま進もうとする。

下手に攻撃を加えると、それが当人へ返ってくることになるらしい。女自身になんらかの力があるわけではなさそうなのに。

「……見くびって悪かったな」

本心から呟いて、十九郎はまとわりつく妖気を振り払った。〈影〉などと同列に扱おうとしたのが間違いだったのだ。

多少、荒っぽい手段にでるしかないだろう。そう何度もできる技ではないが、仕方がない。

十九郎はひざまずいて地面に片手をついた。力の方向を設定する。意識を一点に統合する。

「ナウマク・サンマンダ・ボダナン・ドバンシャナン・アビュダラ・ニサトバダトン・ソワカ、オン・サンマヤ・サトバン、オン・トン・バザラ・ユク、オン・マイタレヤ・ソワカ」

感情規制。陀羅尼を唱えることにより自己に暗示をかける。そして。

「臨兵闘者皆陣列在、前！」

ばあん、と女の内部でなにかが爆発した。つんのめって女がアスファルトに両膝をついた。

「い、痛あ――いいいい」

不気味な唸りをあげて、十九郎をふりかえる。

その女の体を、ゆらゆらと陽炎が包みはじめていた。女が喉から胸をかきむしって、もがいた。

「あああ熱うう――いい――っ」

がっ、と開いた口から真っ赤な火がのぞいた。女の全身から火が吹き出した。火柱がまたたく間にそれの指先から髪の先まで余さず呑みこんだ。

「ああ、あああ、ああ、な、に、す、るう、の、お、お――っ……おうおう、うおう、おおう、おおおう」

甲高い悲鳴が、だんだん低くなり、獣の咆哮へ変化した。

めらめらと女は燃えていた。それは奇妙な燃え方だった。

紙のように。

もがきながら、折れ曲がりながら、ひどく簡単に女は燃えた。煙があがり、灰が残った。
照りかえす光を見つめながら、十九郎は動かずにいる。
最後に女はなにか言おうとして狂おしげに十九郎を凝視し、腕を持ち上げて指さした。呪ってやるといわんばかりに唇をひらいて。
それで終わりだった。
炎が燃え尽き、十九郎は立ち上がった。わずかな灰だけがアスファルトにこぼれていた。
外から攻めて駄目なら内側から——。意図はそれだけだ。ことさらに悲惨な結末を用意するつもりではなかった。
決して気分のいいやり方ではない。
かすかに息をついて、地面に置いたコートを拾いあげる。それから、十九郎は数歩先に広がる灰の前まで近づいた。
「紙人形……」
ふと、そんな言葉が浮かんだ。
強い風が急に路地を吹きぬけた。音もなく灰は風に流れて、すっかり消えうせた。
「————」
風の行方を見送って……不意に十九郎は背後をふりむいた。
トパーズの眼。

闇に溶けこむような黒の色に、一瞬どきりとさせられる。猫？

死角から現れたその黒猫は、身軽な足どりですぐ目の前までやってきた。本能的な予感が働いて、十九郎は神経を張りつめた。

黒猫が、低い位置から十九郎を見上げた。

「里見十九郎さまですね」

「!?」

落ちついたバリトンがその猫から発された。

「失礼――。私は、伽羅王が〈使〉、牙と申します」

十九郎の警戒に気づいて、「彼」がそう名乗った。

そして、有無を言わせぬ語調で、次のように続ける。

「忍様があなたをお待ちです。どうぞ、御同行願います」

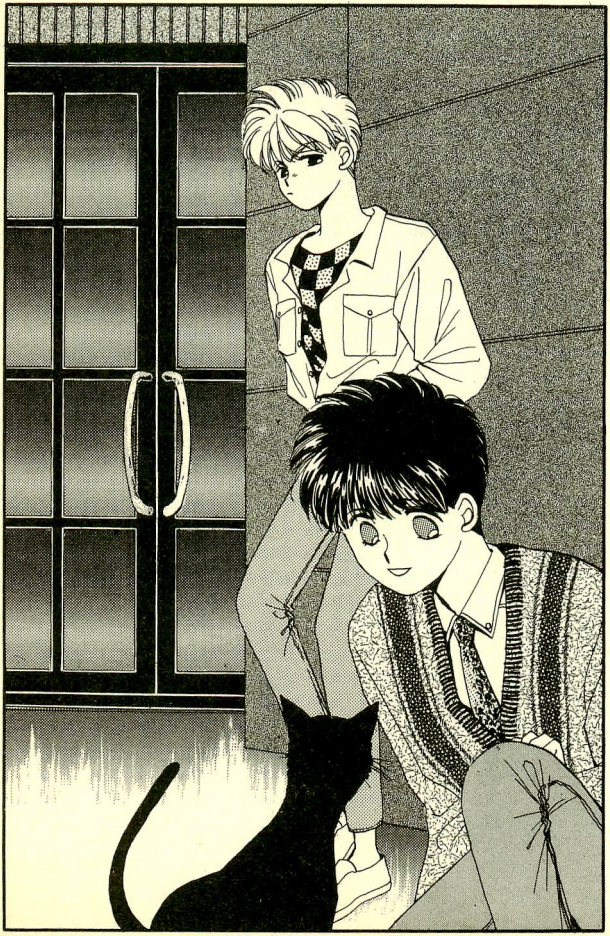
諒が亮介をつれて六本木のマンションへたどりついたときには、すでに忍の電話から一時間ばかりが経過していた。十時半である。

「いいのかな、こんなに遅く……」

エレベーターホールに踏みこんで、亮介は忍の都合を心配した。

「あいつが『来い』と言ってんだから、そういうことは気にせんでいいのだ」
諒が断言する。
「それより、その場の忍の思いつきで動かされる我々のほうが不幸だということを認識したまえ、亮介くん。あのなあ、忍のほうこそ亮介の都合を考えねばならん立場なのだよ、本当はっ」
「え、でも、俺、忍さんに会いたいし……」
「どーしておまえはそう誰にでも心を開いてしまうのだろう……」
ぼそぼそと答えた亮介に、諒がため息とともにそう嘆いた。
「そんなことないよ」
かなり本気で、亮介は言い返した。そんなことないから、今困っているのに。
「はいはい」
わかっているのかいないのか、諒が軽く手を振る。一階到着をしらせるチャイムが鳴って、エレベーターの扉が開いた。
と――。
マンションの入り口から小さな影が走りこんできた。細身の黒猫。ふたりの足元をすりぬけて、エレベーターの前で止まる。行く手をふさがれたかたちで、諒が緊張した。
「あれ……」

亮介が目をまるくする。
「牙だ」
「――へっ!?」
よもや敵か、と身構えそうになっていた諒が、一気に脱力した。
「牙だよね？」
亮介は黒猫の前にしゃがみこむ。ぱたり、と猫が尾を振った。
「お元気そうで、なによりです」
無愛想な話し方は、牙の癖なのだ。しかしその裏側には、微妙に嬉しげな響きがある。
「ほら、やっぱり牙だろ」
「あ、さよですか……」
人間だったり犬だったり猫だったりじゃ見分けなんかつかんわい、と諒が愚痴った。そういう問題ではないように亮介は思う。
「ああ……君たちも来てたのか」
背後からもうひとり、旧知の人物が姿をあらわした。
「里見さん……？」
思わず亮介は目を疑ってしまった。なんだか今日は、意外な人物と再会してばかりだ。
「どうも」



諒が軽く頭をさげる。
「東京に来てたんだな、水沢」
「実は今日からなんですが。——忍の呼び出しですか？」
「そうらしいね」
十九郎は諒に頷いてみせると、隣の亮介に視線を移した。
「崎谷君、先日はありがとう。同じ映画に二度つきあってもらって、申し訳なかったけれど」
「いえっ、あれはあれで、希沙良とふたりで観るより面白かったですから」
あんまりフォローになっていないことを答えてしまって、亮介は赤面した。十九郎がくすくすと笑う。
「正直だなあ。大丈夫、あいつには黙っておいてあげるよ」
「す、すみません」
「で、そちらでは何か問題でも？」
「いえ、今のところは何も」
真顔で答え、諒は先に立ってエレベーターへ乗りこんだ。三人と一匹を迎え入れてから、エレベーターは静かに上昇を開始した。
「里見さんのほうこそ、何かあったんでしょ？」
「化け物退治を少しね」

諒と十九郎のやりとりを聞いて、亮介は少しだけ意外に思った。——ふたりとも、亮介が相手のときとは段違いに冷静な口調になる。隙がなさすぎる。

「ケリはつきましたか、それで」

「わからないな。〈発火〉で一応、始末はできたと思う。ただ、斎伽さんがどう判断するか……それ次第だから」

「なるほど。だからあいつ、いきなり俺たちも呼びつけたりしたんだな」

そうか、これは対等な会話なのだ。亮介はふとそう気づいた。

優しさがない。

いつも優しい二人だから、そのことで違和感を覚えるのだ。でも、それはつまり。

（俺が、優しくされすぎてるんだ……）

エレベーターが九階に止まる。

何かを察したのか、牙がジャンプして亮介の腕の中におさまった。軽くて、毛の感触が気持ちいい。

「なついちゃって、こいつは……」

諒がいやな顔をした。

「ねえ里見さん、いいんですかね、伽羅王の〈使〉がこんな簡単に正体見破られたあげくに懐柔されてしまって」

「崎谷君は特別だよ」

苦笑して、十九郎は通路の奥へむかう。亮介は首を横に振った。

「俺が頼りないから、牙のほうが気をつかってくれてるだけですよ」

「そうかな……。それこそ、伽羅王の〈使〉がそんなに博愛主義だろうかという疑問を抱かせるけどね」

考えこむような素振りで十九郎がそんなことを口にしたとき、九〇七号室の黒いドアがひらいて冴子が顔を見せた。

「亮介ちゃんたち、遅ーいっ！　忍様お待ちかねなのにっ！」

「だからどおして、どおしておまえがそこに来てなきゃならんのかな？　わっかんないなあ水沢くんには」

ぐちぐちと諒が言う。キッ、と冴子がそれを睨んだ。

「だってなにか大事なお話があるって忍様が言うのに、あたしが来ないはずないでしょっ!?　さっさと入りなさいよ、ひとのことにケチつけてないで！　さ、亮介ちゃん、こんな奴は放っといてどんどんあがっちゃって。あ、十九郎くんもお久しぶり」

「こんばんは、冴子さん」

「……そのうち本気でグレてやろう、俺……」

玄関から居間までは短い廊下がつづいていて、両側の壁は全面、鏡張りである。ぴょん、と

亮介の腕から跳びおりた牙が、真っ先に廊下を走りぬけて扉のむこうに姿を消した。
ここへ来るのは二回目だ。土足のまま入ることには、相変わらずなじめない。鏡に挟まれた空間を歩き、亮介はもうひとつ発見をした。
再会が次々とつづくのは、別に偶然なんかじゃない。すべては忍の采配だ。諒も冴子も牙も十九郎も、自分の前へ現れることになったのは、斎伽忍ひとりの意志で……。
「御足労、どうもありがとう」
ひとりがけのソファで足を組んで、斎伽忍は一同を待っていた。人懐っこく相手の瞳をとらえる笑顔は、けれど生身の人のものと思われぬほど完璧すぎて、氷のように透明すぎて、亮介は息を呑みそうになった。
（また、変わった……？）
会うたびに、この人は印象が違う。しかし今の彼の美しさは、どこかに危険な因子を孕んでいた。それがなにかはわからない。わからないけれど。
「何か？」
部屋に入るなり立ち尽くしている亮介に、忍が声をかけた。
「いえ、あの……すごく綺麗になったみたいだって、思って……」
「……僕が？」
思いもよらなかったことを言われた様子で、そう忍は反問する。バカなことを口走ってしま

ったようで、亮介はあたふたと顔を伏せた。
「ご、ごめんなさい、そうです」
「どしたの亮介ちゃん、いきなり」
何をわかりきったことを、と冴子が呆れた目を向けた。確かに、いまさら改めて言うほどのことではない。
「ふうん……そうか。ありがとう、光栄だよ」
頬杖をつきながら、静かに忍が言った。その白すぎる腕。
(どうして?)
何が気になるのかどうしてもわからなくて、亮介は考えるのをあきらめた。ただ、胸騒ぎに似た感情はずっと消えなかった。
——危機感、かもしれない。

ガラスのミニテーブルの上に、冴子が台所からコーヒーメーカーを運んできた。
長椅子の定員は三人がいいところなので、諒は勝手にダイニングテーブルから椅子を奪いとってきて、忍からやや離れた位置にどかんと据えた。そうして逆向きにまたがるポーズで座りこんで、さっきから行儀悪く十九郎の話を聞いている。

期せずして、亮介は長椅子の真ん中に座ることになってしまった。つまり十九郎の隣で、忍の正面である。なんだか動きがとれない。

「……〈発火〉？　それは面白いね」

ひととおり十九郎の説明が終わると、忍がそう呟いた。独白のように。

発火現象、という言葉はたしか以前に一度、聞いたことがある。亮介はそう思いついたが、それがいつだったかはわからなかった。

「まず、僕にわかっていることを言っておくよ。……その『紙人形』には心当たりがある」

いきなり核心から、忍が話しだす。

「古い文書に、こんな記述がある。〈一将の近侍に『髪切り』なる者あり、女子の髪つかひて傀儡つくりいだすがわざにして、かの傀儡あやつり、髪切られし女子ら必ず二重身となりて、やがて皆いたづらになりぬべし〉つまり、それによると、十九郎が見たものは〈髪傀儡〉といって、妖者が女性の髪を使ってつくりだした〈人形〉ということになるんだ」

「傀儡、ですか？」

十九郎が確認した。諒は眉をひそめている。ここで突然、『髪切り』の一語が出てきたからだ。

「そう……。ちょうど今、首都圏を中心に流れている噂がこの伝承とそっくりの内容なんだ

よ。ただ、噂のほうには、『髪切り』が女性の髪を基材として人形を作り、それを使って被害者の『生気』を奪っているという部分が欠落しているんだけどね」

「なあ、そこまでわかってどうして仕事のしょっぱなにそれを言わないわけ？」

「今、こうして話しているだろう。一度にまとめて話したほうが効率的じゃないか」

割りこんだ諒を簡単に忍はあしらって、そのまま話をつづけた。答えになってない、と諒が唸る。

「しかし、その〈髪傀儡〉が具体的に何を表すのか、今までは明らかになっていなかった。だから十九郎の経験は貴重なんだ。普通のやり方で倒せないことも、結界が通用しないことも、『燃やす』方法があることもわかったからね……」

忍の足元では、牙がぴたりと床に身をつけて、微動だにせず彼の言葉を聞いている。

四人分のコーヒーを並べ終えて、冴子も亮介の隣に腰をおろした。わざわざ諒が椅子をおりてテーブルまでカップを取りにきて、再び椅子に戻ってから（もっと椅子をこちらに寄せればいいのに、と亮介は思うのだが）おもむろに口を開いた。

「それで要するにだ、『髪切り』がただの噂じゃないってわかったところで、我々にどうしろというんですか。そっちが本題でしょ」

「いつになく呑みこみが早いんだな」

「やかましい。——だいたい、その〈発火〉って、もしかして里見さんと俺だけの専売特許だ

ったりしないか？」
　忍が十九郎に目を向けた。
「希沙良にできるとは聞いていないな」
「……そうですね。あれは、質がまったく違いますから」
「と、いうことだよ、諒。僕を加えれば、三人になるが」
「どうせ忍は計算外だろ」
「それは事情によるだろうね」
〈発火能力〉を有する者は少ない。――つまり、あの傀儡を燃やすことができる術者の数が限られている、という話なのだ。亮介は少々意外な思いにとらわれた。
　術者の力を表現するときに、忍はよく『静』と『動』という言い方をする。
　もちろん、それはごく大雑把な分類で、実際はそれぞれの能力には複雑な個人差があるのだという。しかし、それでも、ずばぬけた運動能力と光剣〈朱雀〉をもつ『動』の代表選手のような諒と、鋭い感覚と強力な結界を武器とする『静』のタイプそのものの十九郎の、両名だけに共通する能力があるなんて、すぐには納得しにくい。
「発火はむずかしいんだよ、崎谷君」
　亮介が混乱しているのを察して、十九郎が話しかけてきた。
「あれは普通の〈火〉じゃないからね……具体的に言うと、〈浄化の火〉のようなものだから」

「へえ……じゃあ、里見さんたちって、凄いんですね」
亮介としては率直な感想だったのだが、あんまりまともな反応すぎたのか、諒が椅子からずり落ちそうになってしまった。十九郎が困ったように笑う。
「そこで感心されるために言ったんじゃないんだけどな。『凄い』というなら、中和能力だって十分すぎるほど『凄い』んだよ。今は『違い』の話をしているんだから」
「あ、あ……すみません」
「そこで謝らなくてもいいんだよ」
「あ、えーと……」
口をひらけばひらくほど泥沼にはまるようで、亮介は自縄自縛に陥った。隣で冴子がふかぶかと溜息をついた。
「亮介ちゃんって、ほんとにどこまでも亮介ちゃんだわ……」
「それは冴子たちが過保護なんだろう」
さらりと、忍がそんなことを言った。会話の流れが止まった。
「こうして見ていると、予想外にその傾向が強いので、実は僕は少し驚いているんだ。度を越すと成長の妨げになるよ。彼だっていつまでも『何も知らない』ままではない。それくらいわかっていると思っていたんだが」
過保護だなんて、正面きって言われたのは初めてだ。ショックを受けるよりも、ずっと考え

ていたことに回答をもらったようで、亮介としては腑に落ちる割合のほうが大きかった。それを認めるのは、また痛みをともなったけれど……。

「おまえの言い草こそ失礼だ」

低い声で諒が言い返した。忍はそちらへ目を向ける。

「そこでおまえが先に口を出すから、亮介は何も言えなくなるんだよ、諒」

「それとこれとは別だろうが」

「違わないさ。以前にもおまえは、それで失敗しているはずだが」

「――うるさい、黙れっ！」

突然、ひどく本気で諒が怒鳴るのを亮介は聞いた。コーヒーカップを床に叩きつけてもおかしくない勢いがあった。

動じもせずに、忍がその視線を受けとめた。

「僕に怒るのはかまわないが、それは根本的な解決にはならないな」

「……」

「それに、亮介のことは亮介が決めるものだ。僕がこれ以上なにを言っても意味がない」

「……そうやって、すぐに安全な所に逃げやがる」

吐き出すように言って、諒は椅子から立ち上がった。派手な音をたててテーブルにカップを置く。

「どこ行くのよっ」
それまで二人のやりとりを息をつめて聞いていた冴子が、我に返って問いかけた。
「トイレっ！」
ふりむいてそれだけ答えると、諒はずかずかと居間を出ていった。
「どっちが逃げてんだか」
腹立たしげに冴子が呟く。亮介は彼女の横顔に目をとめた。
十九郎が、コーヒーカップをソーサーに戻した。
「斎伽さん。お話を戻すようですけど、その『髪切り』は早急に始末したほうがいいと思います。——万一のことが起きてからでは、我々の手に余るかもしれません」
自分に関する話題を打ち切ってもらえて、亮介はほっとした。毎度のことながら、十九郎にはつくづく頭が下がる。
「万一、か。そうだな……」
忍はふと、考えに沈むような表情になった。
「基本的には、これは僕が諒と冴子に課した『仕事』なんだけれどね……。前にも言ったとおり、術者であるからという理由でおまえたちに危険を強制する気は、僕にはないんだよ。〈発火〉のことにしても、諒ひとりで力が足りるなら、十九郎の手をわずらわすまでもないだろうしね」

「たしかに水沢の邪魔になるようなことは避けたいと思っています。ただ、もしも冴子さんが」

不意に、十九郎が声を呑みこんだ。

十九郎がなにを言おうとしたのか、亮介にはわからなかった。しかしきっと、ここで言ってはならないことなのだ。それだけはいやでも感じとることができた。

「――すみません」

「いや、十九郎は悪くない。そのことなら僕も考えているよ。だから、早くこの件を解決したいという意見にはもちろん賛成だ」

「亮介ちゃん、コーヒーのおかわりは？」

いきなり冴子が横から問いかけて、亮介はふたりの会話に口を出すきっかけを失った。

「あ、うん、お願いします」

「ノーシュガーでミルクよね」

断ったら承知しないぞ、という無言の圧力が彼女の背後にある。あえなく屈して亮介はカップを差し出した。まあ、忍と十九郎の間に割りこむには、やや勇気が足りなかったというのが正しい。

（これだから駄目なのかな……）

でも訊かれたくないことなら、無理に訊くべきでないと、そう思うのも真実なのだ。

そうやって一歩後ろにさがるから、いつも会話の『外側』にいることになってしまうのだろうか。教えられるまでは何も知らないままで。

「必要なら、呼んでください。それだけです」

慎重に、十九郎が言葉を選んだ。

「わかった。僕としても、まだ静観するしかない段階なのでなんとも言えないが……〈髪傀儡〉を倒すことで、その背後の『髪切り』を誘い出すのが先決だろうと思っている。今のところ、『髪切り』が敵として意識しているのは十九郎ひとりのはずだ。場合によっては、その点を利用することもあり得る。憶えておいてくれないか」

「はい」

「あの……」

今度はおずおずと、亮介は口を開くことに成功した。

「その、〈髪傀儡〉にですけど、中和能力って効果はあるんですか？」

するとそれまで冷静な色だけに占められていた忍の瞳が、穏やかな笑みを含んだように見えた。こちらをふりむく。

「ようやく君が自分から尋ねてくれたな」

忍は待っていたのだ。まさかそんなこととは思わなかったので、亮介はかっと血液が頭にのぼるのを感じた。なんというか、恐縮してしまう。

「正確には、わからないと答えるよ。ただ、全く効果がないはずはないと僕は読んでいる。でなければ、君にわざわざこんな話を聞きに来てもらったのが無駄になるからね……」
「だからきーさんが仲間はずれなのかしら。そのへんが根性悪いよね」
諒が居間へ戻ってきた。今の発言は忍に向けられたものらしい。
「なんで冴子がいるのかもわからんし。その理屈だと」
「やけに絡むんだな。それで気が晴れるのか？」
あっさりと言って、忍がソファから立ち上がった。
「話すべきことは、以上で終わりだ。諒、冴子を送っていくように」
「なんで俺が？　こいつならジャングルの中でもひとりで平気だろが」
「そうしろと、僕が言っているんだよ」
不機嫌に顔をしかめた諒へ、忍が重ねて言う。
「いいです、忍様。どうせ歩いて十分くらいだし。こんなバカ要りませんから」
キッ、と冴子が目を上げて言い放った。全員のコーヒーカップを回収して、台所に姿を消す。これはヤバいかも、と亮介はコーヒーメーカーを抱えて冴子のあとを追った。
おそろしいスピードで冴子はカップを洗い、乾燥機にぶちこんだところだった。
「さ、冴子ちゃんってどこに住んでるの？」
「すぐ近くにひとり暮らしよっ。じゃあね亮介ちゃん、また明日っ」

駄目だ、こちらの言葉など聞こえていない。ずかずかと冴子は亮介の目の前を通りぬけ、コートの袖に腕をとおして、風のように台所を出ていってしまった。

「さよならっ」

聞こえよがしに言って、冴子が玄関へ消えた。

「……彼女にも、ガードをつけたほうがいいんじゃないですか？」

十九郎が静かに尋ねた。

「狙われるのは女の子だけだとわかっていて、そのうえ彼女は術者ですからね、用心するに越したことはないでしょう」

忍に問いつつ、諒に向けても言っているのだろう。片手でぐしゃぐしゃと髪をかきまわしてから、諒がムッとしたまま上着をつかんだ。

「はいはいっ。ふつつかながら行かせていただきましょうっ」

「十九郎の考えはもっともだが、冴子を四六時中ガードさせるつもりはないよ」

部屋の出口へ向かう諒のことはまったく無視して、忍が答えた。

「いざとなれば僕が守る」

（――!?）

なんだそれは、と亮介は脳天をひっくりかえしそうになった。

いくら冴子に甘いといっても、忍がこんなことまで言うとは思わなかった。それではまるで

忍の……。

「ふうーん……」

諒は無表情に呟いたが、それだけだった。

「んじゃ亮介、またな」

「あ、うん」

簡単に言って諒が姿を消し、玄関のところでなにやら騒がしく怒鳴りあう声がしたと思ったら、やがてそれもドアのむこうへ移動して聞こえなくなった。

「それじゃ、崎谷君、帰ろうか」

何事もなかったような顔で、十九郎が声をかけた。なにがどうなっているのか。現実感が遠ざかるのを覚えながら、亮介は力なく頷いていた。

4 迷宮

「あの方が、面白いことを言っていましたね」
ぽつりと、牙が切り出した。黒猫の姿のままでいる。
「お綺麗になられたと……」
「ああ、そのことか」
忍が笑う。私室のデスクに分厚い本をひらいて。
「あんな風に言われることもめずらしいよ」
「忍様」
感情のほとんど含まれぬ声で、さらに牙は言葉をつづけた。
「あなたはもしかして、あの方々が好きなのではありませんか？」
「――――」
肩ごしに、忍がふりむいた。

「何故、そう思う？」
「いえ……」
私はただあなたに歩みつづけてほしいだけです。そんな呟きを胸の内へしまいこんで、牙は首を横に振る。
「何かを恐れているんだな。何を？」
忍は再び活字の羅列へ視線を戻した。牙はその背中を見上げ、少し間をおいた。
「……わかりません……いいえ違う、恐れてなどいません。あなたがそうして私の前にいてくださるなら、それでいい。ですが……」
「謎かけのようだよ、牙」
彼は明るい言い方をする。牙は言葉を切った。
では自分の抱える不安は、この人の内には芽生えていないのだろうか。
それならいい。それなら、自分ひとりで耐えればいいこと。
「！」
牙は息を呑んだ。床を蹴ってデスクにとびのる。
「忍様」
「静かに」
忍が制止する。かたく両眼を閉ざしたまま。

デスクに上半身を伏せるようにして、彼は掌で額を覆い、激しい痛みと闘っていた。錐を刺すような頭痛。血の気を失った腕に力がこもり、かすかな震えを生じた。

「……大丈夫だ、すぐに収まる」

その声だけは、いつもどおりに平静なものだった。しかし牙はデスクからまた床へ戻り、一気に人の姿へ変形を果たした。

「寝室へ」

「歩いていけるよ」

「いえ、お連れします」

激痛の波がゆっくりと退いていき、ようやく忍が目をひらいた。色の薄い彼の瞳は光を受け、底まで透けてしまいそうに見えた。

仕方がないのだ。牙は知っている。生身の『器』に強大すぎる『力』を負う以上、こんなことは仕方がないのだ。どんなに手を尽くしても、どれほど抑えても、こうして間欠泉のように反動はやってくる。

「心配することはない」

忍が言う。

「まだ時間はある」

「……はい」

立ち上がろうとする彼に肩を貸し、牙は低く答えた。それ以上、彼にとって重荷になるとわかりきっていることを、自分が言うわけにはいかなかった……。

「厳しいね、あの人は……」

十九郎がタクシーをつかまえて、ついでに中野まで送ると申し出てくれたので、亮介は現在、暗い車内にいる。彼の家がある自由が丘とはまるきり正反対の方向になってしまうのだが、こういうとき相手に辞退を許さないのが十九郎なのだ。気がついたらバックシートに誘いこまれていたようなもので、この調子で女の子にデートをもちかけたら百発百中ではなかろうか、などと亮介は不真面目なことを考えた。――弁護するなら、それくらい頭が混乱していたのである。

が、十九郎がそう呟いた時点で、これは忍のことを尋ねる絶好のチャンスではないか、と亮介は思い至った。そうだ、十九郎なら忍とのつきあいも長いようだし。

「あの、里見さんは、いつから忍さんと知り合いなんですか？」

意表をつかれたらしく、十九郎が目を瞠った。

「ああ……そうか、そんな話をしたことはなかったね。知り合い、と言われるとなんだか違和感があるけど……」

ある意味では、亮介の知るかぎりで「斎伽」ともっとも縁の深い立場にあるのは十九郎かもしれないのだ。

純粋な斎伽の血統を四分の一だけでも引き継ぐ、貴重な術者。それは和泉希沙良もそうなのだが、彼のほうは斎伽の〈本家〉から、母親の一件で半分絶縁された状態になっていて、忍ともせいぜい顔見知り程度だったのだと聞いている。

十九郎の母親である夏江にしても、一族の因習にとらわれぬ革新的な存在で、必ずしも本家の中枢とつながるような人物ではない。

「親族会というものがあるんだよ。一年に四回くらいかな。形式だけで内容のない、つまらない集まりなんだけど、一族の人間が一堂に会する日なんだ。十歳のときに母親に初めてそこへ連れられていって、ずっと末席のほうに座らされて、他には子供なんてほとんどいなくて心細くてね……その時、いちばん上座に同じ年頃の子供がいるのに気がついた。それが、あの人だったよ」

懐かしげに遠くを見ながら、十九郎が言う。

「じゃあ、ずいぶん昔からなんですね」

「そういうことになるのかな……。でもね崎谷君、意外かもしれないけど、その頃はまだ、あの人はとても口なんかきけるような相手じゃなかったんだよ。それこそ『神様』だからね。ずっと遠くから眺めるだけでも大変なことのように扱われている人だったから、最初は声を聞い

たこともなかったよ」

「へえ……」

「本家はそういうところなんだよ、あの人をまつりあげて塀の内に封じこめて、守ることだけ考えて、真綿で包むみたいに――」

その声には明らかに憤る響きがあって、亮介はふと胸をつかれた。

滅多にマイナスの感情を表に出さない彼が、こんな風に怒りを隠さず話すのは、それだけ思いの度合いが強いということだろう。しかもそれは十九郎自身の力ではどうすることもできない『権力』へ向けられているから……。

広い広い屋敷の内に閉じこめられた、若すぎる長。

大人たちに囲まれてどこへ逃げることもできずに。学校へなど、もちろん行けるはずもなく、同年代の友人を望むなど夢のまた夢でしかなくて。

そうして何年も、何年もずっとひとりで、綺麗な人形のように。

「……なんだか、忍さんじゃないみたいだ」

思わず亮介はそうひとりごちた。十九郎が表情をやわらげた。

「うん、君の言うとおりだと思う。それは今だからわかることだけど……」

あるとき突然、忍は宣言したのだ。すべての決定権は自分にあるということ。自分の行動に最大限の自由を保証すべきこと。あらゆる拘束を排除すること。――それは決して完全に履行

されたわけではなかったが、専制とも呼べるほど強い態度を彼が打ち出したことだけでも、一族にとっては画期的な事件だった。

「たった二年くらいしか経っていないんだよ、その時から」

「二年!?」

それはすごく最近のことではあるまいか。

「そうだよ。確か、その一年後にあの人が大学に行きはじめたから……」

「えっ？　忍さんって、本当に大学に行ってたんですか!?」

「ちょっと、その言い方はあんまりだよ」

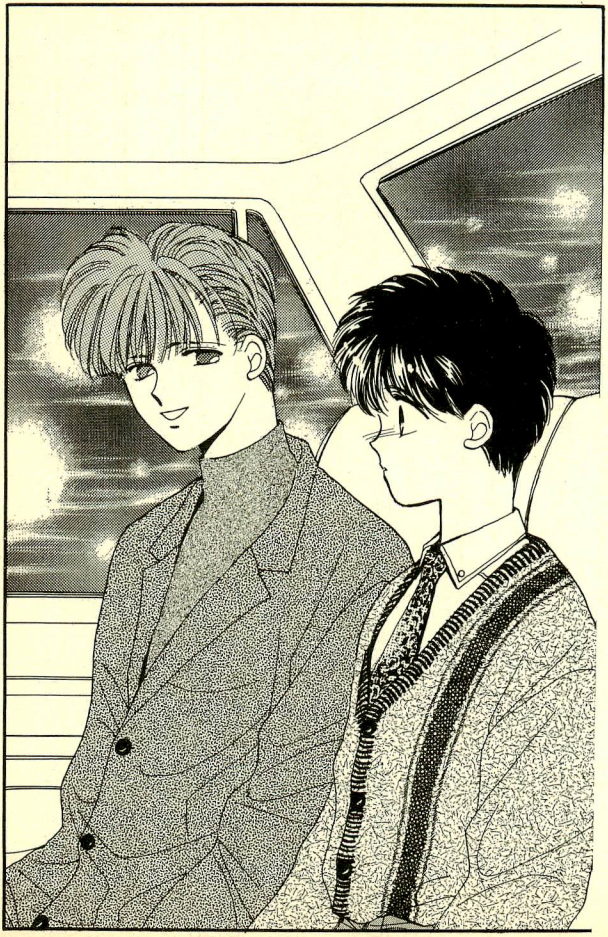
十九郎は笑いだしてしまった。亮介の言いようが、あまりに身も蓋もないものだったらしい。

「行っていると思うよ。行ける範囲で、だろうけど。ただ、それに加えて、例のモデルの仕事まで始めたと聞いたときにはさすがに俺も目の前が真っ暗だったな。この人どうしちゃったんだろうなんて思って……もちろん、本人には言わないけどさ」

笑いが止まらないままで、十九郎が言う。

いつになくくだけた話し方になっていて、それがなかなか新鮮だった。口ではこのように言っていても、そんな忍の変化は十九郎にとって嬉しいことだったのかもしれない。

「忍さんがモデルって、似合うけど似合いませんよねえ」



「その表現、秀逸すぎて困るな……」

亮介がしみじみと言うと、十九郎はさらに苦しそうに笑いつづけた。こんなにめずらしい十九郎をひとりで見るのはもったいないなあ、などと亮介は思ってみたりする。

「でも本当、なんで忍さんって……大学生はわかるけど、モデルまでやってるんですか？」

なにもそんな下賤な仕事をしなくても、という気にさせられるのだ。忍の場合。

「いや、あの人は、仕事量そのものはとても少ないんだよ。雑誌の写真しか撮らせないし。あれがあの人にとってはせめてものストレス解消になってるんじゃないかと、俺は勝手に理解しているんだけど……なんなら今度、君から訊いてみたらどうかな」

ようやく真顔に戻って、十九郎がそう答えた。

「はあ……ストレス解消か……」

「あるいは社会勉強とか、人脈作りとか。きっかけはスカウトらしいから、単に断りそこねたとか……ああ、今のはオフレコ」

どうも今夜は問題発言が多いな、と十九郎は口許を片手で覆っている。

「なんだか今日の里見さんはお茶目だと思います」

「あのね、崎谷君……」

フォローすべき問題児が不在のせいかもしれない。

それはそれで人間味があって、好感がもてると亮介は思うのだが。

いつもこれくらい柔らかくてもいいのではないだろうか。それとも、これは特別なケースなのだろうか。

「里見さんって、忍さんのことが好きなんですね」

つまりはそういうことなのだろうという気がする。

「え？」

十九郎の表情が、変わった。考えてもみなかったことらしい。

（あれ？）

亮介としても意外だった。全然ズレたことを言ってしまったのか。

（違うのかな……）

十九郎は視線をフロントガラスのむこうへ向けて、それから口を開く。

「尊敬、してるよ」

「……そうですか」

それ以上を訊くことができない雰囲気があって、亮介は口をつぐんだ。何が違うのだろう。

「君は、いいね」

沈黙を招いた責任をとるかのように、今度は十九郎のほうが話しかけてきた。

「え、俺ですか？」

「うん……君はきっと、誰にでもそういう考え方ができるんだな……」

「――」

亮介は返答に迷った。そういう考え方、と言われてもわからない……。

十九郎がこちらをふりかえる。対向車のライトが走りぬけて、一瞬だけ彼の顔を照射していった。

「誰のことも好きになろうとするんだよ」

「！」

俺は別に、と言い返しそうになって、亮介は息を止めた。

そういうことなのかもしれない。

十九郎が言っているのは、多分さっきの諒の言葉と同じだ。誰にでも心を開く――そういう顔をして、だから敵を作らない。

（誰にでも良い子の顔をしてるだけ？）

そんなつもりじゃないけど。そんなつもりじゃないのに。だけど――。

「そこを右に曲がるんだったよね」

「――あっ、はい」

「すみません、次の角を右に行って三軒目です」

十九郎が運転手にそう告げて、タクシーが右折した。そうやって亮介の家の場所までしっかり記憶しておいてくれる十九郎のほうが、よほど誰にでも優しくて、だから誰のことでも好き

なように見えるのに。
後部座席の自動ドアが開く。
「ずいぶん遅くなったけど、家の人、大丈夫？」
そう十九郎に言われて、亮介はハッと顔を上げた。いつの間にか我が家の目の前だ。
「いえっ、あの、平気です」
「そうか。それじゃ、また今度」
「あ、タクシー代……」
「いいよ、俺のほうがつきあってもらったんだから」
「でも」
「あんまり粘ると俺の家まで連れていくよ、このまま。それでもいい？」
十九郎は真顔で怖いことを言う。
（ま、負けた……）
例によって財布を出す隙すらないまま、亮介は車の外へ送り出された。
「里見さんも、気をつけて」
「うん、ありがとう。おやすみ」
軽く微笑する十九郎を乗せて、車はまた走りだす。
それを見送って、亮介はしばらくその場を動かずにいた。

——誰のことも好き、なのは本当かもしれない。少なくとも、自分は忍のことも十九郎のことも尊敬しているし、諒も希沙良も冴子も友達でいたい相手だから。

それでも。例えば。

もしも、誰かを選べと言われたら？

「それは違う……」

頭をひとつ振って、亮介は呟いた。そういうことではないと思う。思いたい、のかもしれないけれど。

「あ……」

十九郎に訊きそびれたことがあるのに、亮介は気づいた。

忍と冴子の関係について、彼は何か知っているようだったのに……。

「なんだおまえ、今ここに住んでたわけ？」

階段を上りながら、諒が言った。

冴子は三歩先を進んでいる。エレベーターを使わずに五階まで歩いて上るのは、後からついてくる諒へのいやがらせである。

「だってここが、忍様の所からいちばん近いんだもの」

「学校には不便だろが」
「だから何よ」
冴子が居座っているマンションは麻布のはずれにある。忍の部屋からは十分もかからない。
「べーつにー」
諒は肩をすくめて、それだけ答えた。
ここの部屋には、自分もずいぶん世話になった。一年以上も昔のことだが。それは冴子だって承知しているくせに。
――十五歳の、秋から冬にかけて。この建物からほとんど出ずに、意味のない時間を何日も何日も。
「なあ、おまえさ……」
階段の壁の色が塗り替えられている。しばらく見ないうちに。
「何よ」
冴子がふりむいた。五階通路への出口を曲がるところで。
「その髪、切ってしまえばいいと思うんだが、俺は」
追いついて、諒が隣に並んだ。思いきり冴子が首を横に振る。
「それだけは死んでもいやっ！」
「わがまま言ってる場合じゃないでしょうが。例の『髪切り』の件が解決するまで、ちょっと

の間ガマンするだけだろ？」
「ぜっっったい、いや」
殺気のこもった目を諒に向けて、冴子はキーを取り出した。
「髪なんてすぐ伸びるってのに……」
「ここまできれいに伸ばすのにどれだけかかったと思ってんのよ、バカっ！」
「そんっな、何年もかかるような長さじゃなかろうが、おまえのはっ！」
「ち、がうっ、でしょっ!?　ただ伸ばすだけなら誰でもできんのよ、小まめに切りながらきれいに伸ばすのが難しいのよ、それくらい考えなさいよっ！　無神経っ！」
「わかるかそんなもんっ！　女じゃないんだからっ！」
「これからわかればいいのよ」
冴子が断言する。諒は全身からがっくりと力を抜いた。
「おまえ、要するに俺の言うこと全然聞こうと思っとらんだろう」
「あたしがそんなもん聞くと思うほうが大間違いじゃないの、そもそも」
「そーでした、期待した俺がバカでした……」
階段から二つ目のドアに、冴子はキーを差し込む。
「あれ、お隣がまだ吉本さんだ。へえーっ」
隣の表札を見やって、諒がひとりごちている。ちらりと冴子が見返った。

「……あがってお茶でも飲んでく？」
「賞味期限の切れた菓子でもあるわけ？」
「どうして小さな親切を素直に受けとれないのよ、あんたはっ」
怒鳴りつけられてはじめて、諒が愕然として数歩あとずさった。
「明日は雪じゃなかろうか」
「あんたねえ……」
呆れる冴子を見おろし、しかし諒は小さく息をついた。微妙な笑顔になって、上着のポケットに両手を突っこむ。
「お気持ちだけいただいときます、はい」
「あんたこそ、空からヤリでも降らせるつもりじゃないの？」
「何をおっしゃる、白ウサギ」
にっこりと諒が笑ってみせる。
なにか言いたげに冴子はそれを見たが、視線をそらしてドアのノブに手をかけた。
「髪は切らないわよ、あたし」
「ま、いいんじゃない？　忍が黙ってんなら」
そんな一言を残して、諒は歩きだした。冴子が目を上げた。
ふりかえりもせずに、階段へ戻っていく後ろ姿。

「――――」

唇を噛んで、冴子は勢いよくドアを開けた。ばん、とけたたましい音とともに、その姿が扉のむこうへ消えた。

「おやすみなさーい……」

静かになった廊下の途中で、やがて諒がかすかにつぶやいた。

5　スパイラル・ハート

翌朝、いつものように鞄を抱えて家を駆け出した神原亜衣は、門の前に意外な人物を見いだして目をまるくした。

「どうしたの、崎谷君……」

家が近いとはいっても、時間のない朝のことだし、わざわざ亮介が迎えに来るなんてはじめてのことである。亮介の家からだと、かなり遠まわりになるはずなのに。

「うん、ちょっと、できるだけ早く相談したいことがあって……」

亮介が口ごもる。

とにかく、学校に着いてしまったら、今日も諒や冴子と顔を合わせることになるのだ。どうしてもその前に、自分の内の疑問に決着をつけておきたくて、亮介としてはこの方法しか思いつかなかったのである。

「それは全然かまわないけど」

そんなことならもっと早く出てくればよかった、と亜衣が呟いた。いつもならそれだけで頭に血が上っているところなのだが、今朝はそんなことにも気がまわらないままで、亮介は歩きながら昨夜のことをかいつまんで説明した。

「――え?」

駅に到着するころになって、ようやく話題も問題の一点にたどりついた。亜衣がさすがに声をはりあげた。

「ちょっと待って! それじゃ忍さんって、冴子さんのことが好きなんじゃないの!?」

「ああああっ、亜衣ちゃんっ、そういうこと大声で言わないでくれる!?」

誰に聞かれるか知れたものではない。慌てて制止して、それから亮介も声のトーンを落とした。

「……でもそれって、すごく考えにくくて、だからそんなことないんじゃないかって、ずっと思ったりしてたんだけどさ……」

「考えにくいって、何? 忍さんらしくないってこと?」

「うん。それもある、かな」

「そうなのかな……。あたしは、かえって納得できるかもしれないって、今とっさに思っちゃったんだけど……」

考えこみながら、亜衣がそんなことを言う。

「納得？」
「だって、水沢君に勝ち目がないじゃない」
「――――」
一瞬、亜衣がなんのことを言ったのか、亮介にはわからなかった。
「え、えええっ!?」
はたと我に返って、反問する。まさかそんなこと。
「だから。忍さんを敵にまわしたら、水沢君が太刀打ちできるはずがないじゃない？　実力的にも、立場的にも」
亜衣がくりかえした。
「そうしたら、もう最初から水沢君が手を引くしかないじゃない。……今の水沢君を見てると、なんだかとってもそれが納得できるような気がするんだけど」
「そ、そんな……いくらなんでも……」
そんな泥沼な状況、できれば想像したくない。違和感がありすぎる。よりによって、あの三人の間で。
「崎谷君はそういうこと考えたくなくて、無意識に避けていたんじゃないかしら。違う？」
ズバリ、と亜衣に図星を指されて亮介は絶句した。
「……さ、さすがだと思う」

「もちろん、こんなの他人が勝手に想像する範囲内のことでしかないから、ここで結論なんて出せないけど……」

中野駅の改札を通って階段を上りホームへ出る。

しばらく頭の中で思考を組み立ててから、再び亜衣が口を開いた。

「……じゃあ、とにかく、あたしは水沢君とクラスが同じだし、崎谷君のクラスにだって冴子さんがいるわけだし、少し様子を見てみたら？　あんまり勘繰ったりするのも嫌でしょ、崎谷君は」

「うん、そうだね……」

亜衣の言うことはいちいち正しいので、亮介はもう頷くことしかできない。

と、亜衣がふと思いついたように、顔を上げて亮介を見た。

「でも、真相はともかくとしても、崎谷君はそれで、水沢君にどうしてほしいと思ってるの？」

「――――」

頭の中が真っ白になるかと、亮介は思った。

そんな複雑怪奇なこと、こんな自分に一度で判断できるわけがないではないか。

松田瑞穂はここしばらく、釈然としない日々を送っている。

正確には、今日で四日目だ。愛する（！）崎谷亮介大先輩のところに、よくわからない二人組の転入生がやってきたあの日から、だと思う。

友達だかなんだか知らないが、あのふたりに呼び止められたせいで昼休みの逢瀬は駄目になってしまったし（タッチの差で亮介が出ていった、と山岸に聞かされて地団駄を踏んだ）、感動の再会だかなんだかで放課後も亮介はそっちに引っぱっていかれて……思えば、あのあたりからケチがつきはじめたのだ。

次の日からは一応、亮介もまた部活にやってくるようになったが、なにやら心ここにあらずといった様子でため息ばかりついている。最初のうちは、そんな先輩もカゲがあってかっこいいかも、などとミーハーして見ていたものの、それが三日も続くとさすがに気になってくる。

「また授業の課題やってんの？」

遅れて美術室にやってきた久美子が、呆れた顔をした。

「どーっせ、授業中は寝てるもん」

本日、美術室に顔を見せている部員は六人で、うちまともに絵を描いているのは瑞穂ひとりである。久美子は今日発売のマンガを三冊も抱えてこれから読みまくる態勢だし、昼寝をしている人間が一名、ポケコンで遊んでいる人間が一名、数学の問題を解いている人間が一名、ため息をついている人間が一名。

《また先輩に手伝ってもらえばいいじゃん》

久美子がシャーペンで机にそう落書きをした。

《だって悩んでるんだよ、あの人》

こそこそと瑞穂も机に鉛筆を走らせる。

《そういう時こそ明るく話しかけて気分転換させるんでしょー?》

《あたしそれ、昨日でザセツした》

《こんじょーナイんだよ》

《だってさあーっ、あの人って気分転換するヒトじゃないんだもん！　悩んだまんまでムリに笑うヒトなんだもん!!　かわいそうじゃん！》

《それは言えた》

《でしょお!?》

そこまで書いて、瑞穂は消しゴムを取り出し、ざざざざ、と机をきれいにした。筆談は証拠を残さないのが原則である。

《彼女とうまくいってないんじゃない?》

久美子の新たな一文。むっ、と瑞穂は口をとがらせた。

《だったらいいけどさあ——っ》

あんまりその望みはないような気がするのだ。朝の通学電車で見かけるかぎりでは。

もちろん「彼女」になんて遠慮するつもりは全然ないが、亮介の性格からして、一度まとまった関係をそうあっさり崩したりしないだろう、とは思う。

そんなのは——こちらが一年遅く生まれたという条件だけで負けを喫するなんて構図は、理不尽以外の何でもない。だからって諦められるようならはじめから恋なんかしないんだよバカ、とどこかへ怒りをぶつけたくなってくる。

「責任とってほしいよねえっ!?」

瑞穂の大声に、ぎょっとして亮介が目を向けた。

「いきなり寝ぼけないでよ、瑞穂」

「——あれ？」

久美子の冷静なフォローのおかげで、瑞穂はなんとか場をごまかすことに成功した。

《やばい、つい理性をとばしてしまった……》

《おバカもの！》

もう、静物スケッチなんてやってられる気分ではない。鉛筆を放りだして、瑞穂は席を立ち上がった。

「久美子ー、なんか冷たいもん買いにいこー」

「そだね」

「皆さーん、あたしたち買い出しに行きますけどリクエストありませんかー？」

と、ちょうどいいタイミングでドアが開き、部長の山岸が姿を見せた。
「なに、買い出し？　サボりだなー」
「げげっ、部長。たまにはいいでしょー？」
「部費もらってきたから、それから出してやろう。お茶会ということで」
「うわお、部長、話せる人だったんですね！」
タダで飲み食いできるとなったら、美術室のそこかしこからリクエストの声が飛んだ。サボりまくっていながら現金な部員たちである。
「えーと、コーラはライトのやつで、ジャイブのカフェオレと、ウーロンとレモンティーと、チーズのカールと、ポッキーはビターで、ひゃー、憶えきれないよーう」
「あ、俺、なんでもいいから！」
椅子から腰を浮かせて、そう最後に叫んだのが亮介だった。
（出た……）
先輩はこれだからなあ、と瑞穂は複雑な感慨に浸った。これで瑞穂の負担を軽減しているつもりなのだろうが、こっちは彼の欲しいものだったら他の何を捨てても頭の中にたたきこむというのに。
「崎谷先輩、それじゃかえって買う人間が困っちゃいますよ。この子バカだから決められないし」

脇から久美子が口を出した。
「え、そうか……」
亮介がうろたえる。そんなところまで可愛い、などと瑞穂はまたもや別世界へ行っている。
「じゃあ瑞穂、あたしのかわりに崎谷先輩と一緒に行ってさ、その場で決めてもらいなよ」
「――う、うんうんっ！」
ひょうたんから駒とはこのことではあるまいか。瑞穂は渾身の力でもって首を縦に振った。
（久美子えらすぎるっ！　今度チャーシューメンおごろうっ！　ギョーザもつける!!）
「俺？」
亮介は目をまるくしている。
「いいんじゃないか、行ってくれば。荷物持ちを兼ねてさ」
だいたい事情のわかっている山岸が駄目押しの発言をしてくれて、ああやっぱりこの美術部に青春を賭けてよかった、と瑞穂は幸福をかみしめた。

「崎谷君いなくて、淋しいんでしょ」
すぐ横から声をかけられて、諒は顔を上げた。
ここは校庭のはずれである。使われていない鉄棒と砂場が目の前にある。古ぼけたベンチに

腰をおろして、諒はサッカー部の練習風景を見るともなく眺めていたのだ。

「あら、やっぱりわかってしまったのねっ。そうなの、せっかく東京きたのに亮介くんクラス違うし放課後もクラブだし、おまけに亮介くんてばアタシのこと避けてるみたいだし、諒ちゃんとってもセンチメンタルなのよ。とほほーん」

「……今の発言は、水沢君にしてはちょっと練りが甘いかも」

オーバーな仕草で泣き伏してみせた諒に、亜衣はクールな判断を下す。がっくし、と諒はもう一段階おちこむポーズになった。

亜衣は体操部のジャージ姿である。今日は体育館を使えないので、外で自主トレということになっているのだ。

「冴子さんは？」

「さあ？　先に帰ったんじゃないですか？」

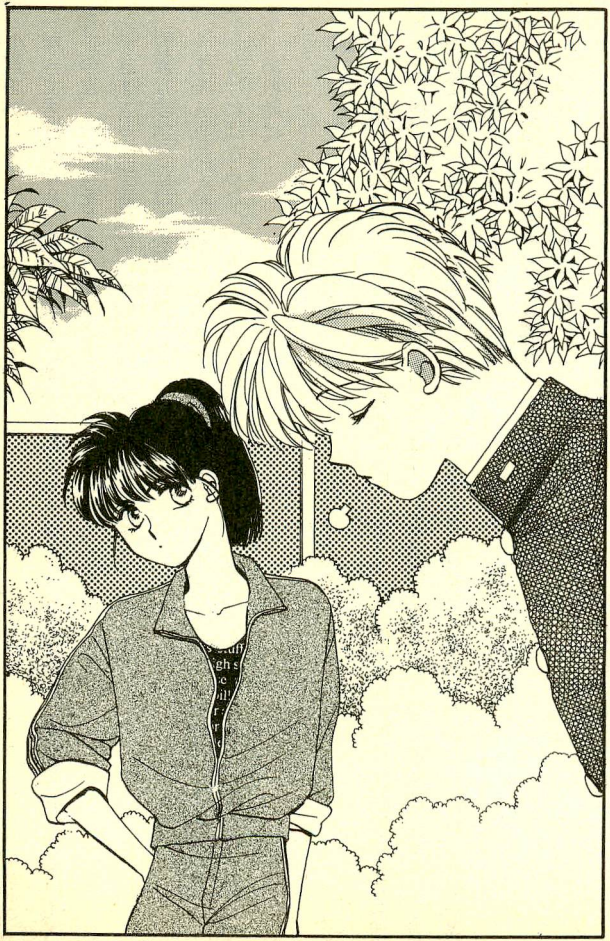
「そっか、案外、お互いの行動って把握してないのね」

すとん、と諒の前にしゃがみこんで、亜衣が呟いた。諒はなにか言いかけたが、軽く笑って頬杖をついた。

「崎谷君って、水沢君のこと避けてたりする？」

「え？　――いや、さっきのは言葉のアヤですが」

「でも、確かに、水沢君が意外とおとなしいなあっていう気はするのよね」



小首をかしげて、亜衣が見上げる。
「だって水沢君なら、例えば強引に美術部に入っちゃうくらい図々しい態度に出てもおかしくないのに、今回はそうやって崎谷君につきまとってないでしょ」
「つきまとうって表現には否定的なニュアンスがあるよーな……」
複雑な表情で諒は天を仰いだ。
もちろん前回この学校に来たとき亮介の後をしつこく追いかけていたのは、彼の身柄をガードしなければならない、という大前提があったからなのだが。しかしそんな口実を抜きにしても、あの時は……。
「うん……」
諒がゆっくりと口を開く。
「だって俺、またいなくなっちゃうからね、あんまりここで亮介くんの学校生活に踏みこみすぎると、後で亮介くんに迷惑がかかるのではないかと思いますでしょ？　前回はつまり……言ってしまえば、俺のほうも亮介と友達になるってことは考えてなかったから、あれくらい無茶ができたんじゃないかしら。なんて」
「――水沢君って、そんなに殊勝な人じゃないと思う」
「か、神原さんって俺のことなにか誤解してないですかー!?」
せっかく真面目に決めたところを見事に崩されて、諒は情けない声を出した。

「っていうかね、水沢君って、『あんまりここで踏みこみすぎると迷惑になるかも』みたいなことはいろいろ考える人だろうし、そういう意味ではとっても殊勝なんだけど、いざ崎谷君を目の前にしたら結局フラフラッとついていっちゃう人だと思うの。目先の幸せに流されるというか」

「がぁーんっ」

そういえばそうだった。あまりに鋭すぎる指摘に、諒はすっかり言葉を失った。

「しかも崎谷君って、その手の余計な不安を忘れさせてくれる人だから、相乗効果があるわよね」

「うわわわわわ」

「にもかかわらず今、水沢君がこんなこと言ってるのって、また別に理由があるはずじゃない？」

正面から亜衣が問いかける。

「……たいした人だなあ、神原さんって」

「だって水沢君のライバルだもの」

「なんだか俺、すっかりお手上げになってしまいましたよ」

長すぎる前髪でぱっさりと顔を覆うように、諒が首を前へ倒した。亜衣はしゃがんだまま、そんな諒の姿に目を向けている。

「そーか……うーん、そうなのかなー……」
ぼそぼそとひとりごちてから、やがて諒が姿勢を変えずに切り出した。
「あのですねえ神原さん、俺は長男なんですよ」
「そうなの？　あたしは末っ子なんだけど」
「なるほど……。うん、それでね、亮介くんは一人っ子なんですよ」
「うん、そうよね」
「そう。いや、それだけなんですけど」
「――それだけって言われて納得する人がいるっ!?」
さすがに亜衣が地面に両手をついて力説した。
「やっぱり駄目か……」
「あたりまえでしょっ！」
「むー……」
思いきったように顔を上げて、諒は息を吸いこんだ。
「神原さんを見込んで、ヒミツのこと言うけど」
「ムリに言わなくてもいいけど」
「いや、ちょっと愚痴だから、これは。うん……俺はねえ、駄目なんですよ。好きな相手のことは縛ろうとするんですよ」

意外なほど淡々と、そんな言葉が語られた。亜衣は無表情を保って、それをじっと聞いていた。

「保護欲と、独占欲で。なんだかそういうのは避けたいと思うわけで。昔、それで失敗したことがあるし、ますます」

「……ふうーん」

「困ってしまいますよね」

吐息まじりに諒が呟く。

でも、と言いかけて、亜衣がふと口をつぐんだ。

校庭を囲むフェンスのむこうに、二つの影。

「――それは、とても、困るけど、でも好きだったら独占欲なんて当然だと思うっ！」

いきなり亜衣の言葉に熱がこもったので、諒が何事かと目を上げた。

亜衣の視線を追って、事情を了解する。どこへ行くつもりなのか、亮介と松田瑞穂がふたりして学校を出ていくところだった。

「あらら……」

罪な奴である。諒は前髪をかきあげながら、亮介の後ろ姿を見送った。

亜衣は地面に視線を落とし、唇を一文字に結んでいる。

「ほんと……困っちゃうよねえ……」

青空を見上げて、諒がもう一度くりかえした。

「強引にお願いしちゃって、すみません」

瑞穂が言った。今にもスキップを始めんばかりの足取りで、すぐ隣を歩いている。

「うん、別にいいんだけど……」

お願いされた、というよりは、いつの間にか決まっていたように思えるのだが、だからって嫌なわけではないし、亮介はあいまいな答え方をした。

学校の近くにも、コンビニやパン屋などはいくらでもある。しかし「部費を使うからには一番安いところに行かなきゃ駄目です！」と瑞穂が断言したので、目的地はここから少し離れたスーパーである。まあ、それにしたって往復十五分くらいだから、あえて異を唱える気にはならない。

（なんか……）

亮介はあることに気づいた。

（……要するに、ペースにはめられているんじゃないだろうか……）

「先輩ってば、なんだかずっと考え事してませんか？」

上目づかいに、瑞穂が尋ねてきた。亮介は我に返って、えーと、などと呟いた。

「うん……そうかもしれない」
「ここのところずっとそうですよねっ。全然、気持ちだけがどこか行っちゃってるみたいで、ちょーっと心配なんですよ。とか言ったりして恥ずかしいかも」
「そ……そんなに見ててわかっちゃう？」
だとしたら不覚である。少々焦りながら亮介は確認した。
「はい。目に見えて、とゆー感じで、ばっちりと」
人差し指を立ててみせて、瑞穂が言いきった。瑞穂としては、愛の力があれば当然、とつけ加えたいところである。
「やばい……」
亮介はしばらく頭を抱えた。瑞穂にわかるということは、つまり諒や冴子にも伝わってしまった可能性が大きいのだ。
「できるだけ普通にしてるつもりだったんだけどなー……」
「先輩の性格でそんな高等テクは使えないと思います！」
「なるほど……」
「あの、これ、褒めてるんですからねっ」
瑞穂は、あっけらかんとそんなフォローをする。
「松田さんって、面白いなあ」

思わず亮介は感心していた。この活力はどこから来るのだろう。

「いつも元気だよね。分けてほしいくらいだよ」

「いつでも分けます！　ドンと来てください！」

握りこぶしを振り上げて、瑞穂が言葉に力をこめた。

「分けるっていっても……」

亮介が圧倒されて口ごもる。

瑞穂は、小さく咳払いをした。

「例えば、ですねえ、なにか困ったことがあったら話してみるとか。案外、ぜんぜん関係のない人間のほうが客観的に判断できるかもしれないじゃないですか。そんなふうに思いません？」

「――……そうかあ……」

一理あるかもしれない。

歩調を緩めながら、亮介は短く沈黙した。

本当は……本当はあまり、彼女と近づきすぎてはいけないのだろうと思う。瑞穂が、こんな自分にどういうわけか少なからず好意を抱いてくれているらしい、ということは、実のところ亮介にも想像できるくらい明白なのである。ただ、深く考えると対応のしようがなくなるから、自分の内でわざと保留にしてある。自分の心を分析すると、結局はそうなのだ。

けれど、だからといって、用心しすぎて普通のつきあいもできないようになったら、それはまた違うはずだ。それは人間として、瑞穂に失礼になるはずだ。

そもそも、瑞穂だって、単に先輩として自分を慕っていてくれるのかもしれないし。後輩としてなら、自分だってとても好きだし。——そう、妹みたいに。

（それなら、いいんじゃないかな……）

そう結論づけて、亮介は顔を上げた。

「じゃあ、さ……たとえ話って感じで、聞いてほしいんだけど……」

真剣な面持ちで、瑞穂がうんうんと頷く。

「Aという人がいて、それは俺がすごく尊敬してる人だとする。Bは俺のすごく大切な友達で、もうひとり、Cっていう女の子も同じくらい大事な友達だとして。Cちゃんはどう見てもBが好きだと思うんだけど、Aさんのことも命がけで尊敬しているみたいで、Bの本音はわからないけどAさんはBの命の恩人で、それで、もしかしたらAさんはCちゃんのことを好きかもしれない、っていう、そんな構図があるのが最近わかって……」

「なんかめちゃくちゃ面倒くさいですね」

「俺、まさかAさんがそんなこと言い出すと思ってなかったから今まで悠長にかまえてたんだけど、実はその三人の関係って、一歩動いただけで崩れそうな気がして、それが怖いんだ。……そういうのって、どう思う？」

「――三角関係だと思います」

スパッと瑞穂がシンプルに答えた。

「いや、でも、あのね……」

亮介としては、駄目押しをくらいたかったわけではないのだ。ますます困り果ててうつむいたところに、瑞穂が怪訝な表情で言葉をつづけた。

「でも先輩、それってつまりはその三人の問題じゃないですか。先輩が問題をややこしくするような立場にいるとか、そういうんでもなくて、先輩の存在があってもなくても三人の関係は変わらないんですよね。違います？」

「あ……うん、多分……」

「例えばその三人が大ゲンカしたりしても、先輩は先輩で、それぞれと仲良くしてても全然悪くないと思います。だって先輩は関係ないんだし」

それは確かに、亮介にとっては盲点だった。ただ……。

「えっと……でも、それはそうなんだろうけど、ただ、俺がこうやって三人の近くにいる以上、なんとか状況が悪くならないよう、できることがないかって……考えたいし。……やっぱり、誰にもつらい思いはしてほしくないし……」

「そんなのは嘘です！」

突然、瑞穂が声をはりあげた。

「そんな関係で、誰もつらい思いをしないなんてのは嘘です！　絶対そんなことムリです！　先輩の考え方は冷たいです!!」

「――――」

今度は完全に、亮介は返す言葉を奪われた。

瑞穂はひどく本気な目を上げて、さらに続けた。

「そういうことで三日間も悩むなんて、あたしわかりません。他人は他人、自分は自分じゃないですか。なんで先輩がそんな三人のこと、自分のことみたいに心配しなきゃならないんですか。そんなの変じゃないですか。ハンパな心配なら、好奇心と同じですっ!!」

「！」

好奇心、という言葉は強烈な痛みをともなった。亮介は反射的に口許を片手で覆い、瑞穂に頭を下げていた。

「ごめん……！」

考えるより先に声が出た。

瑞穂は何も言わなかった。少し驚いたようだった。

「ごめん、俺、ひどいこと言った……」

打ちのめされるより、もっと厳しい。

瑞穂の一言には、そんな効果があった。亮介は顔を上げることができなかった。自分の全部

をたたき壊したいくらいだった。

「ごめん……」

それはきっと、瑞穂へ向けた言葉だけではなくて。

瑞穂が、立ち止まったまま動かない亮介を前にして、やがて気遣わしげに眉をひそめた。

「先輩」

亮介の腕に、手をのばす。

「先輩、あたしも言いすぎました。ね、早く買い物して帰りましょ。みんな待たせたらいろいろうるさいし。あたし、今のこと誰にも言いませんから」

6　『君に話せたらいいのに』

「男の人が泣くのって初めて見た……」
ぽつりと、瑞穂が呟いた。
カップに残ったミルクティーはすっかり冷めてしまっている。
差し向かいに座った久美子が、プレーンドーナツをとりおとしそうになった。
「何それ？　先輩？」
「んー、ヒミツ」
駅前のドーナッショップの片隅に、二人は席を陣取っている。窓の外はもう日が暮れて真っ暗だ。
「ヒミツったって、先輩しかいないじゃん」
「そうだよねえ。……だから！　秘密にしといてって！」
「するけど。何、さっきの買い出し？　やっぱり」

「なんだよねえ……」

頭上のスピーカーからは、陽気な洋楽がやかましく流れてくる。

「帰ってきたとき、なんか変だと思ったもん」

久美子はそんなことを言って、意味もなくスプーンでコーヒーをかきまぜた。

「……あたし、けっこうキツいこと言っちゃったらしくてさ……こりゃ怒るなって思ったら、あやまるんだもん、いきなし。あの人って、実はすごく損な性格してるかもしんない。他人のためにしか泣かないみたいな感じがする……」

「泣いてたの？」

「……と、思うんだよねえ……」

瑞穂は両手で頬杖をつき、しばらく黙りこむ。

「なんか……マジになっちゃうなあ、そういうとこ見ちゃうと……」

「え、でも、瑞穂」

「彼女いるって！　わかってるけど！　だけどあの人かわいそうなんだもん、なんだか知らないけど！　周りの人間よってたかって、あの人のこと悩ませてるみたいなんだもん！」

「そんなことないよ、かわいそうなのは瑞穂のほうだよ、絶対！　マジになったら瑞穂が泣かされるよ、きっと！」

目を見合わせたまま、ふたりは口をつぐんだ。

カッコいい先輩なら、憧れているうちが花。彼女つきなら、恋のプロセスを楽しんだほうが勝ち。そんなこと、暗黙の了解だったけれど。

「でも好きだもん」

瑞穂が先に言葉を発した。

「すっごい好きだもん！　それはしょーがないじゃん、もう！」

「――そんなこと言ったって、あの『彼女』、絶対ただじゃ手、引かないよ」

「それはそうだけど、あたしだって気持ちじゃ負けないよっ！」

どん、とテーブルを叩く。

それきり瑞穂は視線をそらして動かなかった。ひじをついてそれを見ていた久美子が、一分後、小さくため息をついた。

「気持ちばっかりは、どうしようもないもんね……」

「……うん」

低く答えて、瑞穂はかばんを取り、立ち上がった。

「あたし、今日はもう帰るね、久美子」

「布団かぶってよく考えるんだよ」

「うん、そうする。じゃね」

こん、と一度だけ東向きの窓が音をたてた。
亮介はベッドから跳ね起きた。時刻は十一時ちょうどだ。まだそんなに遅い時間ではない——諒が来るには。
窓の鍵はかけないままにしてある。去年からの習慣である。
からからから、と静かな音をたてて、窓が引き開けられた。
「ちょっとだけいい？」
姿は見せず、声だけが窓の下から問いかける。
「うん、全然かまわない」
亮介が答える。実に身軽に、二階の窓から諒が勉強部屋へあがりこんできた。
「お邪魔しまーす……なにおまえ、具合でも悪いの？」
いつものようにスニーカーを脱いでから、諒は少し顔をしかめた。亮介が絵も描かず、ベッドの上になど居座っていたからだ。
「うん、なんか頭痛……いろいろ考えすぎたみたいで」
亮介は力のない笑い方をする。
「妖気じゃなくて？」
「それは違うと思う。なんとなく原因わかってるし……」

「ふうん。……あ、ウーロン茶もらいます」
「おまえ、うちの冷蔵庫のこと私物化してるだろ」
「あら、バレてしまったわ。とほほーん」
勝手に亮介の部屋の冷蔵庫を漁り、諒は缶のプルトップを歯でこじあけた。
「ま、アルコールを持ちこまないだけでも進歩でしょ。亮介くんの健康を考えているのよ、これでも」
「なんかそれって初耳……」
「うん、今、思いついたんだけどね。なんつって」
「このごろとみに性格悪いよ、おまえ」
諒がくすくすと笑う。亮介はわざと乱暴に言って、自分も冷蔵庫から缶ジュースを一本とりだした。
「……俺が、来るって思ってた？」
静かな声で、諒が尋ねた。
亮介はしばらく答えずにいた。ソファ代わりにベッドに腰をおろし、それから諒をふりかえる。
「半々、かな。正直なところ。……座っていいよ、ここ」
いつも所かまわず座りこむくせに、諒は落ち着き場所を決めかねているようだった。また変

に遠慮しているのか。二度目にもなればだいたい対応の仕方もわかってくるもので、亮介は自分の隣を片手で叩いてみせた。

「うん、俺も半々くらいのつもりでした。——失礼」

すとん、と諒がベッドに腰かけた。長すぎて邪魔になるとでもいうのか、行儀の悪い仕草で脚を組む。

「俺……」

「待った」

口を開いた亮介を、手をあげて諒が制した。

「悪いけど、先に言わせてください。俺、亮介に謝らなきゃなんないからさ」

「なんで？」

謝られる理由なんて思いつかない。

「亮介に隠し事してるでしょ」

亮介と目を合わせてから、さらりと諒が言った。亮介は一瞬、答える声を失った。

「隠してることがあるんですよ、これが」

諒は笑顔になって、言葉をつづける。ひどく明るい喋り方で。

「でも、そればっかりはどうしても言えないんだ。亮介にも言えないんだ。黙ってたら亮介がいろいろ考えすぎるだろうって、わかってたけど、やっぱり駄目だった。だから、せめて謝ら

せてもらわねばと思って」
「なっ……」
「ごめんなさい」
目の前で諒が頭を下げるのを、亮介は呆然と見つめていた。
「――な、何も悪くない。悪くないよ、おまえ」
我に返って、身を乗りだす。
「言えないことなんて、誰にでもあるんだからっ……」
本当は、無理にでも聞き出したい。
本当は、言ってもらえれば楽になる。とても。だけど……。
いつもいつもそうやって思いを共有してばかりいられるわけじゃない。別々の人間なんだから。それぞれの世界を生きているんだから。
そんな風に考える自分は、亮介自身にとっても少し意外だった。前に諒が何も話してくれなかった時は、その全部を知りたいと思ったはずなのに。
――きっと、諒に謝られてしまったせいだ。
「謝れば俺の気が済むわけですよ。ずるいよね、そういうのも」
上体を起こし、けれど視線は床に向けたままで諒が言った。
亮介は何を答えていいのか、わからずにいる。

「俺はねえ……」

空白の後に、諒が低く切り出した。

「心配かけたくないんだよ、おまえに」

「……」

亮介は両手の指に力をこめる。

「心配も迷惑も面倒も、何もかけたくないんだよ。おまえが辛かったり苦しんだりするのは見たくないんだよ。俺の力が足りなくて守りきれないときを考えるのはすごく怖い。どうやって守ればいいか、いつも考えてる……」

ごまかしを含まない、それは諒の生の言葉だ。

本来なら彼は、こんなこと、当人を前にして、しかもどんな仮面の助けも借りずに話せるような性格の持ち主ではない。亮介は知っている。知っている、つもりだった。

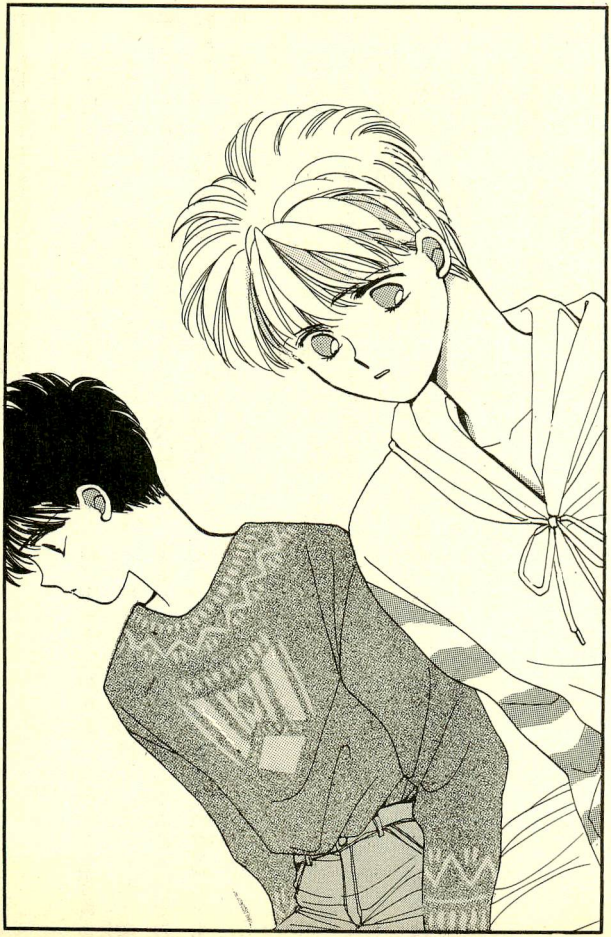
「そのことばかり考えてるんだけど、だけど俺は……それで、かえって困らせることがあるだろ。何回もあるだろ。そのたびに後悔するくせにさ、治らないんだ。どうしても治らないんだ」

思わず亮介は顔を上げた。

「でも、それはおまえが」

優しいから。そう言いかけた亮介をさえぎって、諒は首を横に振った。

「そうじゃないんだ。そうじゃない。俺は、——俺はね、亮介、卑怯者だからさ。……俺はそ



れで駄目にしたからさ——彩も、誠も」

「——」

「うちはね……両親があてにならなかったもんだからね、俺がすっかりあいつらの人生背負ったつもりになって……世の中で誰より好きだったしさ……縛るだけ縛りつけて、そのくせ土壇場で守りきれなくて、俺は結局ひとりで逃げたんだ。事実がそうなんだ。俺のやることはその程度だよ。それは優しさじゃなくて自己満足っていうんだ。——俺には、おまえに弁護してもらう資格なんてない」

諒が黙りこむ。

手の内の缶ジュースを、亮介はゆっくりと床へ置いた。

これは、諒に話せるギリギリの本音のはずだ。

まるで過去を抉るようにして。

なにも、今……もう今になってそんな風に自身を痛めつけることはないではないか。亮介はそう思っていた。昔のことはもういい。もう許されていい。少なくとも自分の前でなら。

わからなかった。そこまでして諒が言いたいのは何なのか。

「おまえを巻きこみたくない」

ぽつりと、諒がそう呟いた。

亮介は諒の横顔を見上げた。肺のあたりが苦しくなるのを感じた。

息ができない。
「いつか決着をつけなきゃならないことが、俺にはあってさ……それがいつかはわからないけど、俺が覚悟を決めなきゃならないのはわかってる。だけどおまえを味方につけたら、俺はまたおまえを守ろうとしすぎて、駄目にする。だから……」
「黙って見てろって……？」
「うん。ごめん」
頷いた諒は、もう穏やかな表情になっていた。
遠まわしの言い方でも、その意味はほとんど完全に伝わる。
――決着をつける、と諒が言う。
その相手はきっと……。
「おまえは……」
亮介が口を開いた。
「おまえは卑怯者なんかじゃない……」
「亮介」
諒がなにか言いかけたが、かまわず亮介は言葉を重ねた。
「おまえは、昔のことで、傷ついてるだけだ」
「……」

「傷ついてるだけだ……」
それだけ言って、亮介はうつむいた。
本当は、もっと別に、言いたいことならくすぶっている。
諒がそうやって、また違う意味で自分を守ろうとしていることを。諒がきっと、そんな矛盾に気づいていないことを。
でも。
それで諒が迷わずにすむのなら。
「……」
長いこと、諒は答えずに、ただ亮介の隣に座っていた。
やがて――、
「むずかしいな、友達って……」
ため息まじりに、諒が言った。
「うん……」
亮介はかすかに頷いた。ぽん、とその肩に大きな手が置かれた。
「泣いてるんじゃないよ、おまえは」
「泣いてなんかないだろ」
「強がるなあ。どぉれ、諒ちゃんが真相を確かめてやろう」

「う、わっ……何するんだよっ！　バカっ！」
勢いよく肩を後ろに引かれてベッドの上にひっくりかえってしまって、亮介は真っ赤になって声をはりあげた。けらけらと諒が笑う。
「でも俺は、本当に、亮介がいてよかったと思ってるってば」
笑顔のままで、諒が念を押した。
ムッ、と不機嫌な表情で諒を睨み上げ、それから亮介は目をそらして言い返した。
「そういうのを、殺し文句っていうんだよ」

「ふうう～ん、亮介ちゃんの部屋でねえ。それで～？」
しらけた眼差で冴子が問いかけた。
「要するにふたりして親交を深めているうちに夜が更けて、帰るのが面倒くさいからってバカが図々しく泊まりこんだわけね？　まあ、また二人だけでわかりあっちゃってるあたりが納得いかないけどそれは置いとくとして、それでその次の朝に亮介ちゃんがこうしてしっかり学校に来てるのに、あのバカの姿がないってどういうことなのかしら」
「えーと……」
目の前の席から攻められて、亮介が口ごもる。

「つまりさ……なんか俺、諒のこと起こすのって苦手みたいで……」
「得意不得意の問題じゃないような気がするけど」
「いや、絶対ある！　……と思う。だって俺、あんなに起こすの気の毒な相手って、他に思いつかないし」
　ここは始業前の二年C組である。
　亮介の前の席は本来冴子のものではないのだが、ほとんど脅迫的に彼女は席替えを強行し、ちゃっかり特等席におさまっていた。亮介の言い分を聞いて、冴子はますます顔をしかめた。
「一声怒鳴ればとび起きるわよ、あいつ」
「へえ、そんなこと知ってるんだ」
「――!!　知ってて何が悪いのよっ！」
「そんなこと言ってないっ！　言ってないでしょっ!?」
　つい考えなしの発言をしてしまって、亮介は必死に抗弁した。
　だしぬけに立ち上がって机を叩いた冴子は、また椅子に座りなおして、咳払いをする。
「仕事仲間だもの。まあ、当然よね」
「ふうーん……」
「で！　話を戻すけど、あいつって本当に寝てるときは神経過敏のはずよ。なにか刺激があれば起きるわよ。でなきゃ成り立たない職種だし。それは亮介ちゃんの甘やかしすぎじゃない

の？」

「え？　そんなことないよ。殴っても蹴っても起きないって言っていい？」

目をまるくして亮介が言い返した。

冴子もそれを聞いて、きょとんとする。

「うそ。何？　それ」

「だから。石みたいに熟睡してて、あんまり気持ちよさそうだから起こすのが可哀相になるんだよ。で、学校どうするんだって訊いたら『一時間目は捨てるからいい』って言うから……目覚ましかけて置いてきたんだってば」

「……やだ、それ、きっと無意識だわ」

冴子は眉をひそめた。

「無意識？」

「あとで訊いてみなさいよ、絶対おぼえてないから。軽井沢でもそんなことあったじゃない、そういえば」

「うわ……それじゃ恨まれちゃうかな、俺、もしかして……」

青くなる亮介の前で、冴子が頬杖をついた。

目を伏せて、なにか考えている。彼女が静かになるとなんだか間がもたなくなって、亮介は居心地の悪さを覚えた。

ただでさえ、正体不鮮明の美少女とつるんでいるということで、クラスの中では浮いているのだ。理屈以前の迫力があるために、他の連中はなかなか冴子に近づけずにいるようだし。神原亜衣だけじゃ足りずにこちらにまで手を出す気か、などといういわれなき陰口まで存在するし。

「亮介ちゃんって、春眠の暁なのよ、つまり」

前触れもなく、冴子が口を開いた。

「え？」

よくわからない。

「むか」

キッ、と鋭い目を向けて、冴子が意味不明のことを口走った。そのまま椅子を鳴らして立ち上がる。

「どこ行くの？」

せめて脈絡だけでも明らかにしてほしい。亮介は慌てて冴子に声をかけた。

「トイレよ」

誰かと同じことを言って、冴子が教室を出ていこうとする。

その時。

「先輩！」

悲鳴に似た声が、二年C組にとびこんできた。
「崎谷先輩！」
とっさに松田瑞穂の姿を想起して亮介はふりかえった。
が、亮介の机まで駆け寄ってきたのは、瑞穂ではなかった。一年生コンビの片割れ——久美子だ。
「どうしたの？」
彼女がひとりで来るなんて、今までになかったことだ。亮介は異変を感じて席を立った。
息をはずませて、久美子が亮介の机に両手をついた。
「先輩、瑞穂が」
「松田さんが？」
いざ亮介を前にしたら言葉が出なくなってしまったようで、久美子はしばらく呼吸を整えていた。冴子が戻ってきて、亮介の隣に並んだ。
「慌てないでいいから、落ち着いて。松田さんがどうしたの？」
もう一度、亮介が問いかけた。久美子は訴えるように顔を上げた。
「あのっ……昨日の夜、瑞穂が誰かに髪を切られて……！」
「！」
亮介と冴子が目を見合わせた。

7 予感

四月の陽光を浴びて、足早に歩道を進んでゆくスーツ姿の青年がいる。

午後の駅前には、人通りが多い。放課後の生徒たちがあちこちに散らばり、制服の色が街を塗りかえんばかりだ。

それら道行く学生や買い物客などが、一様に目を奪われてふりかえる。

飾り気のないシンプルな装いで人込(ひとご)みの中をまっすぐに歩く、ただ一人の青年に、彼らの視線は自動的に集中した。

そこには時差が生じていた。すれ違うまでは、たいていの人間は彼の本質的な違和に気づかない。すぐ隣を行き過ぎた瞬間に、なにか説明のしようがない衝動を感じて、思わず彼の存在を我が目で確かめようと立ち止まるのだ。それは誘惑というより、恐怖に近かった。

原因はひとつ。

あり得べからざる美、である。

整った顔かたちだけなら、こんな反応を招くはずはなかった。
——作り物のようだ。
彼を見る者のほとんどが抱く感想は、そのようなものだった。
太陽の下を歩くには、あまりにも彼は『生身』でなさすぎた。冷気をまとわせるような肌の白さは、そして光を受けると薄青にまで透けてしまう瞳の色は、さらに何よりも周囲の一切に影響されぬ孤高の表情は、彼を異界の住人として白昼の街なかに現出させるには十分すぎる材料だったのだ。
——あれで、本当に生きているのか。
口にこそ出さなかったが、通行人の恐怖はこの一言で代弁された。
「だから、昼間に動きまわるものではないな……」
斎伽忍は吐息とともに、そう呼びかけた。
「それとも、これは私に『抑制』の意識が足りないということか？」
『——両方、だと思われます』
応えてくる思念は牙のものである。
「そんなに戦闘的になっているつもりはないのだが」
『あなたの意識で左右されるレベルを、あなた自身の本質が凌駕しようとしているのかもしれません』

「亮介と同じようなことを言う……」

『……そうです。あなたは確かに、――あの方の言葉を借りるなら、綺麗になりすぎた。それも、この短期間で急激に。もはや多少の努力では、その〈光〉を覆うことは不可能のはず。御自覚なさるべきでしょう』

亮介の名を出されて初めて、牙には合点がいったようだった。その言葉を聞き、忍はしばらく沈黙した。

「自覚？」

口許に、わずかな笑みが浮かぶ。

「誰の自覚だ、牙？　見えるなら言うがいい。自覚する私は誰だ？」

『――忍様』

「いや、牙を困らせるつもりではない。……愚痴だな」

微笑したまま、忍は話を打ち切った。駅から十分ほど歩いたところに喫茶店が一軒。重いガラスのドアを押し開け、忍は店内へ足を踏み入れた。――窓際の席で、彼のことを待っている者がいた。

「好都合だ。その機会を利用しよう」

亮介の後輩が髪を切られた、と聞いての、忍の第一声はそうだった。諒は鋭い目を上げたが、口は開かなかった。

運ばれた紅茶には手もつけずに、忍は諒の目を見つめかえす。

「――と、僕が言うことはわかっていたはずだ。何が不満だ？」

「言い方ってもんがある」

目をそらして諒が言い返した。

「残念ながら、他人に同情する教育など受けなかったものでね」

「その齢になって自分の性格に責任とれなかったら恥ずかしいでしょうが」

「僕の恥のことまで心配してくれているとは初耳だな。嬉しくて泣けてくるよ」

「――あのな」

忍が笑った。ああやだやだ、とぼやきながら諒はテーブルにひじをつく。

この程度の話をするなら、電話でも十分、用は足りるはずだ。

わざわざこんな時間、こんな場所を選んで、忍が自ら出向いてくるには、何か理由がなければおかしかった。しかも相手は諒ひとりである。他に誰も連れて来ないよう『命令』されては、諒としても従うしかない。

「確認するが……」

笑みを内にしまいこんで、忍が切り出した。

「この件、おまえひとりで引き受けて勝算があるか、尋ねたい」

「――――」

諒は眉をひそめた。即答はしなかった。

正面から、忍がこんなことを問いかけてくるのは初めてのことだ。

「〈傀儡〉は燃やせば済むんだろうが」

「さらに、その裏の『髪切り』の始末だ」

「そっちは表に出てくるかどうか、わからんでしょ。今回だけでは」

「出てくるさ。前の〈傀儡〉を十九郎が燃やしたからね」

よどみのない忍の返事。

「……じゃあ、里見さんにお願いしよう。むこうの目くらましになるだろうし、いざとなれば〈傀儡〉のほうも任せられる」

しばし考えたのちに、諒は自分からそう譲歩した。本来なら、仕事のうえで、他人の手を借りることはできるかぎり避けるようにしている。しかし……。

「十九郎ひとりで足りるか？　必要なら、僕が希沙良に交渉してみてもいい」

重ねて忍があっさりと質問し、諒は本格的に異常を感じた。

それは自分の決めることではない。忍の命令ならばこそ共同戦線を張ることもあるわけで、こんな形で自分から助力を請うことなんて、権限と立場を考えたら許されるとも思えない。そ

もそも、そんな戦力のことまで判断しきれない。
「なんで俺に決めさせるわけ？　あんた、自分の仕事、放棄してないか？」
「当事者の意向を尊重しているだけだよ」
嘘ではないだろうか。
諒はテーブルの上に指を組んで、忍の表情を見つめた。いつもどおりのポーカーフェイス。
「必要なら、と言ったな。その『必要』の基準がわからない。どうなんだ？」
そう尋ねたら、ふと忍は目を上げた。ゆらりと。
「こちらに損害を出すな、ということだ。その場の全員を守れとは、僕は言わない。そうしようとするのはおまえの勝手だ。ただし、戦力を減らすことだけは許さない。おまえ自身を含めて、斎伽の血を引く者を傷つけることはならない。それが基準だ」
「……それは、冴子も含むのか」
「無論」
「……」
諒が唇を結んだ。
姿勢を変えずに、低く問い返す。
「自分で守るって言ったのは、そっちのほうじゃなかったのか」
「今は、おまえに訊いている。おまえの判断を知りたいんだ」

嫌な気分が、ざわり、と諒の胸底を撫でていった。

忍が何を言いたいのか、わからない。何を考えているのか見えない。

こんな違和感——忍は自分で気づいていないのか？

忍自身の考えを忍すらも知らずにいると思えるのは、自分の気のせいだろうか。だとしたら。

「忍……もしかして、今」

テーブルに身を乗り出し、しかし諒はそこで口をつぐんだ。

「諒？」

穏やかに忍が呼んだ。

ずいぶん長いこと遠ざかっている、とても懐かしく思える声で。

こちらの不安を見透かしたような、やわらかすぎる、優しすぎる声で。まるで泣きそうな子供をなだめる時の……彼の、声で。

その声を聞いてしまったら、もうそれから先を言えなくなる。

「……やめた」

諒は椅子に深く座りなおし、大きく息をついた。一人で来るべきではなかった。漠然と、そう思っていた……。

家への帰り道、暗い曲がり角で誰かにぶつかられたと思ったら、すでに髪が一房ばかり切り取られていたのだと、瑞穂は言った。

「先輩には、教えないでいいって言ったのに……」

頬をふくらませて、瑞穂が久美子を睨む。

一部分だけ短い髪形はカッコ悪いから、と昨夜のうちに瑞穂は髪を切りそろえていた。ちょうど肩につくくらいの長さになって、今までのようにリボンで結うことはできない。なんだか、それを見るだけでも亮介には痛々しく思えてならなかった。あの結い方は似合っていて、可愛かったのに……。

「教えてくれなかったら、怒ったよ、俺」

低い声で、亮介がそれだけ言う。瑞穂は少ししゅんとなって、膝の上に置いた指をもじもじと動かした。

「亮介ちゃん、怒りのいき場所は彼女じゃないでしょ。問題の『髪切り』のほうでしょ。やつあたりしちゃ可哀相だってば」

横から冴子が口を出す。

「別に、やつあたりなんか」

「はいはいはい」

ぽんぽん、と背中を叩いて冴子になだめられ、亮介は黙りこんだ。

自分が興奮しているのは、確かに亮介自身にもわかっていた。どうしようもなく腹が立つ。よりによって、瑞穂がこんな目に遭うなんて。

「やだな、先輩たちまでヘンな噂のこと信じてるんですか？」

瑞穂は明るい尋ね方をした。

「あんなのただのイタズラでしょ？　切られたのは髪だけだし、あたしオバケなんか信じてないから心配ないですよ」

「駄目だよ、甘く見たら！　そんな簡単な問題じゃないんだから！」

瑞穂の机に両手をついて、亮介は声をはりあげた。瑞穂が目をまるくした。

冴子は廊下で待っている亜衣のことを考えて、複雑なため息をついた。おそらく亮介はそんなこと、今は失念しているのだ。

ここは瑞穂たちの教室である。

忍との連絡には諒が出かけていったから、その間に瑞穂のほうをフォローするのが冴子の役目だった。放課後、いつもどおり部活に出ようとしていた瑞穂をひきとめて、詳しい話を聞きつつ諒の帰りを待っているところなのだ。

別に場所は美術室でもどこでも良かったのだが、余計な他人を介在させたくなかった。おまけに亮介がこんなに深刻に心配するようでは、また周囲に変な誤解を生みかねない。

実際……朝からずっと、亮介はこの調子だった。教室移動などでお互いの都合があわなかっ

たために、放課後になるまで瑞穂とはろくに話せずにいたのだが、その反動がここに至って一度にやってきたらしい。どうやら瑞穂が短くなった髪を見せたがらずに、亮介と会うのを避けていたふしがあるので、ますます亮介としては怒りがつのるのだ。そんな場合じゃないだろ、と叱りつけたいのを半日間も我慢していれば、いいかげんストレスも頂点に達する。

「甘く見ちゃいけないのは、本当よ。でもそんな、大騒ぎするほどでもないわね」

困ってしまった一年生コンビに、冴子は助け舟を出してやった。

「二、三日もすれば心配なくなるから、その間だけ用心を怠らなきゃいいのよ。でしょ？　亮介ちゃん」

「並の用心じゃ通用しない相手だよ。万一のことを考えないと」

抑えたトーンで、亮介が言い返す。

「忍様に任せれば大丈夫だってば。亮介ちゃん、ちょっと神経過敏になってるのよ」

「……」

保証があるわけじゃないよ、と答えかけて、さすがに亮介は思いとどまった。なんといっても、相手は冴子だ。

自分が忍のことすら信頼しきれなくなっているのも、あらためて考えると凄い現象だった。

――要するに、放っておけないのだ。他人に任せきれない。

「じゃあ……俺、これから三日間は、できるだけ松田さんと一緒にいることにするから」

有無を言わせぬ語調で、亮介が言いきった。
「えっ……でも」
瑞穂のほうがたじろいだ。まさかそれほど積極的な態度に亮介が出てくるなんて、予想もしていなかったのである。
「クラブの帰りも、家まで送るから。――迷惑？」
「めっ、め、迷惑なんてないです！　どこにもないです！」
ようやく状況を理解して、あたふたと身を乗り出す。こんな特大ラッキー、迷惑であるはずがない。
「なにも亮介ちゃん、そんな……」
冴子が何か言いかけたが、途中で声を切った。亮介のような人間が一度怒りに燃えると、手のつけようがなくなる。普段とギャップがある分、強力すぎるのだ。
「悪いけど、これだけは俺の自由にさせてもらうから」
亮介はきっぱりと駄目押しまでしてくれて、冴子はあえてそれに対するコメントを避けることにした。

＊　＊　＊

女は、階段に腰をおろしていた。

地下鉄の、広い駅の一角である。夜も更けたはずだ。さっきから、残業疲れのサラリーマンたちが黙々と階段を下ってゆく。

派手な化粧の、不良娘だと彼らには思われているだろう。駅の片隅に座りこんでいたって、多少鬱陶しげな目を向けられるくらいで、声をかけられたり不審がられたりはしない。行き場のない野良猫と同じだ。

と――。

「弥峨」

待っていた声が、頭上から降ってきた。

するりと女は立ち上がろうとしたが、

「かまうな、面倒くさい。ここでいい」

言うより先に彼は隣に腰かけてしまい、無造作に脚をなげだした。仕方なく、弥峨、と呼ばれた女も元の位置に座りなおす。

「やれやれ……まったく、人間が多すぎるぞ、ここは！　なにを考えてこんなに一ヵ所に溜まりたがるのだろうな、人間ってやつは。手当たり次第に喰いちらかしてやりたいところだが、そうもいかんからな、ますます腹が立つ。ついてないよ、私は。まったくついてない」

ぶつぶつと愚痴をこぼすのは、ハイティーンに見える若者である。

ジーンズにトレーナーというラフな格好で、まるでロックコンサートに行った帰りの高校生だ。きかん気な眼をして、短気そうで、それでいて曇りや影を含まない面立ちを有する。甘やかされて育った者に特有の顔だ。

「喰っておしまいになればよろしい……」

ふうっと唇の端に笑みを乗せて、弥峨が言い返した。

「私はおまえとは違うのだ」

やや拗ねたように、若者がそっぽを向く。

「まあ、若が？　どのように？」

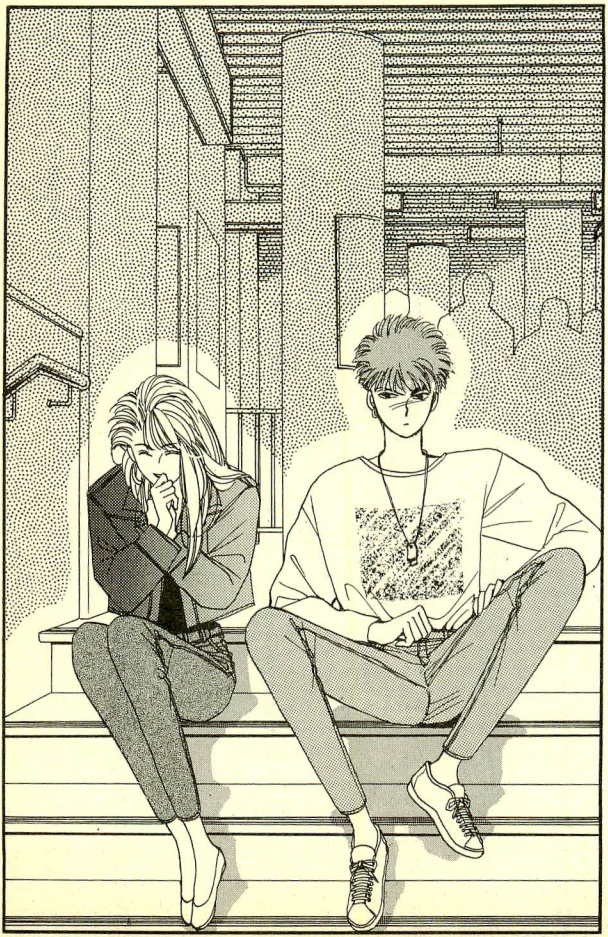
「言っても笑わぬだろうな」

「命とあれば」

しかし女は、今にもクスクスと笑いだしそうである。

それを睨みつけて、若者は口を開いた。

「いやな女だな。私はな——私は、真面目なのだ」



「ク、ククク……」
「笑うなと命じたろうに！」
「若が、若がお可愛らしいのがいけないのですよ」
ひとしきり弥峨は顔を伏せて笑いつづけた。あからさまに不機嫌な表情で、若者はムッと黙りこんだ。
「お気を悪くなさらず……」
「もう十分悪いわ！」
「この弥峨が悪うございました。ほら、こうして謝っているではありませんか。こちらを向いてくださいな、若。ね？」
「私は、媚を売る女は好かん」
「弥峨は悲しゅうございます」
「泣き落としも好かん！　ああ、おまえは本当に厄介な女だな！　そうか、わかった、そもそも私は女が嫌いなんだ。きっとそうだ」
身をすり寄せようとする女から三十センチばかり体を離して、若者は断定した。つん、と弥峨があごをそらして彼に目をやった。
「なにをおっしゃいます。若は、九那妃様のことが大好きではありませんか。それとも若はもしや、あの九那妃様をお嫌いになられたのですか？」

「九那妃様は九那妃様だ！　つくづくおまえはいやなことを言うな！　あのお方を『女』などと一緒にしてたまるものか。いいか、あのお方はな、『女神』であられる。『天人』だぞ。おまえなどとは比べものにならん」

ムキになって若者が熱弁をふるう。

冷ややかにそれを聞いていた弥峨は、やがて肩をすくめた。

「本当に、若は真面目なお方でしたわ」

「あたりまえだ」

弥峨の言葉の複雑な響きには気もとめず、彼は頷いた。

「まったく！　どうしておまえのような側近しか私のまわりには戻らないのだろうな！　人材不足も甚だしい！　おかげで私の足まで棒ではないか。どうして真っ先に、九那妃様にお目にかかれないんだ。こんなに、こんなに私は真面目にお捜ししているのにだ。どういうことだ、これは」

「すべては伽羅王のせいですわ、若」

鋭い空気が弥峨の周囲を包んだ。それは憎悪。

「若が今おひとりで苦労なさっておられるのも、九那妃様の居所が知れぬのも、すべてはあの伽羅王のせいですわ！」

はたから見ると、それは芝居のような光景だったろう。

駅の階段で、若い女が、それよりも若く見える少年に対し、厳しい語調でつめよっている。どこか古めかしい言葉づかいで。

しかし両者が真剣きわまりないからこそ、そこには子供同士のままごとに似た滑稽さが存在した。そして物哀しい微苦笑を誘っただろう。——もしも、彼らの姿を見る者があったなら、である。

現実には、二人のやりとりを目撃した者はいなかった。若者がここへ現れたときから、その空間は完全に常人の目から遮断されていたのである。

「伽羅王か！　その名を聞くと気分が悪くなる」

吐き出すように若者が答えた。

「大嫌いだ、あいつは。畜生！　弥峨！　私はあいつが大嫌いだぞ！」

「お怒りは当然……。若は、九那妃様が大好きでいらっしゃるから」

言わずもがなのことをわざわざ言って、女は若者の肩に白い指をかけた。

「若……わたくし、術者を一匹、見つけました」

「術者？　雑魚か」

「いえ。その者、この弥峨の傀儡を台無しにしてくれたのですわ。よりにもよって、火など使われて……可哀相な子。あんまり酷うございます。わたくし、二度とあの術者、許さぬつもりですわ」

「また、傀儡か？　弥峨はまだそんな遊びにかかずらっていたのか」
「女は人形遊びが好きなものですゆえ……」
「私には面倒を持ちこむなよ。私は忙しい」
「若。わたくしの言いたいことをわかってくださいまし」
そっけない対応に腹を立てたように、弥峨はさらに膝を移動させて彼に近づいた。
「伽羅王とて今は孤立無援。些少な術者たりとも惜しいはず。弥峨の傀儡で、あの術者、また誘い出してくれましょう。さすればいずれ、糸は伽羅王まで続くやもしれませぬ。我らだけで、伽羅王と正面より当たることになれば利はありますまい。が、外堀を埋めるなら話は別。――いかがです？」
口をつぐんだまま、若者が彼女をふりむいた。
「……伽羅王の駒を潰すのだな？」
「いかにも」
挑戦的な目で、女が見上げる。
「ふん……その様子では弥峨、とうに手は打ってあるのだろう。私が乗らぬはずはないと思って……」
「弥峨は若の望むことなら、誰よりも承知しております。それだけですわ」
「だから、いやな女なんだ」

彼は両眼を細めた。

かすめるようにその唇を奪って、弥峨は彼の耳元で囁いた。

「かまいませんわ。弥峨は、若のもとに戻れて幸福でございます」

「私は嫌いだぞ」

「わかっております」

「嫌いだからな」

念を押しながら、彼は女の肩に腕をのばして、もう一度、ごく短く触れるだけの口接けをした。

8　光闇交錯（ひかりやみこうさく）

「もしもし……俺です。今、現場についたところです」
公衆電話の受話器に向けて、そう十九郎（じゅうくろう）は切り出した。
『そうか。すまないな、わざわざ』
平常どおり、落ち着きに満ちた声が返ってきた。一瞬だけ、それを聞いて十九郎はひそかに安堵（あんど）する。
『希沙良（きさら）は何か言っていたかい』
「いえ……教えずに来てしまったので。話せば必ず騒ぎますから、あいつは」
『ああ、そうなのか……。彼が無理に来たがるようなら、それでもいいと僕は思っていたんだけれどね』
斎伽忍（さいがしのぶ）は、彼に似合わぬアバウトなことを言う。
「――連れて、きたほうが良かったということですか？」

ここしばらくの違和感が、また回復した。十九郎は慎重に問い返した。

『いや、十九郎がそれでいいと判断したのなら、かまわない』

何だ、これは？

斎伽忍は迷っているのだろうか。——まさか。そんなことはあり得なかった。

声だけをとれば、そこには何の変調もない。しかし、この、人を惑わすような彼の話し方は謎としか言いようがなかった。その真意はどこにあるのだろう。

三日前、希沙良は不要である、と彼は自分に命じたはずだった。

「忍——いえ……」

言いながら、十九郎は眉をひそめた。思ったよりも、自分自身、動揺していることがわかってしまったからである。

「斎伽さん、今……おひとりですか？」

『それがどうした？　確かに、ここには誰もいないが』

「そう……ですか、すみません。別にいいんです」

何故そんなことを訊いたりしたのか、後になっても十九郎にはわからなかった。

ただ少しだけ引っかかるものがあったが、追及することは諦めた。それは杞憂でなければならなかった。

噂によれば、〈髪傀儡〉が現れるのは、当人が髪を切られてから三日後ということになる。どこまで信じられるか疑問だったのだが、とりあえず一日目、二日目は何も起こらずに過ぎた。三日目の今日は、日曜日である。敵が動くのは夜になってからだと知りつつ、やはり安心しきれなくて、亮介は朝からずっと瑞穂と一緒に時間をつぶしていた。

ファミリーレストランの中、亮介たちから離れた場所に、諒も冴子と一緒にテーブルを陣取っている。

「亮介だけは怒らせるもんじゃないと――学習した諒ちゃんであった。まる」

天井を仰いで諒が呟いた。

「知ってたでしょ、そんなこと」

「知ってたけど。改めて再確認したんですってば」

「キレるとそっくりよね、あんたたちって本当……」

冴子は小さく舌を出す。

「A型だからであろうか。まる」

「いいかげん新しいネタ開発しなさいよ、あんたは……」

それにしても、今回の亮介の怒り方は根が深かった。

さらに言えば、今回の亜衣の反発も尋常なレベルではなかった。

亮介が度を越して瑞穂のことを心配しているのが、そもそも悪いといえば悪かったのだろうが、そんな亮介を前にして、

「髪なんて、本当に切られたのかどうかわからないじゃない。わざと自分で切りかねないわよ、あの子なら！」

とまで言ってしまった亜衣のほうも、冷静さを欠いていなかったとは思えない。

「言っていいことと悪いことがある」

一言、そう答えて以来、亮介は貝のように口を閉ざし、もはや下手に触れると大爆発は必至であろうダイナマイトと化していた。

それきり三日間、そこには冷戦状態が継続されている。諒も冴子も、なんとかせねばと思いつつ仲裁役を押しつけあって、何もせぬまま現在に至るのである。

窓のむこうに十九郎の姿を見つけて、亮介が席を立ち上がった。

他人のフリが必要なので、そそくさと諒と冴子がテーブルにかじりつく。こちらには目も向けずに、テーブルのすぐ横を通って亮介は店の外へ出て行った。

「誰かあたしの亮介ちゃんを返してっ。返してよっ」

テーブルに貼りついたまま、冴子が嘆いた。

「だから、ほら……」

ため息まじりに、諒が答える。

「あの人も今、大人への階段を上っているところなんでしょうが」

大通りに面したファミリーレストランの駐車場で、十九郎は待っていた。

「すみません、忙しいのに」

駆け寄って、亮介は頭を下げた。受験生の貴重な時間を拘束すると、さすがに良心が痛む。

「いや、いいんだ、それより……」

十九郎は視線を周囲に流しながら、口を開いた。

「ついさっき、斎伽さんと連絡をとってみた。崎谷君は……あの人のことで、何も感じたりはしないかな」

「え？」

「ごめん、漠然としたことを訊いて……。でも他にどう言えばいいかわからないんだ……」

何か感じないか、と言われても、どういう意味なのか亮介にはつかめない。

そのことは十九郎も察して、もどかしさを押し殺すように謝ってくれるのだが、そうされるとかえってこちらの鈍さが申し訳なくなってくるのだ。亮介は息をついて、首を横に振った。

「すみません、俺は……忍さんとは一週間前に会ったきりで、後は話していないから」

「ああ、そうか……悪かったね、無理なことを言って」

「あの、諒に訊いてみますか？　今回のことは諒が全部、忍さんと話して決めたって言ってたから、あいつだったら」

「でも、俺がここで水沢と接触するわけにはいかないだろう。――別にいいよ、俺の気のせいだ」

十九郎は微笑して、その話題を終わらせた。本当にいいのだろうか、と亮介は思っていたが、口には出さなかった。

太陽は西に沈みかけている。

配役は、次のとおりである。髪を切られた瑞穂の『友人』が亮介、そして亮介が頼みにする『術者』が十九郎。

この構図を見たら敵方は余計な『術者』の足をまず止めて、そののちに〈傀儡〉を瑞穂のところへ向かわせるだろう。しかし店内にはもうひとり、発火能力をもつ術者がいるのだ。――それが、諒の立てた作戦だった。

「例の〈使〉はどこにいるのかな」

ふと思いついたように、十九郎が尋ねた。

「牙ですか？」

亮介は顔を上げて、ぎっしり埋まった駐車場を見渡した。

見知った姿はどこにもなかったけれど……。

「なんか、案外すぐ近くにいるかもしれません」
そんな気がするのだ。気配、というより、無言のメッセージが伝わるような。
安心感、がある。
「そうか……それならいい、かな」
十九郎はそうひとりごちて、歩を踏み出した。
「じゃあ、俺は裏にいるから」
「……大変ですね」
彼は外でずっと待つだけなのだ。いちばん損な役回りというところか。あんまり何度も謝るわけにもいかず、亮介は複雑な言い方をした。
「英単語のいくつかは憶えられるさ」
気さくな笑顔になって、十九郎は軽く片手を振ってみせた。

＊　＊　＊

斎伽忍は、彼の部屋のソファに身を預けている。いつものように。
遠く離れた亮介たちの動向は、牙を中継に使うことで、居ながらにして把握することができた。さらに目を閉じれば、彼の内側に眠る何かが、時には映像で、時には声で、本当に必要な

情報ならば断片的に伝えてくる。……あくまでそれは断片でしかないのだが。

『……――？　……忍、様？』

ふうっと水面に浮き上がるように、牙の声が彼の意識へ届いたのはその時だった。身体は動かさぬまま、忍はその双眸をひらいた。

『忍様？』

「どうした？」

肉声で答える。

『……ずっと、お呼びしていたのですが』

「そうなのか？　……気づかなかった」

牙が一瞬、言葉を失った。

「……また、その波動だな。不安の空気だ」

無表情に、忍は呟いた。

「おまえもだよ、牙。諒も十九郎も、よほどおまえたちは私のことが気に食わないとみえるが……そんな波動を向けられても、私には全く心当たりがないのでね……実際、迷惑だ」

『本当に……あなたには見えないのですか？　まさか……』

「残念ながら、そのまさかだ。そう答えれば満足なのか？　おまえにまでそのような言われ方をされるのは心外だ。私に何を求めているのか知らないが、おまえも結局は奴らと変わらない

ということか。私の重荷にはなるまいと信じたが、それは私の思い違いか。ひどい誤解もあったものだ。牙、私は失望させられたくないのだがな」

『違う！　……伽羅王、あなたは疲れている。そうだ、あなたは今――』

「黙れ。私を惑わせるな」

冷酷に言い放ち、忍は再び目を閉じた。牙が沈黙した。

他に誰もいない部屋の中で、彼は長いこと姿勢も変えずに時間を通過させた。彫刻のように、その細いシルエットは揺るがぬままだった。

――やがて。

熱のない彼の指が、かすかに動いた。

己の右腕を、左手の指がつかむ。ふっ、と忍は顔を上げた。

ブラインドをおろしていない窓が、夜景を見事に映し出している。

忍はその窓外を見遣り、続いて自分の指に目を落とした。

自分が牙に何を言ったのか、すぐには思い出すことができなかった。

「……何？」

かすれた声で、彼は独白した。

そして、ゆっくりと忍は視線を移動させた。卓上の電話へ、それはたどりつき、そこから離れようとしなかった。

数秒後――。

電話のベルが、鳴りはじめた。

＊　　＊　　＊

瑞穂には、詳しい手順のことなどは話していない。

説明しても、信じるようなタイプではないのだ。『術力』のことなんて。それなら、実際に目で見るまでは黙っていたほうがいいだろう。

すると瑞穂にとっては、あくまで亮介が彼女の身を案じたあげくに三日間つきそった、という事実だけが残る。それも、亜衣との仲を険悪にしてまで、などというおまけつきだ。これが決して望ましいとは呼べぬ状況であることは、亮介にもわかっていた。

わかってはいるのだが……。

「先輩、今日は何時くらいまで一緒にいてくれるんですか？」

幸せそのものの表情で、瑞穂がテーブルに身を乗り出した。

昨日と一昨日は、夜が更けないうちに彼女を自宅へ送って、あとは諒が一晩中、家のまわりに張りこむという手段をとった。はじめから、〈傀儡〉が出てくるのは三日目の今日であるとヤマを掛けてあったし、十九郎を三夜連続で頼るのには、さすがに無理がある。

今夜一晩が、勝負の分かれ目だった。
「うん……今日は、もしかすると、朝までつきあってもらうかも」
だから、二十四時間営業の店を選んだのである。
「朝っ!?　……ですか?」
瑞穂がぽかんと口をあけて、それから少しばかり赤面した。
「いや、眠かったらここで寝ちゃってもかまわないけど。あ、外泊すると後で困ったりする?　もしかして。家に連絡しようか?」
亮介は生真面目に心配する。
淡い期待は泡と消え、瑞穂は内心でがっくりと肩を落とした。いえ大丈夫です、などとひきつった笑顔で答える。この相手に、そっち方向の展開を夢見た自分が馬鹿だったのである。
二人の席は、大きな窓のすぐそばだ。外からは丸見えだし、こちらからも駐車場と大通りがはっきり見渡せる。
亮介は真っ暗になった空に目を上げ、ふと耳をすますような顔つきになった。
牙の気配が、さっきよりも遠くなったことを感じていた……。
行楽帰りの親子連れなどの姿が減り、伝票に深夜料金が加算される時間になった。

店内は昼のように明るく、客の入りはなかなか盛況だ。

と。

十数回もコーヒーのおかわりをくりかえして店員に睨まれていた諒が、ごく自然な仕草で、コーヒーカップをテーブルの奥まで寄せた。

それを見て、冴子も読んでいた雑誌を閉じる。目を合わせたが、会話はなかった。……呼吸で通じる。

その頃、十九郎も異変に反応していた。駐車場の一角。

建物の陰になって、ますます深さを増した闇の内に、彼はいる。

「用があるのは、俺だろう。違うのか？」

鋭い声を投げて、十九郎は夜の一点に視線を据えた。

「――出てこい!!」

次の瞬間、店内の照明がいっせいに消え、闇に包まれた空間に客たちの悲鳴が響きわたった。

「え、ええっ――!?」

瑞穂が絶叫した。そこは真の暗闇だった。

窓から外の光が入ってくるはずなのに、ガラスは真っ黒な板と化したように立ちはだかるのみである。客も店員も恐慌状態に陥っていた。物が倒れる音や食器の割れる音があちこちからあがり、パニックにますます輪をかけた。

「動かないで！」

亮介が瑞穂の手首をつかまえる。そのまま拳を打ちつけて目の前のガラスを割ろうとしたが、びくともしなかった。結界で閉じられているのだ。

「やだやだやだーっ!!」

瑞穂は泣き声をあげていた。手探りでその肩を引き寄せて、亮介はわざと厳しく叱りつけた。

「泣いてちゃ駄目だよ！　ちゃんと俺がここにいるから！」

「だって、だって先輩なんなのこれー!?　なんなの!?　もうやだ、もうあたしやだーっ!!」

ぼうっと、発光する何かが視界にまぎれこんできて、亮介はふりむいた。

瑞穂だ。

真っ先に、そう思った。

違う。それは瑞穂と同じ姿かたちをしていたが、全身をぼやけた光で包んでいた。本物の瑞穂なら、今、亮介の腕の中にいる。

（光？）

それを光と感じるのは、自分だけであることに亮介は気づいた。現に、その〈髪傀儡〉は瑞穂には見えていないのだ。

（妖気か！）

強力すぎる感覚が、傀儡のまとう妖気を光として感知したらしい。亮介は傀儡から瑞穂を遠ざけながら、声をはりあげた。

「諒！　来た、入り口だ！」

「承知」

ふっ、と微弱ながら店内の景色が復活した。

諒が、店のマッチに火を点けたからだ。灰皿の中の紙ナプキンに、その炎は移る。

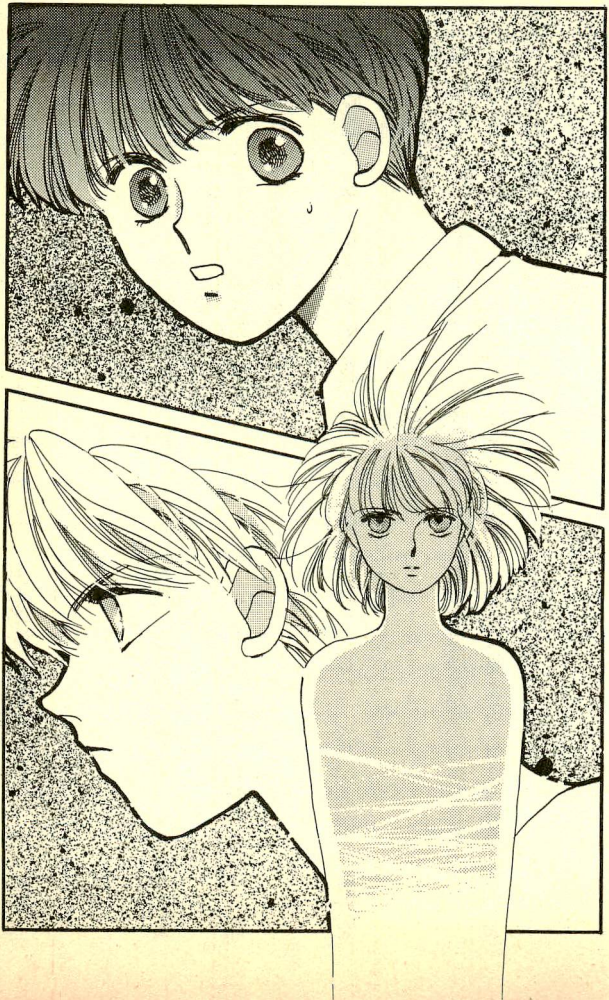
入り口のほうから歩み寄ってくる少女が、実は窓際にいる少女と同じ顔をしていることに気づいた客が、そのとき何人いたであろう。事実、そんな余裕は誰にもなかった。

「こっち！」

冴子が、亮介の腕から瑞穂を引き受けて、さらに店の奥まで連れこんだ。瑞穂は口もきけない状態である。騒がれない分、かえって都合はいい。

「ようこそ、お嬢さん」

無表情に近づいてくる少女の正面に立ち、諒はそんなことを言ってから、勢いよく右腕で風を切った。



光の剣がその手の内に生じて、ひときわ強く輝いた。剣の名を〈朱雀〉という。常人の目には映ることがない白の光——。

十九郎の足が、地面を蹴った。かわす。斬りかかった光剣はその身に届かず、ふりむきざまに〈気〉をぶつけられて女は後ずさった。

光剣を使いはするが、防御は脆い妖者だ。中堅、というところか。素早く判断して、十九郎はたてつづけに小規模の結界を設定した。

「おのれっ……！」

弥峨は呪詛の言葉を吐き、光剣で我が身の周りを振り払おうとした。火花があがる。彼女を中心に、二重、三重の結界が張られたのだ。このままだと閉じこめられる。

「ええい、厄介な！」

一声あげて、妖力を集中する。いやな音をたてて十九郎の結界は内側から破裂した。

十九郎は顔色も変えない。小手調べの段階で、おおかた勝負は見えた。気は抜けないが、おそらく十九郎の敵ではない。

この妖者——なぜ出てきた？

「傀儡のほうが、手強かったように思うが……」

相手の懐をさぐるため、十九郎はあえて女の怒りを誘発してみる。
「若造が……そのような口、百年は早いわ」
不利にあることは知りながら、女は嘲るように笑った。
「我が傀儡の仇は、我が手で討たねば気が済まぬ。それだけのことよ。この弥峨の力、侮るは許さん」
「……違うな。もとより、俺を倒す気はないんだろう。ここで俺の足を止めて、傀儡から遠ざけようとしているだけだ」
それは当初からわかっていたことだ。しかし十九郎は、その大前提を疑問に思いはじめていた。
理由はない。勘、でしかない。
ただ、事態は思ったよりも単純でないような気がするのだ。
果たして、十九郎の言葉を聞いた女の反応は、ひどくそっけないものだった。
「若造の浅知恵か。つまらぬ」
「負け惜しみか？」
「挑発には乗らん。――小賢しい！」
女が光剣をふりかぶった。
がしゃん、と近くでガラスが割れた。店の窓ガラスだ。十九郎は女の攻撃を避けながら、そ

の音の方角へ戦域を移動させた。

朱雀剣からプラズマが発され、唸りがあがったと思ったら、窓のガラスはこなごなになって吹っとんでいた。

正確には、狙いは窓ではなく傀儡のほうだった。しかし瑞穂と同じ顔のそれは、傷ひとつないまま諒の前に立っていた。攻撃は完全に彼女の背後へすりぬけたのである。

「なるほど……」

諒が呟いた。これでは、どんな術者でも手を焼くはずだ。

窓が破れたおかげで、結界は効力を失った。照明は回復しないが、外の景色は見えるようになる。客のパニックも少しは鎮静化した。

「窓ぶちこわせ、亮介」

店内で火事は起こしたくない。

わずかにためらったが、反問はせずに亮介が手近な椅子をガラスに叩きつけた。派手な音とともに大きな穴があいた。

出入り口への途中には、傀儡が控えている。瑞穂を外に逃がすには、これが一番てっとりばやかった。

「冴子！」
「はいはいっ」
諒の一声だけで、瑞穂を抱えこんだ冴子がその窓から店を脱出した。
「逃がさないよっ！」
初めて、傀儡が声をはりあげた。二人を追って、走り出そうとする。
「亮介、外出てろ！」
ふりむきもせず、諒が叫ぶ。そのまま朱雀の剣先を傀儡に向けて、プラズマの塊を一気に放射した。ばきばきばき、と雷鳴に似た音が彼女の全身を包んだ。
「う、う、う」
数秒間だけ動きを止められて、傀儡が呻いた。
「う、……うるさいっ！」
金切り声とともに、すべてのプラズマを諒に叩きかえす。間一髪でそれをかわし、諒は跳躍してすぐ近くの窓に体当たりした。無理やりガラスを割って、外へとびだす。
「邪魔っ!!」
憎悪をこめて唸りながら、傀儡が同様にガラスを割り、後を追ってきた。
外へ誘い出してしまえば、こちらのものである。
諒は素早く視線を走らせた。駐車場の出口は裏通りへつづいている。人の気配はない。——

狙うなら、あの辺りだろう。

「崎谷君！」

至近距離から、十九郎が亮介を呼んでいた。

亮介が、十九郎に続いて駆け出してゆく。どうやら『髪切り』は逃げたらしい。そちらを追うのは彼らに任せて、諒は朱雀剣を両手でかまえなおした。

「冴子、そっちだ！」

諒の指示で、冴子が裏通りへ足を向ける。怯えきった瑞穂は、冴子にひきずられるまま走っていた。それを確認して、諒も動きだす。

傀儡は一直線に瑞穂を目指していた。他の一切が眼中にないようだ。瑞穂を追ってもらわないと困るが、近づかれすぎるわけにもいかない。何度か牽制しながら、諒は傀儡との距離を縮めた。

諒の足が、駐車場の外へ出た。そこで立ち止まる。

猛スピードで傀儡が迫った。

待ちかまえて、諒は膝を低く落とした。朱雀を体の前にかざして。

「頼むぜ、朱雀！」

思いきり光剣を地面へ激突させた。剣の型は失せ、そこには強烈な光だけが残る。

「覚悟っ！　――遠慮なしだ、悪いけどっ!!」

一瞬、諒の手元から完全に、朱雀の姿は消えたように見えた。コンマ数秒の時差をおいて、まるで地下の導火線をたどったように、傀儡の足元から爆発が起こった。轟音が響いた。

「い、や――――っ!!」

傀儡が断末魔の悲鳴をあげた。全身が白い炎に巻かれた。

ギリギリだった。諒の目前、三歩も離れていない。体勢を立て直して、諒がさらに数歩、彼女から遠ざかった。

なにか叫んだかもしれなかった。火勢が強すぎて、聞こえなかった。聞きたいとも思わなかった。燃えつづける女から顔をそむけて、諒は残酷な処刑が終わるまで、ただじっと待っていた。

冴子も無言だった。あっという間に炎は燃え尽きたのだが、それはひどく長い時間として彼らの前に横たわった。

傀儡が店の外へ出た瞬間に、弥峨はあっさり戦闘を中断して、ためらいもせず逃げだした。さすがにそのタイミングで女が手を引くとまでは読みきれなかったために、十九郎の対処はわずかに遅れた。

むざと逃がすわけにはいかない。相手は『髪切り』である。この好機に始末をつけておかね

ば、また別の被害者が出る。

「崎谷君！　追えるか!?」

亮介の感覚なら、女の気配をそのまま追跡できるはずだった。とっさに十九郎はその手段を選択していた。亮介が頷いて、走りだす。

（罠……でなければいいが）

女の逃げ方には、そんな懸念を抱かせる空気も皆無だったとは言えない。可能性だけなら。しかし罠を恐れて慎重になりすぎては、それこそ愚の骨頂だ。

……あの程度の妖者なら、必ず倒せる。それがわかっているのに。

裏通りから表通りへ出て、いくつかの角を曲がった。すぐ近くにいる。十九郎にも見える範囲で、女の妖気は間近にあった。見失うことはあり得なかった。

「!?」

突然、亮介が足を止めた。

十九郎も、厳しい目をあげて立ち止まる。

「……消えた？」

亮介が呟いた。

遠ざかって捕捉できなくなったのでも、他の気配にまぎれたのでもない。

結界の中に逃れたのか。——しかし、あの女に、そこまで完全な結界を作る力があるとは思

えなかった。よほど巧く張らなければ、結界は必ず空間のどこかに歪みを残す。そんなズレさえもないのだ。

しばし亮介は息を整えながら、周囲に感覚のアンテナを向けて、探れるだけ探ってみた。

それでも……。

「駄目だな、戻ろう」

十九郎がそう言って、亮介の肩に手を置いた。

「でも、すぐ近くにいるのに……」

「なんだか気になるんだ。これ以上、俺たちだけで先走るのはよくない。もしかすると……この件、『髪切り』の背後にもうひとつ、有力な存在があってもおかしくない」

もう少し粘ろうとした亮介に、十九郎は冷静に説明した。亮介が目を瞠る。

「そんな……それじゃ」

「やりなおしだ。……読み違えたかもしれないよ」

うつむいて十九郎が、それだけ答えた。誰が、とは言わなかった。

9　炎獄の……

「今日はこのまま帰って寝んだほうがいいよ。詳しいことは、また落ち着いたら必ず話すから」

亮介が、そう瑞穂に言い聞かせた。呆然自失の一歩手前で、瑞穂は言われるままにこくんと頷いた。

ファミリーレストランの前にはパトカーやら野次馬やらが集まっていて、とても近づけたものではない。店の騒ぎからできるだけ離れた裏道に、亮介たちは身を潜めるようにして立っている。

「ひとりで帰すのは、まだいろいろと心配だな。時間も時間だからね。どうせなら、崎谷君も一緒に帰ればいい。――少し、顔色も悪いようだし」

十九郎が口を開く。

最後の一言は、亮介に向けられたものだった。亮介自身は気づいていないのだ。妖気にあて

られて、その顔からは血の気が引いてしまっている。いずれ体調にも影響が出るはずだ。
「そーしなさいそーしなさい」
ほれほれ、と諒が亮介の背中を叩いた。
仕方がない。事態の見極めにまで立ち会えないのは心残りだったが、亮介は素直に従うことにした。
瑞穂の家までは、ここから歩いて十五分くらいだ。
歩いてもよかったが、瑞穂のショックは大きいようだし、これ以上疲れさせても気の毒に思える。タクシーをつかまえようと、亮介は表通りへ足を向けた。瑞穂が無言でついてくる。
「？　……」
瑞穂の足音に引っかかるものを感じて、亮介はふりむいた。
「あっ――足、くじいちゃったの!?」
「え？」
瑞穂が顔を上げた。きょとんとしている。
彼女を立ち止まらせて、亮介はかがみこんだ。左の足首が微妙に腫れているのがわかった。
「痛くない？　ここ」
「え？　え？　わかんないです」
「うそ、腫れてるよ、この左側、ほら」

「左？　――痛ぁいっ！」

うわの空で聞いていた瑞穂は、もろに左足に体重をかけて、悲鳴とともに座りこんでしまった。

「だから言ってるのに……大丈夫？」

亮介が手をさしのべる。

「冴子ちゃんに治してもらえばよかったな……。戻ろうか？」

その分歩かせるのも考えものだ。迷いながら問いかけて、それから亮介は眉をひそめた。

しゃがんだ姿勢のまま、瑞穂は膝に顔を埋めて泣きだしていた。

声をあげないように、小さくしゃくりあげている。今の痛みで、ようやく感情の一部が戻ってきたらしい。

「痛ぁい……」

身体を丸めて、瑞穂がくりかえした。

亮介は、かすかに息をついた。

ゆっくりと、彼女の隣に自分も座りこむ。

「……怖かったよね……ごめん、気がつかなくて……」

何も答えず、瑞穂は泣きつづけている。いつも元気な彼女に似合わない、それはあんまり心細い姿に見えた。

――その肩を抱きしめたい衝動が急激に襲ってきて、亮介は愕然として両の拳を握りしめた。一瞬、自分の気持ちが理解できなかった。

まさか。そんなつもりじゃなかった。そんな相手じゃなくて。

そうじゃなくて……何？

「先輩……」

涙声で、瑞穂が呼んだ。

「何？」

動悸が声を震わせそうで、亮介は低く答えた。彼女はそれには気づかなかったようだった。

「やっぱり、先輩のほうが可哀相……」

「え？」

「先輩のほうが、可哀相です」

瑞穂はそれだけ言って、どういう意味かは語らなかった。

ことは『小物妖者のいたずら』では済まないかもしれない、との認識が、十九郎にはあった。そう言われると、諒も表情を曇らせずにはいられなかった。

今回の件で『髪切り』には始末をつける、と斎伽忍は明言したのだ。

それが果たせなかったということは……。

「まだ、この区域は要注意だと思うんだ」

十九郎が言う。何も終わってはいないのだ。

「どうしましょうかね……」

諒は人差し指で額を掻いた。朱雀剣はすでに消してある。

隣に立つ冴子は、複雑な顔で、あえて無言を通していた。諒も別に、冴子からコメントを引き出そうとは思っていない。

「……やっぱり忍でしょう、ここは」

しばし考えたが、結局その台詞しか出てこなかった。十九郎が目を上げた。

「そうだな。俺も同じ考えだ。——電話、してくるよ」

「なんだったら俺が行きますが」

「いや……水沢は、冴子さんを」

本当は、こういう状況で忍と連絡をとるのは、あまり気の進む方策ではないのだ。これはまぎれもなく、失敗の報告なのである。

が、そういう時こそ忍の判断を仰がねばならないのが辛いところだった。諒と冴子をその場に残し、十九郎は近くの公衆電話まで足を運んだ。

（……いや、そうじゃない）

十九郎は内心で呟いた。
自ら辛い役目を引き受けた——二人には、そう思われたかもしれない。しかしきっと違うのだ。自分はただ。
（あの人が、見えなくなっているだけだ……）
それはエゴイズムだろうか。十九郎は自問しながら、夜道を急いだ。

＊　＊　＊

……そして、電話のベルは鳴りつづけていた。
斎伽忍は、それを見つめた。身じろぎもしなかった。
相手はわかっていた。何故か、わかった。それは里見十九郎でなければならなかった。
彼はその受話器を取るべきではなかった。立ち上がって手をのばすべきではなかった。何者かが、遠くから彼に警告を送っていた。
一瞬だけ、忍は瞼を閉じ、そして開いた。
——汝、天なる者なれば——
無駄のない動きで、彼は立ち上がった。次に起こることはとうに知っていた。
「！」

凄まじい重力の枷が彼を冥府へ引き込もうとした。斎伽忍は精神力だけでそれに抗した。身体の重心を保つことに、彼はなんとか成功する。響くベルの音。

彼を呼ぶ、いくつもの声。

確定した未来に逆らうように、忍はさらに一歩、足を踏み出した。

しかし今度は確実に、彼の視野は闇に奪われた。

悪夢にも似た脱力感。支える術はなく、彼は冷ややかな床の上に両の膝をついていた。

ベルはまだ鳴っているのか。全身を吹きぬける嵐は、つづいて聴覚も亡きものと化す。

蠟のごとく色を失った頬を、汗が伝った。

見えぬ瞳をひらいたまま、背を貫く苦痛にそれ以上屈することを、忍は彼自身に禁じた。

――汝、天なる者なれば……――

問うことは叶えられぬか。

「天よ……」

言葉が、口をついて出た。斎伽忍は、無意識のうちに低く呼びかけていた。はるか永劫の彼方へ向けて。

天よ。

天よ、何故。

我が宿願、未だ千里の途上にて。

「……今をして我が命、奪い給うなるか……或いは」

声は跡切れ、言葉は続かなかった。

目を凝らしても何も瞳には映らない。風の音さえ聞こえない。息もできない。床へついた腕からはじわじわと感覚が失せてゆき……。

――愚かなりと……――

ふと、忍は微笑を浮かべた。

それはひどく純粋な笑みだった。光を放つかと見えるほどに、澄みきった表情だった。冷冽としてその美貌を彩る、それは鮮やかすぎる輝きだった。

――汝、浄土にありて我を嗤うがいい。

ついに最後の力も痩せた腕からは失われ、忍は目を閉じた。軽い衝撃が肩から伝わった。

「牙……」

牙を呼ばなければ。

暗い室内にその身を横たえて、意識が砕ける寸前に――彼が思考したのはそのことだった。

牙を呼び戻さなければ。それから。

それから……

＊　＊　＊

「！」

冴子が不意に片手で胸を押さえた。諒がふりかえる。

「い、痛っ……」

「おい？　――どうしたっ!?」

いきなり夜道に冴子がうずくまってしまい、諒は顔色を変えた。その肩に手をかけて、自分も地面にひざまずく。

「なんだおまえ、心臓なんか弱くないだろ!?」

「わ、わかんない、わかんないけど……」

苦しげに冴子は答え、荒い呼吸を何度かくりかえした。諒は右手で冴子の前髪をかきあげた。額はひやりと濡れて、熱はない。

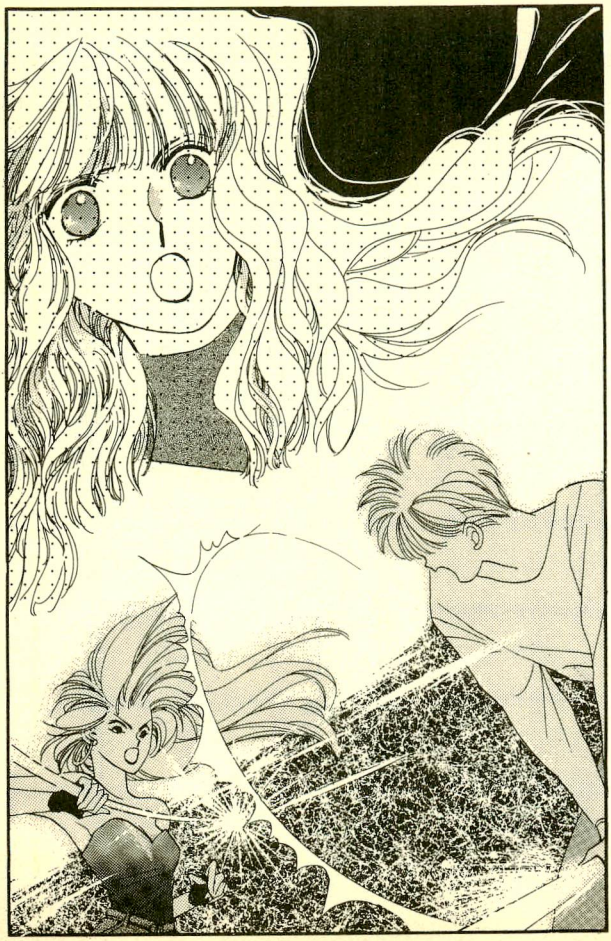
「貧血……とも違うな。心当たりは？」

冴子は首を横に振る。心臓といい肺といい激痛に覆われて、声も出なかった。

まだ十九郎は戻らない。諒は一瞬、このまま冴子を抱えて運ぶことも考えたが、下手に動かさないほうが得策と思い直した。いずれにしても、これは救急車ものだ。

「待ってろ、今、病院に連れてってやる。ちょっとだけ辛抱しろ！　頑張れ！」
顔をのぞきこむようにして、諒が言い聞かせる。冴子はくりかえし頷いた。
ダッシュしてその場を離れて――行きかけて、諒がふと足を止めた。
肩ごしに見返る。
冴子がいる。
冴子と。
「冴子っ!!」
諒が怒鳴った。ハッとして冴子が顔を上げた。
気配もなく背後に立った影は――女。
とっさに何もできなかった。目の前で、にィ、と女は凄絶な笑みを作った。ウェーブの髪に指を絡められていた。振り払う間もなかった。
ふつ、と音をたてて女の手中に髪が消えた。
……切られた!!
「貴様っ!!」
腹の底からの怒号とともに、諒が地面を蹴った。
女も身を翻した。疾風のように駆け出す。しかし今の諒にとってはスローモーションの動きだ。朱雀剣が光った。閃く！

ぎいん、と光剣同士が激突し、火花を散らした。
「うおおおっ!!」
一声咆えて、諒は無理やり朱雀を振りおろした。光剣で受けとめた女が、その両眼を見開いた。
光剣が、朱雀の勢いに負けた。剣そのものが、朱雀によって両断されたのだ。肩口から斜めに一直線、女の身体には浅い傷が灼きついた。
「ちぃっ!」
弥峨が舌打ちした。背中を向けて、後も見ずに逃走する。
「逃がすか!!」
怒りのままに諒が叫ぶ。なんとしてもとどめを刺さねばならなかった。
この女だけは、許せない。
「ちょっ……待……」
かすれた冴子の呼びかけは、諒には届かなかった。その目には敵の姿しか映っていない。アスファルトに片手をついて、冴子は諒の背中が遠ざかるのを見送った。
「深追いしたら……危ない、てば……」
うまく声が出ない。胸の痛みは、先刻よりは収まりはじめていた。
——近づいてくる足音があった。



冴子は目を上げた。十九郎だと思ったが、違った。
「牙……」
感情を表に出さぬ青年の姿をとり、伽羅王の〈使〉は冴子に歩み寄ってきた。
「間に合わなかったのですね……」
冴子の髪に目をとめ、ぽつりと呟く。冴子は必死に彼を仰ぎ見た。
「牙！　あのバカ、追っかけて、なんとかして！　早く！」
「……わかりました。立てますか？」
しかし牙は、諒の後を追うことはしなかった。
腕をさしのべられて、反射的に冴子はそれにつかまった。と、次の瞬間。
「！」
みぞおちに鋭い一撃を加えられて、冴子は気を失った。崩れる身体を、牙が支えた。
「失礼……」
彼女を両腕に抱きあげながら、牙が囁いた。
「忍様の、御命令です」

寝静まった住宅街を、弥峨は飛ぶように駆け抜けていく。

追ってくる足音は、少しずつ引き離され、そのうち完全に聞こえなくなった。しかし気を抜いたら最後だ。速度は緩めぬままで、弥峨はひたすら走りつづけた。

家の塀がとぎれ、女は左手に角を曲がる。

――直後。

「もらったっ！」

頭上から光剣が降ってきた。

瞬時に後転で女はそれをかわし、何歩か後ずさった。すかさず諒が斬りかかった。一度は光剣で止め、一度は身をそらして、かろうじて弥峨は朱雀から逃れた。さらに容赦なく諒が攻めこむ。

「おのれ、どこからっ……！」

いまいましげに弥峨が口走った。応答を期待した問いではない。

「屋根の上が好きでな、俺はっ！」

諒が怒鳴り返した。弥峨は再び舌打ちして、光剣を突き出す。

「甘い甘いっ!!」

がん、と朱雀剣がそれをはねのけ、がらあきになった女の懐へ迷わず諒は突っこもうとした。

「く！」

女が身を避ける。が、遅い。ひどく正確に諒は間合いをはかり、一気に仕上げにかかった。それは獣の動きだ。朱雀が風を切る！

「!?」

ぞっとして視線を投げたときには、手遅れだった。

女へ斬りこむまさにその隙を狙い、横ざまから凄まじい圧力が叩きつけられた。受け身もとれず、すぐ傍らのブロック塀に諒は左肩から激突した。

朱雀剣の光が消失する。

何が自分を襲ったのか、諒にはわからなかった。ごく短い……しかし強烈な、炎？

ずる、と背中がブロック塀をすべった。目が眩む。全身に痺れが走る。左肩の激痛がなければ、とうに意識を失っていただろう。

新たな人影が、その場に現れた。それだけは、諒にも感知できた。

「……ネズミが」

侮蔑に満ちた声。

「弥峨。この程度の雑魚を相手に、そのなりは何事だ？」

「お恥ずかしゅうございます」

「私がいないと何もできんのだな、おまえは」

それはまだ若い男のものだった。

視界がブレる。頭を振って、諒はその男の姿に目を凝らした。
おそらく、まだ十代の……。
「傷をつけられたな、弥峨」
立ち上がれずにいる諒の前で、その若者は弥峨に問いかけた。
「深手ではありませんが」
歌うように、女が答える。
「それだけの礼はせねばなるまいな」
生真面目な口調で、さらに彼は言った。
「若の御自由に……」
「ふん。私はな、面倒は嫌いだが、筋は通さねば気が済まない質でな」
諒は身を起こそうとした。この相手はまずい。これは、関わってはならない相手だ。このままでは。
「見苦しい」
若者が顔をしかめ、片腕を振り上げた。
「雑魚は雑魚らしく、地に這っておればいいのだ！」
振りおろした腕から放たれたのは、灼熱の塊だった。逃れる術はなく、毒気と火炎が一丸となって諒の身の内側をかけめぐった。痛覚を焼き殺すような衝撃が全身を襲い、絶叫しように

も声が出なかった。

「……ァッ、ハ、アッ……」

肺で詰まった呼吸を、無我夢中で回復する。

地面と塀の接点に、まるで雑巾のように転がって、諒は喘いだ。体のどこにも力が入らない。

歪む光景の中で、笑みもせずに若者はこちらを見下ろしている。

――殺される。

理屈ではなく、本能的に諒は悟った。

この妖者なら、自分を殺せる。今すぐにでも。

「己の無力を嘆くことはないぞ。相手が悪かったのだ」

若者の声が届く。

「この剣司、雑魚を潰すにも力は惜しまぬ。せめて私の手にかかることを栄誉とするのだな」

(剣司?)

その名前を、諒は憶えていた。

三将の一人、ではないのか、九那妃の最高幹部。そんな大物が。

――知らなかったのか、忍は!?

「忍っ……!」

虚空へ呼びかけた諒の声は、さらなる一撃に遮られた。
感覚のすべてが業火の餌食となり、呼吸が止まり、アスファルトに立てた爪に朱の色が滲み、乾いた唇が動きを失い——やがて、何もかもが夜の静寂に呑みこまれた。それで、最後だった。

——つづく——

あとがき

なんかの間違いじゃないか？　と思わないでくださいね。ここであとがきです。か、かなり命知らずですけど、あとがきです。

そもそも、この『炎獄のディアーナ』は三部構成の話になっておりまして、後編には第二部、第三部が両方とも入る予定です。予定、という二文字が哀愁を誘いますね。どうなるんでしょうね、ほんとに。

だからさ、だからだよ、私も本当はもう少し話を進めたかったんだってば！　せめて第二部の途中くらいまでは、とか思ってさ。

だがしかし。

「ここで切りましょう」

と、担当のK様はおごそかに宣われたのであった。

「えええっ!?　ここで終わらせるんですか!?　あんまり極道じゃないですか、それって!?」

ビビる若木。（何が怖いって、そりゃ読者様のお怒りが恐ろしすぎるじゃないかっ）

「それは違うでしょ、この話が前後編で、しかもバラバラに出る時点で既に思いっきり極道でしょ!?　こうなったら極道に徹するしかないんです！」

「そ、そういえばそうだったですね」

というわけで、妙に納得した私はここであとがきを書くのだ。どうせ極道一直線だよ、なんとでも言ってくださいよ。うう。

わかりきったことですが、可及的速やかに後編を出します。はい。もう、この前編が発売される頃には後編も書きあがっているはずなのである。――あくまで予定、だけど。

物語の途中ですから、本編についてのコメントはなし。あえて私は何も言うまい……。

この本は、ハイスクール・オーラバスターシリーズの五冊目になります。

といっても四冊目『迷える羊に愛の手を』が番外編だったので、流れとしては三冊目の『十字架の少女』の続きなんですよね。すると、これってばなんと昨年の八月以来のオーラバスターということになるのであった。な、懐かしすぎるっ。みんな前の話、憶えてるのかなあ。作者も忘れそうだったもんなあ。

ようやくキャラが進級して喜んだのもつかの間、季節は一向に春から動かない。後編の出る時期が心配な若木であります。

あっ、そうか、これだけは明らかにしておくべきかもしれない。今回ひとりで気の毒な目に遭っていた出雲木皿くん（仮名）は、別に落第したとかいうわけじゃないです！　後編では大活躍です。任してください。

で、後は余計な話をしてると「んなヒマがあったら続きを出せよ、バカモノっ！」と叱られるだろうなと思うのですが、やはりいくつかご報告することがあるので、ここからは読みたい人だけ読んでくださいまし。（ううむ、また逃げ腰になっているな）

まずは、希沙良くんの誕生日、若木の誕生日、クリスマス、などなどにプレゼントやカードを送ってくださった皆様、本当にありがとうございました。希沙良も私も現金なところだけは似ておりますので……はっ、何を言っているんだ、私は。えーと、とっても嬉しかったです。大切にしますね。

さらに、その後には天下のバレンタインが来るわけですが……チョコレートその他を送ってくださった方々にも、連中に成り代わりまして、大感謝であります。

しかし今回は、これだけでは済まないのであった。このチョコレートについては、

「××君に一票！　集計の結果を公表してくださいねっ」

と念を押す人が多かったんですよ、これが。

なんとなーく、これをバラしたら一部に波紋を呼ぶ気もするけど。とりあえず順番だけ報告

します。

堂々一位が、実は和泉希沙良くんで。

二位が諒、三位が十九郎、同点四位が忍さんと亮介で、次点が若木でした。おかしいなあ、去年は諒がトップだったのに……ブツブツ（ちょっとだけ複雑な心境）。

希沙良くんといえば、『迷える羊』のあとがきに書いた、問題の『ジェニーちゃんのお友達のキサラちゃん』について、実に沢山の情報をいただきました。ありがとうございました！キサラちゃんは実在してたというのが真相でした。

寄せられた情報を総合しますと、その名も『大徳寺貴更』、浅草育ち、『ダイタン・カゲキ』の『フシギ少女』らしい。口が悪くてグラサンの似合うボーイッシュな女の子である。（タカラさんに内緒でCMしてるみたいだな）

そうか、やっぱり名は体をあらわすんですね。そうだったのかー。いい勉強になりました。

とか言って感心してたら、

「それをいうなら『イズミちゃん』もいるじゃないですか」

というお手紙が一通。これはもしかしてリカちゃんのお友達ですか？　なんかそんな気がするんだけど……。ひきつづき情報を乞うてもいいでしょうか。意外と奥の深い世界だったんですね。

イズミといえば。（ほらほら、この作為的な話運び）

ここでCMを二本ばかり。

オーラバスター以外の話を出すと言っといて、詳細が謎につつまれていた、例の本ですが。少し前に、ようやく日の目を見まして、現在本屋さんで売ってます。すでに知っていた人は偉い。知らなかった人は、見るだけでも見てやってね。『イズミ幻戦記』集英社スーパーファンタジー文庫、です。なんだか照れるなあ。

それから、もうひとつ。『天使』のあとがきで触れた、デビュー作の『AGE』、これもようやく活字になりまして、やっぱり現在本屋さんで売ってます。『コバルト・ノベル大賞入選作品集6』に収録されてますので、ぜひぜひ。こちらは、おなじみコバルト文庫です。

昔の作品だから、今見ると下手くそで泣けてきますが、下手は下手なりに、自分では好きな作品です。そういう意味では貴重な一作です。……それ以外の意味でも貴重だとますますいいんだけど、それは読む人が決めることなので。

まあ、どちらの作品も、とにかく面白く読んでもらえたら最高です。それでもって感想のお手紙、なんて戴いてしまったら至上の幸福です。おっヒマなー、ら、読んでねっ（あっ、これは懐かしいフレーズ。諒のは『呼んでねっ』だったけどね……なんて、今、この名前を出したら……いや……何も言うまい）。

お手紙といえば。

お返事が遅れまくっております。ごめんっ！　でも少しずつ出してますから、懲りずにまた書いてやってください。お手紙は宝です。

それにしても異常に返事が遅い、というときは、郵便事故の可能性もある。その手の不運にくじけず、住所と名前はきちんと書いて、（できれば返信用封筒も入れて）どしどしお手紙くださいまし。若木は待っている。

ということで以下続刊、乞御期待、などと恥ずかしいことを言いつつ退場する私であった。

いつもお世話になってるんですが、今回の作品については特に、友人のT杉M子さまに助力をいただきました。ありがとうございます。

若木未生

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50 東京都千代田区一ッ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座、A型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年4月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルト文庫に『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』がある。



炎獄のディアーナ（前編）

COBALT-SERIES

1991年5月10日　第1刷発行
1993年7月15日　第9刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（3230）6268（編集）
電話　東京（3230）6393（販売）
（3230）6080（制作）

印刷所　株式会社美松堂印刷所
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1991
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611531-X C0193

青春を考えるヴィヴィッドな文庫 コバルト文庫
〈好評発売中〉

若木未生の本

術者と妖者の闘いがくり広げる、人気のハイスクールオーラバスター。



天使はうまく踊れない
セイレーンの聖母
十字架の少女
迷える羊に愛の手を